
Heroine Life

ころ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Heroine Life

【Nコード】

N2519R

【作者名】

ころ太

【あらすじ】

平穩を望む無気力な少女・天吹千晴は、無意識にセクハラをしてしまうラッキースケベ体質のおかげで騒がしい毎日を過ごしていた。そんな彼女の元にある日突然、自称婚約者の少女がやってきて、なぜか一緒に住むことになってしまう。その日を境に千晴の日常は少しずつ変わり始め、そして本人も変わっていくことになる。

これは問題児のヒロインと、そんな彼女を見守るヒロインのお話。

* サイトから転載しています。

これは、はじまり

バスの窓から見える景色は、青い空と連なる山と広大な畑と、ときどき民家。

大して面白い物ではないけれど、目的地に着くまで暇なので流れる風景をただぼんやりと眺めていた。

整備されていない荒れた道を走っているので、ガタガタと車体が揺れたり大きく跳ねたりする。

いつものことなので今ではすっかり慣れてしまったが、越してきたばかりの頃は酔って気分が悪くなり大変だった。

(……この町にきて、もうすぐ5年だっけ)

私こと天吹千晴は、中学の時に祖母に引き取られてこの小さな町に引っ越してきた。

人口は少なく交通も不便で何もないとこだけ、何となく私はこの町を気に入っている。

それは多分、のんびりした町の空気が自分に合っているからではないかと思う。

私が望んでいるのは刺激的で賑やかな毎日ではなく、至って平凡で緩やかな日々だったから。

不満があるとすれば、家から学校までの距離だろう。

家からバス停まで歩いて20分、バスに乗って20分、降りた所からさらに20分歩かなくてはいけない。

通学に1時間掛かるのは結構辛いし、田舎だからバスの本数も少なくて乗り遅れれば大遅刻なんて事もある。

一度帰りの最終バスに乗り遅れてしまい、2時間かけて歩いて帰ったこともあった。

原付の免許が欲しいところだけど、うちの学校は卒業するまで免許取得を許可していない。田舎なのに酷い規則である。

他にも不満がないわけではないが、それはこの町のせいではなく自分に問題があるので文句を言っても仕方がないことだ。

…その自分の“問題”さえなければ、もっと今の日常を好きになれていたかもしれない。

『阿形湮ターミナル』、阿形湮ターミナル』

いつものバス停に着いたので座席から立ち上がり、定期を運転手に見せてからバスを降りる。

まだまだ昼間は暑いけれど、夏はすでに終わりを告げているので早朝は少しだけ肌寒い。

それでも外の空気は澄んでいてとても気持ち良く、清々しい気持ちになる。これも田舎の醍醐味の1つと言えるだろう。

私は大きく深呼吸をしてから気を引き締めて、学校に向かって歩き出す。

前方には同じ制服を来た学生や仕事に向かうリーマンたちがちらほらと歩いていった。

バスの時間に合わせて早い時間に登校しているけれど、意外と人通りは多い。

この辺りは駅が近いのもあり、建物も比較的たくさん建っている。

ここからもっと先に進んだところにはこの町で一番賑わっている商店街があり、そこに行けば必要なものは全て揃うので便利だ。

そちらには行かず、反対の道に向かうと私の通っている高校がある。だから私は商店街に続く道に背を向けて、学校へ続く道に足を向けた。

(……ん?)

いつものように通学路を歩いていると、道の真ん中で通行人に一生懸命話しかけている女の人がいた。

何か用紙とペンを持って道行く人に声を掛けているが、邪険にされて構って貰えないようだ。

きつと何かのアンケートだろうけど、協力するのも面倒なので目を合わせないようにして通り過ぎることにする。

「アンケートにご協力お願いします〜」

なるべく近くに寄らないよう歩いていたけど、運悪く補足されてしまい向こうから寄って来た。

心の中で舌打ちしつつそのまま無視してやり過ごそうとしたが、アンケートぐらい答えてもいいかな、とつい考えてしまったせいで足が止まる。

私が足を止めたので、すかさず女の人は嬉しそうに紙とペンを差し出した。

これはもう逃げられそうにないなあ。

「今、お時間ありますか？良かったらアンケートにご協力お願いします」

「はあ」

女の人はにっこりと笑っているけど、目が『絶対逃がさない』と言わんばかりに恐かった。

幸い時間はあるし、粗品も貰えるみたいだから別に逃げるつもりはない。あまり関わりたくないけど。

バイトかなんかでノルマがあるのか知らないけど、あまりにも必死

に見えて少し可愛そうに思えてくる。

人の少ないこんな田舎のアンケート調査は大変なのかもしれない。

「こちらにご記入をお願いします」

「わかりました……あっ」

アンケート用紙を受け取るうとした瞬間、突然強い風が吹いたので受け取り損ねてしまい、紙は空高く舞い上がってしまった。

ひらひらと落ちてくる紙を受け取るうと、上を向いて方向を確認しながら追いかける。

…が、足元を見ずに動いた為うっかり何かに躓いてしまい、バランスを大きく崩してしまう。

「げっ」

「きゃっ！」

(やば、こける)

なんて冷静に思いながらそのまま転びそうになったが、何か身体を支えるモノがないかと無意識に探っていた両手が、“何か”を掴むこれ幸いとその“何か”を両手でしっかり掴み、うまく態勢を立て直すことが出来たので、何とか転ばずにすんだ。……ああ、危なかったー。

安堵の息を吐いて顔を上げると、何故か真っ赤にして震えているさっきの女の人が至近距離にいた。

いつの間にこんな近くにいたのだらうと不思議に思ってから、ようやく自分が両手で掴んでいるモノに視線を向ける。

転びそうになって必死に掴んでいたのは、女性特有の2つのふくらみ。

直球に言っただけならば、おっぱい……胸である。

「……………えーっと」

よせばいいのに、ふにふにと手を動かして柔らかい感触を確かめてしまう。

これはそう、わざとではなくて条件反射というやつだ。だから、どうしようもないことなのだ。

そして悲しいことに、ある意味『経験豊富』な私は、この人の胸のサイズを手のひらの感触ですぐに把握してしまう。

……この人はDカップのようで……羨ましいことになかなかのサイズである。

(……………はっ!?)

アホなことを考えていると、女の人は段々小刻みに震えだして、涙目になっていった。

今までの経験から、次に彼女がとるであろう行動を簡単に予測できってしまう。知りたくもないのに。

余計なことをしないで早く逃げていけば、こんなことにはならなかっただろう。

いまさら後悔してもこの最悪の状況を変えられるわけじゃないんだけど、そう思わずにはいられない。

今の私に出来るのは、無駄な抵抗をせずこの後やってくるであろう被害者の報復を、甘んじて受け入れるだけだ。

「……………」

ぐっと目を閉じて覚悟を決めた。
私の心は穏やかで、とても落ち着いている　　そう、こんな状況
には、慣れているから。

いつでもどろどろ、と心の中で呟いた瞬間……朝の清々しい空気を
裂くような音が、周囲に響いた。

*

教室に入った途端、クラスメイト達が一齐に私の方を見る。
別に珍しいことでもないので、いちいち気にしない。
不躰な視線を無視してまっすぐ自分の席に向かい、何食わぬ顔で席
に着く。
鞆から教科書を取り出していると、一人のクラスメイトが堂々と私
の席に近づいてきた。

彼女の名前は「円堂美空」。私の数少ない友人の一人である。

「おはよう千晴。今日は遅かったじゃない……………ってどうしたのその頬」

「……………目立つ？」

私の顔：正確には私の右頬を見て、彼女は驚きの声を上げた。

鏡を見て確認する暇がなかったので、自分の頬が今どんな状態になっているのか解からない。

「それはもうくつきりはつきり手形がついてるわよ。相当強く叩かれたのね」

「んー、そうみたい」

「叩かれた理由は大体わかるけど」

「お察しのとおりだよ」

私が溜息を吐くと、美空は困ったように笑った。

「今日も絶対調じゃない、貴女のセクハラ体質」

「セクハラ体質って……………あのねえ」

体質というよりも、性質の悪い呪いみたいなモノかもしれない。

私は昔から自分の意思とは無関係に他人（特に女性）にセクハラ紛いの変態的行為をしてしまう。

解かりやすく例えるのなら、漫画やゲームの男主人公によくあるラッキースケベというやつだ。

うっかり転んで通りすがりの女子のスカートを下ろしたり、胸に顔を埋めたり揉んだり、押し倒したりなんて日常茶飯事。

男ならラッキーなのかもしれないけど、女の私にはラッキーどころ

ではなく迷惑な話だ。

ラッキースケベというよりは、アンラッキースケベと言ったほうがいいかもしれない。

この妙な体質のせいで恐がられ友人は片手で数えるほどしかおらず、周囲からは軽蔑の視線を向けられている。

わざとやっつてるわけではないのに、偶然とは思えないほど頻繁にやっつてしまう為、みんなに信じて貰えない。

例え同性同士だとしても、何回もやっつていれば冗談を通り越して気持ち悪いと思われるだろう。

そんなわけで私は変態だとか痴女だとかの不名誉な称号をつけられ、一部で有名な人間になってしまった。

穏やかな普通の日々を望んでいるのに、この体質のおかげで頻繁に騒ぎに巻き込まれてしまう。

「ふふ、貴女と出会った頃は大変だったわ」

美空とは中学に入学したばかりの時に初めて出会い、それ以来の長い付き合いだった。

出会ったばかりの頃は頻繁に私のセクハラ被害に会っていたけど、段々と慣れてきたのか

今では私の悪癖を自然と回避することが出来るようになった稀な人物だ。

「初対面でいきなりスカート脱がされたのよね。懐かしいわ」

「…その節は、誠に申し訳なく」

「気にしないで。今ではいい思い出のもの」

「いい思い出って……」

昔のことを思い出しているのか、彼女はおかしそうに笑っていた。

あの時の私が美空にしてしまったことは下手したら一生トラウマになつてしまいそんな酷い行為だったにも関わらず、気にしない素振りでも今もこうして友人でいてくれる。

ことだったのに。普通は信じて貰えない

それなのに彼女は信じてくれた。笑つて許してくれた。おかしい癖を持つてる私に、平然と接してくれた。

私も相当変な奴だと自負しているけど、彼女もかなり変な女の子だと思つ。

私と美空が話していると、周囲からヒソヒソと私のことを言つてるのであるう声が聞こえてきた。

「天吹さんの頬、手形ついてる…」

「きつとまたやったのよ…ほんと節操ない人よね」

「そのうち訴えられるんじゃない？」

声を潜めて聞こえないように話しているつもりなんだろうけど、しつかりこちらまで聞こえてきている。

うんざりするけど、私がやってしまったことは事実なのだから否定のしようがないし、故意じゃないと言っても前科が多すぎて信じて貰えないだろう。

好きに噂してくれて構わないけど、面倒なことだけは避けたい。面倒なことは嫌いなのだ。

美空にも聞こえたのか、声のする方を一瞥してから含み笑いを浮かべる。

「気になるのなら、黙らせましようか？」

「いい。別にいつものことだし、どうでもいいし」

「あら残念」

にこにこといひ笑顔を浮かべて残念がる美空。
黙らせるって一体何をするつもりだったんだろう。見惚れるような顔で笑ってるのに、その笑顔が凄く恐い。
まあ、彼女なりに気遣ってくれてるんだろっから、その気持ちは有難く受け取っておく。

「それより宿題見せてよ、数学と古文のやつ」
「駄目よ。自分でやらないと身につかないでしょう？」
「やつても解からないし時間も無いし、お願いします美空さま」

古文は午後からだけど、数学は2時間目だから今から解いてる時間はない。

私を手を合わせて頭を下げると、彼女は渋りながらも一度自分の机に戻ってノートを持ってきた。

「数学は見せてあげるけど、古文は自分でやりなさい。解からない所は教えてあげるから」
「ありがとう！」

呆れている美空から数学のノートを借りる。
いやはや助かった。持つべきものは頭のいい友人だ。

「お礼はデザート三日分でいいわよ」
「……お礼？」

「誰もタダで見せてあげるなんて言ってないわよ？それなりの対価を支払って貰わないとね」

「美空のケチ」
「嫌ならそのノート返しなさい」

「ぐぬぬ……わ、わかったよ。お礼はちゃんとするからノートは借

りる」

「ふふ、良い判断ね」

悔しがる私を見て、美空は満足そうに笑った。

彼女は人の良さそうな顔をしているが、実は一筋縄ではいかない小悪魔的な性格なのである。

それでも普段は面倒見が良く姉御肌で頼れる女性なので、周囲の評判は良い。

顔だって綺麗だしスタイルもいいから、男子からそれなりにモテているし、本人もそれを解かっているからフルに活用している。

……今はフリーみたいだけど、彼女と付き合う人は何かと振り回されて大変そうだなあ。

「何か失礼なこと考えてる？」

「べ、べつつにー」

「顔に書いてあるわよ」

目を逸らすと、人差し指で何度も頬をぶにぶにと突かれた。楽しそうで何よりである。

「あら、先生来たみたい。それじゃあまた後でね」

「はいよ」

自分の席に戻っていった美空を見送って、数学のノートを開いた。これから2時間目までに答えを写す作業を終わらせなければならぬ。

懸命に答えを写していると、気がつけば担任が教壇に立って点呼をとり始めていた。

まだ私の名前を呼んでいないみたいで、ホッとすする。

「天吹」

「はい」

「……………どうしたんだその類」

「蚊が止まってたみたいで、親切な人に叩かれました」

「そうか、お前も大変だなあ」

「……………」

しみじみと話しかける担任の類は、なぜか私と同じように手形がついており、真っ赤になっていた。

担任には同棲している可愛い恋人がいるらしいのだが、その恋人が嫉妬深くてよく喧嘩してるらしい。

多分、今日も喧嘩してその恋人にビンタされたんだろう。可哀想に。理由は違えど、同じ境遇の担任に同情してしまう。

私たちはお互い顔を見合わせ、同時に深い溜息を吐いた。

「ん…」

チャイムの音で目が覚めた。

まだ眠気が取れないので、顔を伏せたままぼーっとする。
午後の授業が始まってからその後の記憶が一切ないんだけど、いつの間に居眠りしてしまっただらうか。

耳を澄ましてみると、教室には誰もいないのか物音ひとつ聞こえない。

「……………」

何か、夢を見ていた気がする。

けれど何も思い出せないで、どうでもいい事なのかもしれない。
それに夢というものは覚えていることの方が少ないんだし、気にするだけ無駄だろう。

「あの、天吹さん」

「え」

名前を呼ばれたので伏せていた顔を上げると、目の前に大きな胸が視界いっぱい広がっていた。

(…………胸がしゃべった…………?)

つていやいや何を考えてるんだ、そんなん普通にありえないし。
それにこの無駄にデカイ胸の持ち主には心当たりがある。

「上原さん？」

「あ、起きてくれた」

さらに顔を上げて相手の顔を見ると、ふわりと柔らかい笑みを浮かべているのは、予想どおり上原さんだった。

彼女の名前は『上原菜月』。このクラスで一番のスタイルを持つ女の子である。

スタイルだけじゃなく他人想いの優しい性格や穏やかな雰囲気を持っているので、男女関係なく人気のあるふわふわした可愛い女の子だ。

誰にでも平等に接する彼女だからこそ、嫌われ者の私にも普通に接してくれている。

そして不用意に近づくから頻繁に私のセクハラの餌食になっている可哀想な被害者でもある。

「もう下校時間だよ」

「ああ、うん。……あれ、美空は？」

彼女の机を見ると、鞆がまだ残っているので先に帰ってはいないようだ。

「円堂さんなら職員室に行ってるよ。すぐ戻ってくるって言った」「ふうん」

それっきり会話が途切れる。

普通に会話できる相手だけど、特別仲が良いという訳でもないから何を話せばいいのかわからない。

彼女の周りにはいつも人が溢れていているし、話す機会なんて、朝と帰りの挨拶ぐらいしかなかった。

私は私で、色々面倒だから極力話しかけないようにしている。彼女は美空とは違って私のアレを回避することが出来ないし。

少し気まずいけど、美空が戻ってくるまでこのまま待ってるしかない。

私が黙っていると上原さんは何故かもしもじと不自然に身体を動か

してチラチラとこちらを見ている。
何か言いたいことでもあるのだろうか…凄く気になる。

「あ、天吹さんって、中学の時にこっちに引っ越してきたんだよね」
「うん」

「前はどんなところに住んでいたの？」

「…べつに普通のところ」

「ふ、普通…」

「うん」

「そ、そっかあ」

再び静まり返る教室、気まずい空気。

上原さんは気を使って話しかけてくれてるんだろっけど、私は口下手なのでうまく話を盛り上げることが出来ない。

とにかく早く帰ってきてきて美空さーん。

「あ…今更だけどなんで上原さん残ってるの？帰らないの？」

「えっ、う、ううん！私、最後に教室を閉める係だからっ」

そんな係があつたんだ、知らなかった。鍵をするのは担任か校務員のじいさんだとばかり。

って、あれ？ということは彼女が帰れないのは私のせいってことじゃないの？

……それならそうと、早く言ってくれば良かったのに。

「ごめん、すぐ教室出るから」

自分の鞆を掴んで立ち上がり、ついでに美空の鞆も取ってくる。

私が教室に残っていたら上原さんは鍵を閉めれないし、帰れない。

べつに教室の中じゃなくても、外で美空を待ってればいいのだから。

「あ、違うの！そんなつもりで言ったんじゃないで、それに私が好きで残ってたんだから……」
「いいよいいよ、気にしないで。閉めるの待っていてくれてありがとう」

これ以上彼女に迷惑をかけないように、さっさと教室を出ようと背を向ける。

「待つ……！」

上原さんの短い声と“ガツンッ”という小さな物音。

凄く嫌な予感がした。

そしてその予感は毎回かなりの高確率で的中してしまうのだ。
たとえ嫌な予感がしたとしても、私の身体は条件反射で後ろを振り返ってしまう。

後悔しつつも振り返って見たものは、今にも私の方に向かって倒れこんでくる上原さんだった。
驚きと困惑で避ける余裕なんてあるはずもなく

「おうつ！？」

「きゃああああ！」

がしゃーん

受け止めようと頑張ってみたけれど、小柄とはいえ勢いがついていた彼女を非力な自分の力ではしっかり支えることが出来なかった。周りにあった机や椅子を吹き飛ばして、私は上原さんの下敷きになっってしまう。

そして、非常に息苦しい。何故かと問われれば、彼女が私に覆いかぶさっているから。

もっと正確に言うのなら、彼女の豊満なバストが私の顔面に押し付けられているからだ。

うまく呼吸が出来ないので息が苦しい。

顔に満遍なく押し付けられている柔らかい感触が恥ずかしい。

そろそろ色々な意味で限界なので、なんとか彼女から逃れようと身動きする。

「うんっ……！」

「……………」

彼女の口から甘い声が漏れたので慌てて動きを止めた。下手に動く、とんでもないことになりそうな気がする。

うう、やましいことをしたわけじゃないのに凄く後ろめたい…………。

お、落ち着け、私。こんな状況はいつものことじゃないか。

とにかく早くどいてもらおうと、空いている片手で彼女の背中をバシバシと強めに叩く。

「わっ！……うん！……めんなさいっ！」

するとようやく彼女は下にいる私に気づいてくれたようで、慌てて退こうとする。

しかしうまく起き上がれないのか、なかなか退いてくれない。
そんな時

「千晴起きてるー？」

タイミング悪く、美空が教室のドアを開けて入ってきた。

動けないので視線だけを入り口の方に向けると、にこにこしていた美空の顔が次第に強張っていく。

彼女の目に映っているのは、きつと絡み合っている怪しい私たちの姿。

「…………ええと、お邪魔しましたあ」

照れ笑いを浮かべて、美空はドアに手をかけて去ろうとする。

あんにやろう、逃げる気だ。

声を出そうにも、柔らかい物体が押し付けられているので下手に口を動かせない。

「ままま待つてください円堂さあん！！」

「ふふ、冗談よ。また千晴の“アレ”なんでしょう？」

「……………」

くすくすと笑いながら美空はこっちに近づいてきて上原さんの手を取り、引っ張って起こしてあげた。

私の厄介な体質を理解してくれてる美空だったから良かったものの、他の人間だったらまたよからぬ噂が流れてたかもしれない。

「はあ…っ」

ようやく開放された私は大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出した。

息を整えてから身体を起こして立ち上がる。……うん、どこも怪我していないみたい。

「上原さんは、怪我はない？」

「う、うん。天吹さんのおかげで全然痛くなかったし……。でも、その、ごめんなさい、私のせいで」

申し訳なさそうに頭を下げられた。

顔を真っ赤にして泣きそうになっている彼女を責める訳にもいかない。

それに生真面目な彼女のことだから必要以上に責任を感じているのかもしれないし。

「これぐらいどうってことない。それに、いつも私の方が迷惑かけてるから」

主に性的なご迷惑を。

私の言ったことを理解して、今時珍しいぐらいに純粋な彼女はさらに顔を赤らめて恥ずかしそうに俯く。

しまった。余計なことを言ってしまった。

なんだか微妙な空気になってしまい、お互い口を閉じてしまう。

気まずくなってしまったこの空気を変えてくれたのは、やけに楽しそうな美空だった。

「ほらほら、倒しちゃった机と椅子を元に戻さないと。先生が来たら厄介だわ」

「う、うん！」

「はい」

私たちは皆で協力して机と椅子を起こし、元通りに並べていく。片付けが終わってから教室を出て、校門で帰り道が別方向の2人と別れた。

そして……バス停に向かつて歩き出した時に、最後のバスの時間を過ぎていることに気がついて泣きたくなくなった。

*

黙々と歩いているうちにいつの間にか陽も沈んでしまって、辺りはすっかり暗くなってる。

明かりのついている家が少ないので、ぽつぽつと設置されている街灯を頼りに歩くしかない。

バスを逃してしまった私はひたすら歩いて帰るしかなく、家にたどり着いたのはいつもより1時間も遅い時間だった。

厳つい字で『松璃』と書かれた表札がかかっているこの素朴な家が、私の住んでいるところだ。

「ただいまー」

(……あれ?)

ガラガラと玄関を開けると、見慣れない靴が一足並んでいる。誰かお客さんが来ているのだろうか？

靴を見る限り若い人のものみただけだ。

靴を脱いで上がるうとしていている時に、奥の部屋から見知らぬ誰かが出迎えてくれた。

きつとこの人が見慣れない靴の所有者なんだろう。

「おかえりなさい」

「え、あ、ただいま」

自然に挨拶をされたので、こちらも自然と挨拶を返してしまう。

驚いている私とは対照的に彼女は落ち着いていて、柔らかい笑顔を浮かべている。

その笑顔は女の私から見てもとても魅力的なもので、男だったらこの時点で惚れているかもしれない。

それに日本人離れた整った顔、モデルのように出るトコ出て引き締まった体躯…そして何よりサラサラと流れるような綺麗な金髪が印象的だった。

年は私と同年代くらいかと思うけれど、落ち着き払った感じや顔立ちが大人っぽいので、もしかしたら年上なのかもしれない。

綺麗な金髪は染めたようには見えないし瞳も青いので、外国の人なんだろうか。

いや、でもさつき流暢な日本語で挨拶されたような…。

「おや千晴、帰ったのかい」

金髪美少女の後ろから見知った老婆が姿を現す。

この人は『松璃 久野』。両親のいない私を引き取ってくれた、この世で唯一血の繋がりのある家族で、祖母である。

「ただいま、ばあちゃん」

「今日は随分遅かったねえ。まーたどこかで女の子と宜しくやってるんじゃないかと思ってたところさ」

「やってないっ！バスに乗り遅れて歩いて帰ってきたから遅くなったの！」

「おやおや、間抜けだねえ」

「ぐぬぬう……」

「まあまあ」

金髪の美少女が熱くなった私を宥めてくれる。

知らない人に気を使わせてしまったので、すぐに冷静になり怒りが収まった。

「それより、この人誰？ばあちゃんの知り合い？」

視線を金髪美少女に向けると、彼女はにっこりと笑みを深める。

「ああ、その子は私の知り合いの娘さんでね。『大須賀 柚葉』と言うんだ」

ばあちゃんに紹介されると、彼女は丁寧に頭を下げた。

雰囲気から仕草の一つ一つまで上品で、どこかのお嬢様なんじゃないかと思ってしまう。実際そうなのかもしれない。

「初めまして。大須賀 柚葉と申します」

「……天吹千晴です」

なんとなく照れくさくて、ぶっきらぼうに自己紹介をする。

だって目の前の美少女が無防備な笑顔で私のこと見てるんだもんよ。初対面の相手にこんな眩しい笑顔を向けられるのは初めてだ。

「くく、何照れてんだい」

「なっ！て、照れてないっつーの！」

「千晴さん、これから宜しくお願いしますね」

「え！？ あ、うん、よ、宜しくね」

いきなり両手で手をぎゅっと握られたので、驚いた。

きっと彼女は私のことを知らないから、こんなことができるんだろ
う。

私のことを知っているのなら絶対近づかないだろうし、ましてやこ
んなに強く手なんて握らないから。

それにしても、同年代の子に手を握られるのは久しぶりかもしれな
い。いや、どうでもいいんだけど。

「ばあちゃんの知り合いの子ってのは解かったけど、なんでウチに
いるわけ？」

「おや言ってなかったかい？ 今日からこの子は私達と一緒にこの家
で暮らすのさ」

今、しれっと大事なことを言ったよ、このばあちゃん。

一緒に暮らすって……………え？

「なっ、そんなん一言も聞いてないっ！！」

「そうだったかねえ…この年になると物忘れが酷くて酷くて。嫌だ
ねえ年をとるのは」

「誤魔化すな！何勝手に居候増やしてんのさ！！」

この家は元々ばあちゃんの家で、私も居候の一人にすぎないのだから

ら文句を言う権利はない。

でも、私のセクハラ体質を知ってるのに居候（しかも女の子）を増やすなんて何を考えてるんだらうか。

ただでさえ外で散々面倒なことばかりなのに、家でも気を張っていないといけないなんて、まっぴらごめんだ。

「何が気に入らないんだい？こんな美人そうそういないよ？」

「見た目じゃないっ！その、私の体質のこと知ってるでしょ！？」

「ああ知ってるさ。でも彼女は大丈夫だから気にすることはないよ」「え」

彼女の方を見ると、変わらず笑みを浮かべている。

大丈夫ってどういうこと？

「はい、大丈夫です。千晴さんのことは聞いていますし……私は平気ですから」

平気ってどういう意味！？

ばあちゃんはニヤニヤと意地の悪い顔をして、彼女
大須賀柚
葉さんの肩に手を乗せた。

そして思わず耳を疑ってしまふような、非現実的な言葉を私に告げる。

「なんせ彼女はアンタの婚約者だからね」

「……………」

私、疲れてるのかな。

ばあちゃんの言ってることが全然理解できない。

「だからアンタが柚葉を押し倒そうが何しようが問題ないってことさ。はい、解決」

「ちよつと待て。解決してない。何もかもが解決してないし、根本的におかしいんですけど」

「いちいち細かい子だねえ」

「細かいくないっ！婚約者って何！？私、そんなん全然知らないし、第一、女同士じゃん！！」

そもそも女同士だから結婚できないし、婚約もできないはずだ。

だから女の私に女の婚約者がいるなんて話は絶対におかしい。無理がありすぎる。

「だからなんだってんだい。そりゃ法律上結婚はできないけど、愛があれば形だけでも結婚は出来るさ。

まー、ひ孫が見れないのはちよつと残念だけどねえ」

「おばあ様、海外には同姓で結婚できる国もありますよ」

「お、そりゃいいね。どうしても結婚したけりゃその手もありだ」

「はいはいストップストップ！！ちよつと私の話を聞いてくれるかな！？」

痛くなった頭を抑えて、結婚云々で盛り上がっている2人の会話を止める。

「まず、どうして大須賀さんが私の婚約者なの？そんな話聞いたこともないんだけど」

「…うーん、話せば長くなるからねえ。とにかくまあ、柚葉の親はアンタのこと認めてるから問題はないよ」

「え」

そう言っただけで祖母は一通の手紙を私に差し出したので、受け取って読んでみる。

達筆で尚且つ丁寧に書かれた手紙に目を通す……確かに要約すると『娘を宜しくお願いします』と書いてあるみたいだけど……。

どうなってるの大須賀さんのご両親。あっさり自分の娘を同性のよくわからん婚約者のところに預けるってどういうこと!？

「お、大須賀さんは、婚約者の件は納得してこの家に来たの？そんなわけないよね？」

「いえ、全て納得した上で、自分の意思で来ました」

「…いや、なんでそうなるの。嫌ならはつきり嫌だって言わないと。結婚とか、冗談で軽々しく言うもんじゃないし」

「嫌じゃないですよ？それに、冗談なんかじゃなく私は本気です」
「は？」

「私は、貴女のこと愛してますから」

頬を染めて、はにかむように爆弾発言を投下する大須賀柚葉さん。見た目は超美人でお淑やかな言動も素敵だし頬を染めて照れている今の表情も凄く可愛いと思うけれど……頭の中はちょっとオカシイんじゃないだろうか。

生まれて初めて告白されたけど、なんかもうそれどころじゃない。

「千晴さんじゃなければ、断っていました」
「いやいやいやいや私たち初対面ですよねえ!？」

うる覚えの過去を振り返ってみても、大須賀さんと出会った記憶はない。

金髪で綺麗な人だから一度会ったら絶対忘れないと思っただけど、私は物忘れが酷いので断言はできない。

「何言ってるんだい。あんたは柚葉と会ってるはずだよ？忘れるなんて薄情な子だね」

「はあっ!？え、いつ、嘘、本当!？」

大須賀さんは困ったような顔をして、小さく笑っただけだった。

……一瞬だけ寂しそうに見えたのはきつと見間違いに違いない。きっと、そうだ。そうに決まってる。

「ま、そのうち思い出さ。…ほらほら、いつまで玄関にいるんだい。居間でご飯食べるよ」

「ちよつと待って！話はまだ終わってないってば！まだ聞きたいことはたくさん…っ」

「今日は千晴さんの好きなエビフライを商店街で沢山買ってきましたけど……すぐに食べますか？」

「うん食べる」

「はい、すぐに準備しますね」

うぐぐ……。

悔しいけど、今は素直に頷いておく。

話はまだ終わってないけれど、実はさっきから空腹できゅーきゅーとお腹が鳴っていたのだ。

いつもならもうご飯を食べ終わってお風呂に入ってる時間だし、学校から歩いて帰ってきたので余計にお腹が空いて限界だった。腹が減っては戦は出来ぬというし、まずはお腹をいっぱい満たしてから話の続きをしよう。うん。

「……はあ」

晩御飯は嬉しいけれど、これからのことを考えると気が重い。

私たちは3人そろって居間へ歩いていく。

一番後ろを歩いている私は、前の2人に聞こえないようこっそりと嘆息した。

愛すべき日常へ

ピピピピピ…と耳障りな目覚まし時計の音が鳴っている。

聞き慣れた音だけど、いつ聞いても不快だ。目覚ましとして役には立つんだけど。

「む…時間か」

重たい頭を動かして時間を確かめると、無情にも時計の針はもう起きなければいけない数字を指していた。

まだ眠いけど、早く起きないとバスの時間に間に合わなくなってしまふ。

睡眠を欲する身体に鞭打って、うっかり二度寝しないよう上半身をゆっくりと起こした。

「よつと……」

目覚ましのアラームを止め、布団から抜け出してあくびをしながら大きく背伸びをする。

カーテンを開けて窓越しに外を眺めると、綺麗な青空が広がっていつでもいい天気だった。

こんなに天気がいいと清々しい気分になる。

(さてと……)

早く着替えて学校に行く準備をしないといけないから、のんびりしてる時間はない。

制服に着替えようと寝巻き代わりのTシャツを脱ごうとしたその瞬間、控えめに扉をノックする音が聞こえた。

返事をする前に扉が開いて誰かが入ってくるので、慌てて脱ぎかけのシャツを元に戻した。

「あ、もう起きてたんですね」

「……………」

「おはようございます」

「……………」

にこにこ気持ちの良い笑顔で挨拶をしてくれる新しい同居人。

彼女は…ええと、そう、大須賀柚葉。

顔を見るまですっかり彼女の存在を忘れていたけれど、思い出してしまったので先程までの清々しい気分は綺麗さっぱり吹き飛んでしまった。

私にとって彼女は非常に厄介で、面倒な存在なのである。

そう、昨日の晩。

納得がいかない私は晩御飯を食べた後、自称婚約者と名乗る彼女と話をしたのだ。

色々聞いて解かったことなのだが、どうやら彼女はつい先日まで海外で暮らしていたらしい。

元々は日本で育つたらしいのだけれど、父親の仕事の関係で外国に住んでいたという。

けれど今度は日本で仕事をする事になったので数年ぶりに日本に帰ってきたそうだ。

彼女は日本を離れる前、両親に『日本に帰ってきたら婚約者の元に行く』と約束していたそうで、その言葉通り私のところに来たらしい。

どうして私が彼女と婚約することになったのかと尋ねたら、上手く話を逸らされてしまった。

双方合意の上でのことらしいけど、私はそんなこと全く覚えていない。

とにかく私は婚約なんて認めないし、他人と一緒に住むなんて嫌だと自分の意見を2人に言った。

けれど言葉巧みに私の意見はかわされて、結局私の願いは叶わず彼女はしばらくこの家に住むことになった。

百歩譲って同居はいいだろう。まだ我慢できる。……でも婚約者というのは絶対に認めない。

だって、普通に考えておかしいと思う。女同士ということもあるけど、何より私は彼女のことを好きでも何でもないんだから。

まあ、昨日はその辺りでお開きになって、うやむやのまま話し合いは終わったんだけど。

「朝ご飯できてますよ」

「着替えるから、先に行つてて」

自然と冷たい声が出た。

婚約者だの同居だの言われなければ、もうちょっと好意的な態度も出来たのかもしれない。

それと私の了承なく部屋に入ってきたことも不機嫌になった原因のひとつだ。

自分のテリトリーに勝手に入られると、気分が悪くなる。

「わかりました、すぐ来てくださいね」

「……………」

パターン、と部屋の扉が静かに閉まる。

私の無愛想な態度を気にもせず、彼女は素直に部屋を出て行った。

……ちよつとだけ、胸が痛む。

いくら気に食わないとはいえ、もう少し愛想良くすればよかったかなと今更ながら後悔した。

気にしていないように見えたけど、それは表面だけで、内心は傷ついていたかもしれない。

もつとこう、違う言い方ってやつがあったのに。

ああもつ、これだから人付き合いつて面倒で苦手だ。

深く考えないようにして、着替えの続きを再開する。

ぐずぐずしてると遅刻してしまうので、さつさと制服に袖を通し、髪型を整えてから部屋を出た。

居間へ続く廊下を歩きながら、さっきの自分の態度を思い出す。

(やつぱり……さっきの態度は良くないよなあ)

婚約者云々の話はひとまず置いておくとして、彼女は別に何も悪いことをしていないのだ。

それに昨日はあまり話を出来なかったし、今日改めてもう一度話をしてみたほうがいいかもしれない。

彼女に対する態度を決めるのは、もつと彼女を知ってからでもいいだろう。

恐る恐る居間に入ると、大須賀さんがテーブルに朝食を並べていた。どうして彼女が朝ごはんを作っているのかというと、居候させてもらう身なのだからお手伝いをさせて欲しいと自ら申し出てきたのだ。あまり馴染まれるのも困るので最初はもちろん遠慮した。しかし彼女は意外と頑固で譲らなかつた。

しかたなくお願いすることにしたけれど、正直に言えば家事の苦手

な私にとってそれは有難いことだった。

それに質素なエプロンを身に着けて配膳している姿はなかなか様になっていて、まるで新妻のよう。

っていやいやいや、何考えてるんだ私は。寝ぼけてるのか。

「あ」

彼女は入り口に立っていた私に気づいて、こちらを振り向いた。

ついさつき冷たい態度をとってしまったのでなんとなく彼女と顔を合わせ辛い。

「千晴さん。ご飯よそつてきますから、座っててください」

「う、うん」

言われた通り、いつも自分が座っている定位置に座った。

目の前にはいつもと違う朝食らしい朝食が綺麗に並べられている。

いい匂いのする味噌汁、綺麗に巻かれた卵焼き、絶妙な焼き加減の

鮭…どれもこれも、凄く美味しそうだ。

これ、もしかして彼女が全部作ったんだらうか。

外国に住んでいたとは思えないほど、立派な日本食だ。

「はい、どうぞ」

「…ありがとうございます」

豪華な朝食に目を奪われていると、大須賀さんが来てご飯を渡してくれた。

炊き立ての艶々しているお米が食欲を掻き立てる。というか…ウチの古い炊飯器、まだ使えたんだなあ。

朝食の準備を終えた彼女は、エプロンを脱いで私の正面に座った。

「おばあ様は少し遅れるみたいですから、先に食べてほしいそうです」

「じゃあ……いただきます」

「いただきます」

彼女と2人きりの空間に気まずさを感じながら、箸を握り躊躇いがちに卵焼きを口に入れる。

噛めばふわっとした感触と、ちょうどいい濃さの味付けと、控えめな甘みが口いっぱい広がった。え、何コレ……超おいしい。

他の料理にも箸をつけてみると、どれもこれも美味しくて驚いた。どう表現すればいいのか解からないけど、とにかくこんな美味しい料理、初めて食べた。

「あの、お味はどうですか？」

夢中になって食べていると大須賀さんは箸を止めて私の方をじっと見つめていた。

どうやら私の評価が気になっているみたい。

「美味しい。こんなに美味しい料理、初めて食べた」

ぶつきらぼくに素直な感想を口にすると、大須賀さんはそれはそれは嬉しそうに顔をほころばせた。

お、美味しいといったただけなのに、そんなに喜ばなくてもいいと思うんだよね。そんな態度をとられるとなんだかこっちが照れる。

恥ずかしいのを誤魔化すように朝食を次々と口の中へ入れていく……うーん、やっぱり美味しい。

私もばあちゃんもまともな料理を作れないので、食事はいつもスーパ-の惣菜かコンビニ弁当か、酷い時はカップ麺ばかりだった。

朝食なんて面倒だから毎朝トーストをただ焼いて食べてたぐらいだし。

こんなに豪華な食事がうちの食卓に並ぶなんて信じられない。しかも朝から。

「お口に合ったのなら、良かったです」

「……………」

彼女にそんなつもりはないんだろうけど、美味しいご飯で懐柔されてる気分になる。

そりゃ居候の件や料理の腕は認めるけどだからといって婚約まで認めるつもりはない。断じてない。

自分の好きな相手くらい自分で決める。それに彼女だったら、私も他にいい相手が沢山いるはずだ。

「おかわりもありますから」

「ん」

まあでも、美味しいご飯が毎日食べられるってのは悪くない。

余計なことは考えず今は目の前のご飯を食べることに集中しよう。

黙々と2人きりで朝食をとっていると、ようやくばあちゃんが部屋に入ってきた。

じーっと値踏みするように私たちを見てからニヤリと笑う。

「おやまあ、そうしているとまるで新婚のようじゃないか」

「どこが!？」

「すっかり仲が深まったみたいで嬉しいねえ」

「ないない!絶対そんなことない!」

ばあちゃんはケラケラと笑いながらいつもの場所に座る。いつの間にか台所に行っていた大須賀さんが、ばあちゃんの目の前のテーブルにご飯を置いた。

「すまないね」

「いえ、お口に合うかどうかわかりませんが、どうぞ召し上がってください」

「千晴はこんなにお嫁さんを貰って幸せ者だ」

「ちよつと待って。私がいつお嫁さんを貰ったって？」

さりげなく話を進めないでほしいんだけど。

この調子だといつの間にか大須賀さんが私の嫁に確定してそうで恐ろしい。

私は今もこれからも彼女をお嫁さんにする気なんてさらさらないんだから。

「全く頑固だねえ。こんな器量よしで美人な子はそうそう居ないっていうのに」

「あのね、私は……」

「すまないね柚葉。この子は照れ屋なんだよ」

「違うっつーの……!」

「いいんですよ、無理に婚約者だと認めて貰おうとは思っていません。千晴さんは自分の気持ちに正直でいいんです。」

「……」

「でも、私は私で諦めません。千晴さんの事が好きっていうのは、本当のことですから」

「……勝手にすれば」

「はい」

本気なのか、何か裏があるのか、計りかねてしまつ。

けど、「冗談で言ってるようには見えなかった。彼女の目は本気で、強い意思をはつきり感じ取れる。

好きだと言われて悪い気はしないけれど……彼女の想いが真剣なものであるなら、尚更受け入れることは出来ない。

しばらく一緒に暮らしていれば、どうせ向こうが勝手に幻滅して離れてくれるだろう。それまでの辛抱だ。

「じちそうさま」

溜息を吐いて席を立つ。

時計を見ればそろそろ家を出ないとバスに乗り遅れてしまう時間だった。

「学校行ってくる」

「ああ、気をつけて行ってきな。あんまり女の子襲うんじゃないよ」

「…好きでやってる訳じゃないのに」

「千晴さん、これを」

「？」

小さめのバックを手渡されたので、中を覗き込んでみる。

あれ……これってもしかして。

「お弁当です」

「オベントウ」

「良かったらお昼に食べてください」

「あっ、ありがとう」

おお、これが噂に聞く手作り弁当かあ。

いつもお昼は購買のパンか学食で済ませてるから、お弁当を学校に持っていくのは初めてだった。

なんだろう…こつこつって、なんかムズムズしてくすぐつたいか
もしれない。

「いつてらっしやい」

「…いつてきます」

「朝からお熱いねえ…いつてらっしやいのチュウは？」

「しないっ…！」

「…あの、私は構いませんけど」

「いや、私が構うから」

顔を赤くしてモジモジするのはやめてください。

どうリアクションすればいいのか困るから。

これ以上余計なことを言われないように、私は慌てて家を出た。

*

教室に着いてからまず自分の席に荷物を置き、その後まっすぐ彼女の席へと向かう。

「おはよう美空」

「あら、おはよう千晴。今日も幸薄そうな顔してるわね」

机の上にファッション雑誌を広げて気だるそうに読んでいた友人に声を掛けると、ゆっくりと顔を上げて私の方を向いた。

彼女は家から学校までの距離が近いということもあり、いつも私より早く登校している。

家が近いのならぎりぎりまで寝ていられるだろうに、律儀に朝早く登校してくるなんて美空はほんとに真面目だと思う。

おっといけない。真面目な彼女に用件を伝えるのを忘れてた。

「美空さん、世界史の宿題見せて」

「……それは朝の挨拶のつもりかしら」

彼女の顔が、みるみる呆れ顔に変わっていく。

「毎朝毎朝おはようの次は宿題みせろって貴女ねえ……たまにはちゃんと自分でやりなさい」

「失礼な。そんな毎日言ってる……はず……うん、週に3・4回ぐらい……だよ」

「それでも十分多いわよ！あのね、千晴。私は宿題を見せたくないわけじゃなくて貴女の為を思って言ってるの。」

いつも言ってるけど自分でやらないと自分の為にならないでしょう？ただでさえ毎回テスト危ないくせに」

正論だけに何も言い返せない。

「ちゃんとわかってるつもりだけど、だって面倒だし……」

「千晴……？」

彼女の顔が、どんどん真っ黒な笑顔に変わっていく。

これ以上彼女を怒らせるとマズイ……そう本能が告げていたので、こくこくと頷いておく。

「わ、わかりました。頑張ります。でも、昨日は宿題なんてやって

る余裕はなかったんだよ」

「？ 何かあったの？」

聞き返されたけれど、答えに詰まってしまっ

『実は昨日、私の婚約者と名乗る金髪の美少女がうちに来て同居することになったんだよ』　なんて正直に言えるわけがない。

話したら爆笑されるか信じて貰えないかのどちらかだろうけど……後者ならまだいい。美空なら間違いなく前者だろう。

美空にあの子のことがバレると相当面倒なことになるので隠しておいたほうがいいかもしれない。

「いや、テレビが面白くて気がついたら寝る時間になってた」

「ふふふ、もう千晴ったら」

むにっ

「なにひゅんのー」

両手で両頬を摘まれてぐにぐにと引っ張られた。

今の私の顔はきつと誰にも見せられないような間抜け顔をしているに違いない。なんとという羞恥プレイ。

思う存分に私の頬を引っ張って楽しんだ美空は、飽きたのかようやう頬を放してくれた。

まったく、頬が伸びて弛んだらどうしてくれる。

「まあ、見せてあげたいのは山々なんだけど。私、世界史じゃなくて歴史を選択してるのよね。忘れてたでしょ？」

「うげっ」

そ、そういえばそうだった。社会の授業は選択で、美空と違う授業

をとってたんだっただ……。。

歴史の授業を選択している美空が世界史の宿題をやってるわけがない。忘れてた。すっかり忘れてた！

「潔く諦めなさいな」

「うう…」

こればかりはどうしようもないので、潔く世界史のじいさんに怒られるしかない。

今から宿題をやっても間に合わないだろうし。

諦めて自分の席に帰ろうとすると、美空に制服の袖を引っ張られた。

「ね、これのなかでどれがいいと思う？」

「？」

いきなり雑誌を押し付けてきたので、開いてあったページを覗き込んでみる。

ピンクや紫の派手な色使いと無駄にキラキラした装飾や文字ばかりのページは、見るだけで目が疲れそうだ。

目を凝らしてよく読んでみると、どうやらリングやピアスといったアクセの通販雑誌らしい。

この中からどれを買おうか迷っているの、私の意見が欲しいようだ。でも、私に聞くのは間違ってるんじゃないかな。

自慢じゃないけど、アクセのことについて知識なんてないし興味もないのだ。

でも真面目に選ばないと怒りそうだし、できるだけ真剣に考えてみよう。

私はしばらく眩しいページを凝視して品定めをし、これは良さそう

だなと思うモノを指差した。

「これとか」

「どう見ても数珠にしか見えないモノをチョイスしたわねっ!？」

「なんか魔除けの効果ありそうでよくない？」

「効能とかどうでもいいから。重視して欲しいのは見た目のよ、見・た・目」

「じゃあ自分で選んで自分の好きなアクセ買えば良いじゃん。私がセクシーなの知ってるでしょうに」

「まあそうよねえ」

「じゃあ最初から聞かないでよ」と言おうとした所で、誰かが私の隣に割り込んできて美空の雑誌を覗き込んだ。

このクラスで躊躇わず私の傍に寄ってくるのは、美空ともう一人しかいない。

ちらりと横目で隣に立っている人を見ると、予想通り上原さんだった。

私の視線に気づいたのか、上原さんも私の方に視線を向けてきたのでお互いの目が合ってしまう。

けれどすぐ慌てたように視線をそらされて、再び雑誌を食い入るように見ていた。

「上原ちゃんはどうだかいいと思う？」

「私はこのピンキーリングが可愛いと思うな」
「……………」

「あ、私もそれいいと思ってたのよ。変にゴテゴテしてないし、シンプルだけど綺麗なのよね」

「こっちも派手だけど形が……………」

「うんうん、珍しいわよね……………」

実に女の子らしい会話をして盛り上がっている美空と上原さん。興味のない私が話に加わっても邪魔だろうし、面倒なことにならないうちに自分の席に帰っちゃおうかな。

「天吹さんはどのアクセが好き、かな？」

どうしようか迷ってるうちに、上原さんに話しかけられて逃げるタイミングを失ってしまった。

はあ、私の好みのアクセね……。さっき見た時に気になっていたものがあつたのでそのページを開き指差す。

「これかな」

「わ、わぁー」

「またこの子は微妙なものを……ってそれアクセと言うより健康グッズじゃない!?」

私が選んだのは身体の健康を促すと書いてある磁気ネックレスだった。

シンプルで邪魔にならなさそうだし、健康にも良さそうだし、値段もお手頃でいいと思ったんだけど。

あ、ほら、健康部門で第一位って書いてある。

「もう、千晴は今度私と一緒に雑貨屋に行くわよ。そのセンスを徹底的に矯正してあげる」

「いいよ別に。面倒だし」

「あ、わ、私もっ……………!!」

「菜月ー!!!!!!」

上原さんが何か言おうとした時、その言葉を遮るようにクラスの女子が彼女を大声で呼んだ。

「どうやら上原さんがいつも一緒にいるグループの子みたい。」

彼女は困ったような顔をして、呼んでいる友人と私達を交互に何度も見ている。

いつまでたつても来ない彼女に痺れを切らしたのか、上原さんの友人はこつちに来て無言で彼女を連行していった。

「あらま、上原ちゃん連れてかれちゃった」

「上原さんはみんなの人気者だしね。嫌われ者の私の傍に置いとくのは我慢ならないんでしょ」

「ふふ、彼女がいなくなつて寂しい？」

「はあ？なんで」

意味が解からなくて顔を顰めると、美空は楽しそうな笑顔でよしよしと子供の機嫌をとるように私の頭を撫でた。

撫でられるのは嫌じゃないけど、子ども扱いされてるような気がして複雑な気分になる。

確かに美空は面倒見が良くて頼れるお姉さんのようだけど、私にとつては“お母さん”って感じかもしれない。

勉強しなさいとか真面目にやれとか何かと小言が多いし。

「千晴、席に戻ったほうがいいわよ。先生きたみたい」

「わ、本当だ。じゃあまた後で」

「ええ」

慌てて自分の席に戻り、椅子を引いて座る。

担任は全員が座つたのを確認してから点呼を取り始めた。

その後、いつもどおり代わり映えのしないホームルームを始める。

担任の声を聞き流しつつ今日の一時間目は何だったか考えていると、突然ガラッと教室の扉が開いた。誰かが遅刻してきたのかもしれない。そう軽く思いながらなんとなく出入り口の方を見てみる。

「……………っ!？」

思わず噴出しそうになった口を片手で塞ぎ、立ち上がりそうになった身体を机に押さえつける。

クラスの皆は入ってきた人物に目を奪われていたので、私の怪しい拳動を見られずに済んだのは良かったのだが。

さっき見たものが幻でありますようにと願いながら、前の人の背中に隠れるように身を潜め、もう一度前を見る。

(ああ、やっぱり……………)

私のささやかな願いは叶いそうもない。

「えー、突然だが転校生だ」

担任の言葉に教室がざわめく。

教室に入ってきた『彼女』は、教壇の上にいる担任の隣に並んで教室の中を見渡していた。

目が合いそうになったので慌てて顔を伏せる。

(何でここに彼女がいるんだろ……………)

あの金髪と青い瞳は間違いない。

信じたくないけど、信じざるを得ない。

「大須賀、自己紹介を頼む」

「はい。……今日からこのクラスに転入することになりました大須賀柚葉と言います。これからよろしくお願いします」

転校生らしい普通の挨拶をして、大須賀さんは少し引き攣り気味に微笑んだ。

クラスメイト達の視線を一斉に浴びているせいか、どこか緊張しているように見える。

昨日は頭が痛くなるような発言を堂々としていたので、こんなことで緊張しないタイプだと勝手に思っていた。

しかし彼女が普通の女の子のように縮こまっているので、凄く意外だった。いや、普通の女の子なんだろうけど。ちょっと言動に問題があるだけで。

周りから「金髪だ…碧眼だ…」「かわいい」「モデルみたい」など、クラスメイト達の彼女に対する評価が聞こえてくる。

転校生であることに加え彼女の目立つ容姿のこともあり、教室中が色めき立っていた。

楽しそうなクラスメイトとは反対に、私は痛くなった頭を抱えこむ。だってこの学校に転入してくるなんて一言も聞いてないんだよ。しかも同じクラスって何の偶然だこれ。

偶然と言うより裏で何らかの取引が行われているんじゃないかと想像してしまい、背筋がぞつとした。

「それじゃ、その空いてる席に座ってくれ」

「はい」

彼女は担任の示す席へ歩いていき、隣接した席の子に軽く挨拶をしてから座った。
大須賀さんの席はちょうど教室の真ん中辺りで、隣の席には美空が座っている。

ちなみに私の席は、外に面した窓側の一番後ろという私的ベストプレイスだったりする。

夏は日差しが眩しくて暑いけれど、今の季節は温かくて気持ちがいいのでこの場所は気に入っていた。

何より居眠りしても見つかりにくいってのが良い。

「これでHRは終わりだ。次は俺の授業だから、そのまま始めるぞ」

タイミングよくチャイムが鳴り、授業が始まる。

教科書を机の中から取り出して今日は真面目に授業を受けようと思っただけ、内容は全然頭に入ってきてくれなかった。

それが『彼女のせい』なのか、ただいつものように『やる気が沸かないだけ』なのか、どっちなのかは解からない。

担任が紡ぐ呪文のような言葉を聞きながら、私はただ窓の外をぼんやりと眺めていた。

休み時間になるとさっそく彼女はクラスの女子に取り囲まれていた。クラスのほとんどの女子が集まっているのか、凄い人数だ。

女子は目を輝かせて興味津々に大須賀さんを質問攻めしている。

男子もその輪に加わりたそうにしているが、女子の壁に阻まれて仕方なく遠くから見ているだけのようだ。

何人かの男子は固まって、ひそひそと彼女のことについて語り合っている。

話を聞くつもりはなかったけれど、女子たちの熱のこもった話し声がこつちまで聞こえてきた。

「ねえねえ、大須賀さんってもしかして日本人じゃないの？」

「半分は日本人ですよ。フランスと日本のハーフなんです」

ふーん、そうだったんだ。金髪だから外国の人だろうと思ってたけど、ハーフだったわけね。

昨日は同居と婚約の方がかりが気になってて歳とかその辺りのことは何も聞いてなかったな、そういえば。

それから色々な質問にも、彼女は嫌な顔ひとつせず丁寧に答えていた。

時に笑ったり、声を上げたり、楽しそうに話している。

まあ、上手くやれてるようで何よりだ。

「ちーはーるっ」

ぷにつ、と頬を人差し指で突いてきたのは、言うまでもなく美空だ。いつも楽しそうな顔をしている彼女がたまに羨ましいと思う。

もっと彼女のように気楽に生きることが出来たら、人生楽しくなりそうだな。

「さつきから転校生の方を気にしてるみたいだけど……珍しいわね、千晴が誰かに興味を持つなんて」

「そんなんじゃないよ」

「そう？でも彼女、授業中チラチラ貴女のほう見てたわよ？もしかして知り合い？」

「キノセイダヨ」

「怪しいわねえ」

どうせ美空にはすぐバレるんだろうけど、なるべくギリギリまで黙っていたい。

今日はクラスの人たちに囲まれて放して貰えないだろうから、向こうが私の所に来ることはないだろう。

家に帰ったら余計なことを言わないよう念入りに釘を刺しておいたほうがいいかもしれない。

これから色々面倒なことになりそうな予感がして、憂鬱な気分になった。

*

あつという間に午前の授業が終わり、昼休み。

いつもなら購買か学食に行くところだけど、今日は彼女が作ってくれた弁当がある。

教室の中で弁当を食べるのは普通のことなんだろうけど、何となく気恥ずかしいので別の場所で食べることにした。

さて、どこで食べようかと考えながら弁当の入った袋を掴んで教室を出ようとした時、美空に腕を掴まれた。

「千晴、今日は学食に行くの？」

「弁当があるから校庭で食べようかなーと」

「弁当？買ってきたの？」

「いや、作ってもら……」

（はっ！）

しまった。

余計なことを言ってしまった。

ほら案の定、美空は怪訝な目で私を見ている。

「作って貰ったって、誰に？千晴もおばあさんも料理できないじゃない」

「いや…その……………妖精？」

恐る恐る美空の方を見ると、これまた楽しそうな顔を浮かべていらつしゃいました。

これはアレだ。面白いモノを見つけた時の顔だ。こんな顔をしている時の彼女は、ある意味とても恐ろしく手に負えないのである。逃げようと思っても、腕を掴まれていて身動きができない。

「ふふ、千晴ったら。いつからそんなメルヘンな子になったのかしら」

「朝起きたらお弁当が置いてあったから、妖精さんが作ってくれたのかなあ…なんて、アハ、アハハ」

子供みたいな言い訳を並べている自分が恥ずかしくて、もう泣きたい気分だった。

……………せめてもう少しまともな言い訳を言えれば良かったんだけど。私のアホ。

「今日の千晴は様子がおかしいと思ってたけれど……………一体何を隠してるのかしら？」

「ベツニナニモ」

にっこりと笑っている彼女から目を逸らして、どう言い訳しようか必死に考えていた。

素直に言うべきか、それとも気合で取り繕うか、頭の中でぐるぐると選択肢が回っている。

私が何も言わないので痺れを切らしたのか、美空は私の腕を引っ張って歩き出した。

「美空？」

「お腹すいたし、ひとまず昼食をとりましょうか。校庭でいいのよね？」

「う、うん」

なんとかその場を凌げてホッと息を吐く。

どうせ後から根掘り葉掘り聞かれるだろうけど、それまでに上手い言い訳を考えておくでしょう。

教室を出てから自販機でお茶を買い、2人で校庭にやってきた。

陽のあたっているベンチが空いていたのでそこに座り、袋からお弁当を取り出してひざの上に乗せる。

隣を盗み見ると、美空も私と同じようにお弁当をひざの上に乗せていた。

すでに蓋を開けていて、色とりどりのおかずが敷き詰められた中身が見える。

「相変わらず美味しそうだね、美空のお弁当」

「ふふ、でしょう？」

まるで自分が作ったものを褒められたかのように喜んでいるが、美空のお弁当は彼女の母親が作ったものだ。

彼女は両親のことが大好きなので、親を褒められると、とても嬉しいらしい。

彼女の家に遊びに行くようになってから美空の両親と話すようになって

ったけど、確かに自慢したくなるような優しく素敵な人たちだった。

「お弁当食べないの？」

「あ、うん、食べるけど」

さて。

親が作ってくれたわけじゃないけれど、私の手元には手作りのお弁当がある。

朝食で彼女の料理の腕は確認済みだから不安はないはずなのに、何故かどきどきしながらお弁当の蓋を開けた。

「……………なん、だこれ」

お弁当の中身を見て、固まる。

目に飛び込んできたのは美味しそうなおかずの数々。それは何の問題もない。どれも美味しそうだ。

しかし問題があるのはご飯。どこから見ても普通のご飯なのだが、その上に桜でんぶが乗っているのが問題だった。

普通に乗っているのなら別に驚きはしない。でも、桜でんぶで大きく『ハート』の形を書いてあったら、どう思う？

「なにそれ愛妻弁当？」

「ですよねえ！？」

うう、不覚。美空に見られてしまったじゃないか…………。

驚いて放心していたので、蓋を閉じるのが遅くなってしまった。ていうかこの弁当のハートは嫌がらせだろうか？

「ちーはーるー？」

「……………何でしょう？」

「ここにここに。」

彼女の目が『正直に話せ』と言っている。

ど、どうしよう。包み隠さず正直に話すか、それともこの場から逃走するべきか。

どれが一番最善の行動なのかまったく見当がつかない。

「千晴さん」

「え」

名前を呼ばれたので声がした方を向くと、そこには大須賀さんが一人で立っていた。

教室でクラスの女子に囲まれていたはずなのに、どうして彼女がここにいるのだろう。

彼女は私に微笑んでから、隣に座っている美空の方に視線を向けた。なんだろう、すごく嫌な予感がするんだけど。

「ええと、そちらの方は確かお隣の席の……………」

「私は円堂美空。美空でいいわよ、大須賀ちゃん」

「はい、よろしくお願ひします美空さん」

「よろしくね」

お互いに自己紹介を済ませ、2人の間に和やかな空気が流れている。ごく普通のやりとりだ。

このまま何も起こらずに終わると思われたのだが。

「ところで大須賀さんって千晴の知り合いなの？」

「はい。私は千晴さんの婚約者なので、帰国を機に昨日から一つ屋根の下に住んでるんです」

「ぎゃあああー！！！」

さらりと言ったああああ！？

さすがの美空もドン引きですよ！！

「こ、婚約者？ええと、言葉通りだと千晴と大須賀ちゃんが婚約してるってことなの？」

「はい。でも法律上は結婚できませんから、正確には生涯ずっと一緒に居るといって『約束』みたいなものです。

それに千晴さんはそのことを覚えてませんし認めてくれませんか、本当は婚約者だなんて名乗れないんですけどね」

じゃあ最初から余計なことを言わないでくれれば良かったのに！
ま、まあでも、こんな冗談みたいなことを美空が信じるわけがない。
冗談で片付けられて終わりだ。

「もう、駄目じゃない千晴。そんな大事なことを忘れた挙句、無かつた事にして彼女を拒絶するなんて……酷すぎるわ」

ほーら信じた……って、信じた！？

しかも私が責められている不思議。

「み、美空！なんで素直に信じてるの！？ねえっ！？どう考えてもおかしいじゃんっ」

「ふふ、だって信じたほうが面白いし。それに大須賀ちゃんが嘘を言ってるようには見えないもの」

「美空さん……」

「頑張つてね大須賀ちゃん。この子、ちょっと捻くれてやる気がなくて面倒臭がりで変態だけど、根は良い子だから。見捨てないで

あげて」

「さり気なく私のこと貶してるよね美空。あと大須賀さんを焚き付けるのやめて」

私が睨みつけても美空はどこ吹く風で気にしていない様子。おいこら、あんたはどっちの味方だ。

「じゃあこの愛妻弁当も大須賀ちゃんが作ったの？」

「はい。料理は得意ですが、お弁当を作るのは初めてだったので頑張りました」

「そうだったんだ。なんて甲斐甲斐しい子……愛されてるわね、千晴」

「人事だと思つて……」

「だから楽しいんじゃない」

あんた、鬼だよ。

「はあ……だいたい大須賀さんはどうして余計なこと言つたの。そんな可笑しいこと言えば学校で普通に過ごせなくなる。

変態扱いされてる私に関われば大須賀さんだって同類だって思われる。クラスの子に聞いたでしょ？私のことは。

私のことなんて放つておけばいい。無視してくれていい。その事で責めたりなんてしない。だから学校では

「……普通つてなんでしょうか？」

「は？」

彼女はにっこりと笑つてから、私をじっと見つめる。

「千晴さんは優しいですね」

「なんっ……」

「私は千晴さんが思ってるような普通の学校生活なんて欲しくありません」

「……………」

「私が欲しいのは、貴女と一緒に過ごす生活です」

とてつもなく恥ずかしい台詞を言いおつた。鳥肌たったよ、悪い意味で。

「だから私は……………きゃっ!?!」

「大須賀さんっ…!?!」

こちらに歩み寄ってくる際、段差に足をとられたらしい。

私はお弁当を素早く横に置いて、ベンチから離れ彼女の元に駆け寄る。

「ちょ、2人とも!」

「…!?!」

お約束の展開に心の中で泣き叫びつつ、私は無我夢中で彼女を受け止める　はずだったのだが。

「げっ」

同じく私も違う段差に引っかかってしまい、簡単に体勢を崩してしまっ

どうにか持ちこたえようと踏ん張り気合で彼女を受け止めようと手を伸ばす。

ギリギリのところ彼女の身体に触れ、思いつき引き寄せた。

「……………あ」

掻き消えるような声。

結果的には彼女を受け止めることに成功したのだが、まあ、どうなつたのかは察してほしい。

私の予想通り『いつもの展開』になつてしまったのだ。

私の腕の中には大須賀さんが納まっている。

片手で彼女を抱きしめて、もう片方の手で地面を押さえ、膝をついて体を支えていた。非力なので、腕がふるふると震える。

彼女が地面に倒れないように強く抱きしめた為、密着度が半端ない。彼女の体の柔らかさとか、いい匂いとかを感じてしまい、微妙な気持ちになる。

彼女は押し黙り、体を固くして動かない。

さりげなく捲れ上がったスカートを下ろして整え、体を解放して座らせてあげる。

積極的にアプローチしてくるくせに、彼女はこういうことに免疫がないらしい。なんかホツとした。

「あ、ありがとうございます」

「いや…べつに…」

真っ赤になつて恥ずかしそうに私を見つめる大須賀さんに、私は言う。

「きつと、私の近くにいれば、こんなことばっかりだよ」

「それは…私の望むところです。まだその、ちょっと恥かしいですけど」

「あ、そう」

表情は隠しているが、私も恥ずかしい。何度も何度も女性にセクハラ行為を繰り返しているが、どうしても慣れない。一応弁解しておくが、嬉しくもない。

先に立ち上がって彼女に手を差し出すと、彼女は大事そうに私の手を握り、ゆっくりと立ち上がった。

「無理してるんじゃない？」

彼女は大きく首を横に振る。

「私を、貴女の傍に居させてください。それだけで、いいんです」
「……………」

私には何の取り柄もない。

勉強はできないし、運動だって出来るわけじゃない。

子供のような残念スタイルで料理や掃除といった家事全般も苦手なので、女の子としての魅力もない。

不真面目だし、面倒なことは大嫌いだし、セクハラ紛いのことをやらかすし、いつだって他人に迷惑ばかりかけてる。

性格は良いか悪いかの2択だったら即決で悪いと言われるタイプの人間だ。

私は、好かれるような奴じゃない。現に沢山の人間に嫌われてる。

「大須賀さんは物好きだね」

「…袖葉でいいです。私も千晴さんって呼んでますから」

「む…」

なんなんだろうね、いったい彼女は。
変態か。それとも変わった嗜好の持ち主か。
…何か、秘めた目的があるのか。

(まあ　　そんなん、どうでもいいか)

彼女が私と関わってどうなるうが、知ったことじゃない。面倒なんて見きれない。

でも。

「昼ごはん、食べようか…………… 柚葉」

「はいっ、千晴さん」

好意を向けられるのは厄介だけど、無理に邪険にする必要もない。
難しく考えないで普通に接すれば楽に違いない。

嬉しそうに柚葉は私の隣に座る。広いベンチなので、余裕で3人座れるのだ。

でもまあ、ようやくお昼にありつけるよ。

「いや、熱々じゃないの2人とも。見てて恥ずかしかったわ」

「は？どこが？」

「…でも、大須賀ちゃんのこと気に入っちゃったな、私」

「無視か」

「あ、ありがとうございます」

なんだろう、妙に美空の機嫌がいい。

これはこれで不気味で恐いな。

「あのつ千晴さん、私、『あーん』って食べさせるアレをやってみ
たいんですが」

「却下」

笑顔で即答する。

ほどほどに距離を保たないと……やっぱり危険だ大須賀柚葉。

トサツ

「？」

軽い音がしたので音がしたほうを向くと、近くの芝生の上にジュー
スの缶が転がっていた。

そのすぐ近くに何故か上原さんが呆然と立っていたので、もしかし
たら缶を落としたのは彼女なのかもしれない。

けど、どうしてそんな驚いた顔をしているんだろう？

とりあえずベンチから立ち上がり、ジュースの缶を拾い上げて上原
さんに渡してあげる。

「これ、上原さんのだよね？」

「え、あ、え……う、うん」

目に見えて挙動不審な彼女は、おずおずと缶を受け取った。

うーん、やっぱりなんだか様子がおかしい。顔色も少し悪いみたい
だし。

「上原さん、どうかした？」

「あの…天吹さん……」

「え、なに？」

「大須賀さんが婚約者って、本当……なの？」

「違います」

後ろでは美空が口を押さえて噴出しそうになるのを必死で我慢していた。

柚葉は良く解かっている顔で呑気に微笑んでいる。

ああもう、どいつもこいつも。

……平穩という二文字が手を振りながらどんどん遠のいていく気がする。

「はあ」

色々と疲れたので、溜息を漏らす。

とりあえず真面目に上原さんの誤解を解いておこう。

彼女が誰かに話すとは思えないけど、これ以上変な噂が広まるのも遠慮したいし念のため。

「ふふ、これから毎日楽しくなりそうねえ」

……いやほんと、楽しそうで羨ましいよ、美空。

厄介とお節介

「今日の授業はここまで。各自、復習しておけよー」

教師の合図で3時間目の授業が終わる。

勉強をしてるフリをして窓の外を眺めていた私は、開いていた教科書と何も書かれていない真っ白なノートを閉じた。

今気づいたことだが、英語の授業だったのに数学の教科書を出していたようだ。何も問題はなかったのだし、よしとしよう。

机の上にあるものを全部机の中に押し込んでみると、大須賀さんちの柚葉さんがパタパタと犬のように寄ってきた。

「千晴さん、千晴さんっ、次は体育ですから早く更衣室に行きましよう」

「わかった。わかったから制服を引っ張るのはやめて、皺になるから」

体育の授業が嬉しいのか、楽しそうに私のシャツをぐいぐいと引っ張って急かされる。

キツイし面倒だから体育の授業は嫌いだ。運動神経も残念なので成績も悪い。

憂鬱な気分で立ち上がり、体操服が入っている鞆を持って柚葉と一緒に教室を出ると、美空が廊下の壁に身を預けて待っていた。

「誰を待ってるの？」

「それはもちろん大須賀ちゃんよ。転校してきて初めての体育だか

ら、更衣室の場所がわからないと思って」

「ああ、なるほどね。柚葉、美空が更衣室に連れて行ってくれるってさ」

「え、千晴さんは一緒に行かないんですか？」

「私はトイレで着替えるから行かない。……美空、あと宜しく」「任せなさい」

柚葉はしばらく不思議な顔をしていたけど、なんとなく事情を察したのか何も言わずに頷いて美空について行った。

自分の口から事情を説明するのは面倒なので助かる。私が言わなくても、どうせ後で美空から聞かされるに違いない。

「おっと、急がないと」

休み時間は短いから急いで着替えないと授業に遅れてしまう。

チャイムが鳴る前にグラウンドに並んでいないと、罰としてトラック走りこみの刑になるのだ。それだけは避けたい。

近くの女子トイレに入り、急いで体操服に着替える。最後に学校指定のジャージを上下着て、着替え完了だ。

狭い個室で着替えるのは窮屈で大変だが、周りを気にしないでいいので気が楽だった。

私がトイレで着替えるのは、余計なトラブルを起こすことを防ぐためでもある。

実は何度か更衣室で着替えたことがあるんだけど、なぜか結構な確立で私のセクハラが発動してしまうのだ。

着替え中で薄着になった女の子にあーんなことやこーんなことをやってしまったので、更衣室での着替えを自粛している。

別にクラスの子から更衣室を使うと言われたわけじゃないけれど、悲しいことに変態痴女と認識されている私なので、

一緒の部屋で着替えようものなら蔑みの視線を向けられて嫌がられるのだ。

他人の目なんて気にしないけど、あのままずっと更衣室で着替えていたらいつか抗議されそうだったので
そうなる前にトイレで着替えることにした。面倒だけど、後々厄介ことになるくらいなら、このほうがいい。

着替えが終わったのでトイレから出て更衣室に向かう。

誰も居ないのを確認してから部屋に入り、荷物を自分のロッカーに入れて集合場所のグラウンドへ急いだ。

「千晴さん！」

「おい千晴、こっちよ！」

靴を履いて外に出ると、美空と柚葉が大きく手を振って私を呼んでいた。

美空は下だけジャージを履いて、柚葉は上だけジャージを着ている。ちなみにうちの学校の体操服の下は短パンだけど、未だにブルマ指定の学校ってあるんだろうか？

「げ、今日はハードル走かー」

2人の元に駆け寄って、グラウンドに準備されたハードルを眺める。100mの間に一定間隔で置かれているハードルを飛びつつ走らなければいけないらしい。

その向こう側を見てみると、男子は棒高跳びをやっているようだった。あっちの方が楽できそうでいいなあ。

しばらくすると体育教師がやってきたので、全員整列して準備体操

をはじめ。

それが終わるとハードル走をするために名簿順に並んだ。あいいうえお順なので、「天吹」の「あ」である私は一番最初に走らなければならない。

タイムを計るのかクラスの体育委員がストップウォッチを握ってゴール地点に立っている。

さっそく名前を呼ばれたので、スタートラインに並んだ。

「よいい、スタートっ！」

先生の合図で私は地を蹴り、走り出した。

すぐにハードルが迫ってきたのでタイミング良く飛んでから前足を真っ直ぐ伸ばして障害物を跨ぎ、引つかからないように後足をぬく。無事に一個目、二個目、三個目と順調にクリアして、スピードを一定に保ちながら走り抜けた。

100mとはいえ、障害物を飛ばなければいけないせいか、目の前のゴールを遠く感じてしまう。

そして最後のハードルに差し掛かり同じように飛び越えようとしたところで、間抜けなことに白黒の横木に後足がひっかかってしまった。

ゴール前で気を抜いてしまったのが仇になったようだ。

(しまっ…!?)

なんとか足を抜こうとハードルを離そうとしてみたが、思うように足が動いてくれない。

どうすることも出来ずクラスの皆が見守る中、ハードルを巻き込んでズザーッと砂埃を立てながら盛大にすっ転んでしまった。

ああ……今の私、最高に恥ずかしい格好でグラウンドに横たわってる……。情けなくて起き上がるのも億劫だ。

「千晴さんっ！」

緊迫した声が聞こえたので寝そべったまま振り向くと、柚葉が慌てて駆け寄ってきた。その後ろに美空と上原さんもいるみたい。

いつまでも地面と戯れてるわけにもいかないの、ゆっくりと体を起こして座る。

柚葉はジャージについた砂を払ってくれて、身体を支えてくれた。

「天吹さんっ、怪我はない!?!」

「……千晴、大丈夫?」

3人揃ってあまりにも真剣な顔で心配されたので、慌てて自分の身体を確認してみる。

足に力を入れて立ち上がり歩き回ってみたり、腕を回しても普通に動くので異常はないようだった。

「うん、全然平気」

「馬鹿っ!膝を怪我してるじゃないの!?!」

「膝?」

よく見てみると、左の膝の部分を擦り剥いてしまったのかジャージ越しに血が滲んでいた。

青いジャージに赤黒い血が滲んで、茶色っぽくなっている。

「あー、こんな擦り傷、ほっといてもすぐに治るって……」

「そんな軽い怪我じゃないよ!こんなに血が出るの!?!」

自分でジャージを捲りあげてみると、確かに左の膝は血だらけで見た目が酷いことになっていた。
早く水で洗って手当てして貰ったほうがいいかもしれないけど、これぐらいなら放っておいても治りそうな気がする。

美空たちにそう言ってみたら、3人同時に怒られてしまった。手厳しい。

(……………)

視線を感じたので後ろを振り返ると、クラスの皆に見られていた。耳を澄ませると、クラスの子たちが笑っているのか、遠くから耳障りな声が聞こえてくる。

流石に声が癩に障るんで、せめて聞こえないように笑ってくれればいいんだけどな。

あまり感情を顔に出すと美空とかお節介な人たちが気にしてしまうので、無心を装おう。

「天吹、大丈夫か？」

傷の具合を見ていると、ようやく先生が心配して駆けつけてくれた。今しゃがんで膝の怪我をじーっと凝視されてるんだけど……なんか照れるなあ。

怪我を確認して立ち上がった先生は、痛々しい表情をしていた。

「これは酷いな」

「血がいっぱい出てますけど、深くはないみたいなので大丈夫です」

「しかし保健室でちゃんと手当てしたほうが良さそうだな、ええと」「私が付き添います」

身体を支えてくれていた柚葉が、早々と名乗りを上げた。

連れて行ってってくれるのは助かるんだけど、酷く胸騒ぎがするのは何故だろう。

あれ、そういえば今日の午前中は保険医の先生が外出してて保健室には誰もいないって朝のホームルームで言ってたっけ？

……保健室で好意を向けられている女の子と2人きり……というシチュエーションはすごく嫌な予感がします。

「いや、一人で大丈夫だから」
「でも」

ついて来られると余計に悪化しそうです。
とは言えない。

同行を断つても、彼女は心配そうな表情のままなかなか身体を離してくれない。

大怪我したわけじゃないんだから、そんな辛そうな顔をしなくても大丈夫なのに。

「その足で一人で行くのは大変だろうし、クラスの保険委員に連れて行ってもらいなさい」

「保健委員……」

って誰だったっけ？

保健室に用がある時はいつも美空と一緒に行っていたから、保健委員のお世話にはなったことがない。

先生が言うことは拒否できないし、面倒だがその人と保健室に行くしかないだろう。

ていうか保健委員の人、私を連れて行くの嫌がるんじゃないだろうか。まあ、断られたら美空と行けばいいんだけど。むしろそのほう

がいい。

「あ、保健委員、私です」

「じゃあ上原、頼んだ」

すぐ傍にいた上原さんがおずおずと手を上げた。

名前もわからんクラスの子に介抱されるよりは上原さんの方が安心できるけど、不安がないわけでもない。

けれど先生のご指名だし、大人しく彼女にお願いすることにしたのだった。

名残惜しそうにしていた袖葉と交代して、身体を支えてくれてた上原さんと一緒に保健室に向かう。

その後……保健室でお約束の展開になったのは言うまでもないだろう。

彼女と私の名誉の為に、詳細は控えておくことにする。

手当てを済ませてグラウンドに戻ってくると、全員タイムを計り終えたのか、もう誰も走っていない。

座り込んでくつろいでいる美空たちをすぐ見つけたので、近寄っていく。

「お帰り二人とも。みんなもうタイム計り終わったわよ」

「そっか、お疲れさま」

「おやおやく？上原ちゃんの顔が赤いけど、また二人でナニやってたのかな？」

「手当てしてもらっただけ」

「へっ！？わ、私の顔、赤いの！？」

上原さんは両頬に手を当てて熱を確認しているようだった。
「うーん、確かに少し赤く見えるかも。あれから結構時間は経っているはずなだけどなあ。
美空は何があつたのかどうせわかつてるくせに、私たちを面白半分にからかつて楽しんでるんだろう。」

「千晴さん、浮気はいけないと思います」
「いや、浮気じゃないし」

何もしてな……いわけじゃないけど、わざとじゃないし、そんな関係でもないし、柚葉に言われる筋合いもない。

「そうそう。千晴は怪我してるから今度タイム計るらしいけど、上原ちゃんは今から計るみたいよ？ほら、先生呼んでる」
「わ、ほんとだ」

上原さんは一度だけ私の方を見てから慌てて手招きをしている先生の方へ駆けていった。
遠くなつていく彼女の後姿を見ると、突然ジャージの袖口を軽く引つ張られる。振り向けば柚葉が不安そうな顔でこちらを見ていた。

「千晴さん、怪我は大丈夫ですか？」
「ああ、うん。丁寧に手当てしてもらつたし、痛まないから平気」
「……………そうですか」

ホッと安堵の息を吐いて、心底安心しているようだ。
まさか擦り傷ひとつでここまで心配されるなんて思わなかった。
甲斐甲斐しいというか、心配性というか……そんなに気を使われる

と背中がムズムズする。

「ねえ、千晴。大須賀ちゃんって運動神経いいのね」

「そうなんだ」

「だってタイム15秒台よ？陸上部顔負けの速さじゃない」

体育が好きみたいだったし、そうじゃないかとは思ってた。

保健室にいたから実際には見ていないけれど、15秒台って相当速い方なんじゃないだろうか。

美空も運動神経はいい方だけど、その彼女がここまで驚いているんだから、それほど凄いんだろう。

勉強も出来るみたいだし運動も得意でおまけに容姿が端麗ってなんだそれ完璧すぎる。

「速さだけじゃなくてフォームも綺麗だったし、先生もみんなも見惚れてたわよ？」

「へえ……そりゃ凄い」

「そんなことないですよ。私は体を動かすのが好きなだけなので」

くっ、その謙虚さが余計に腹立つ。沢山のものを持っている彼女に比べて私は何も持っていないのだ。

どうでもいいと思っている心のどこかで、ないものねだりしている自分にも腹が立った。

「あ、ほらほら。上原ちゃんが走るみたいよ」

「本当だ」

美空に言われて目を向けると、スタートラインに立ち構えていた上原さんが、先生の掛け声と共に走り出したところだった。

スピードもそれなりに出ていて、リズムよくハードルを飛び越えて

いく。

決して速いとは言えないけどタイミングが安定していて、見て安心できる走りだった。

ちよつと足の抜き方が甘いけれど、それでも引つかからずに進んでいる。運動出来なさそうな人だと思っていたけど、そこそこ出来るらしい。

だが、そんなことよりも、私は彼女のある部分に目が惹きつけられていた。

「凄いよね、上原ちゃんの胸。ぶるんぶるんって凄い揺れてる」

「はい……羨ましいです」

どうやら私だけではなかったらしい。2人とも食い入るように上原さんの豊満な胸を凝視していた。

ハードルを跨ぐたびに彼女の大きな胸が弾んでいるので、どうしても気になってそこに目がいつってしまうのだ。

ジャージを着ていないから余計に胸やお尻が強調されて目立っている。

これは男じゃなくても誰でも見ちゃうと思う。あの大きさはしかたないと思う。

「あゝ千晴ってば上原ちゃんの胸ばかり見てるわね？もう、えっちなんだから」

「おいこら、自分だって興味津々に見てたじゃん」

「千晴さんって胸が大きいほうが好きなんですか？」

「わ、いきなり何か言いだした」

「そうねえ、千晴はどちらかと言えば大きいほうが好きだったわよね？」

「いや…胸のサイズとかどうでもいいし……興味ないし……」

「そ、そうですね」

私の答えに満足したのか、柚葉は嬉しそうに微笑んだ。

正直に言ってしまうえば、今までの経験からやっぱり胸は揉んだ際小さいよりも大きいほうが気持ちいいと思う。

質感とか、触り心地とか、やっぱり違うんだよね。こんな馬鹿らしいこと、一生誰にも言うつもりはないが。

いつの間にか走り終わっていた上原さんは、クラスの子達に囲まれて楽しそうに談笑しているようだった。

それからしばらくして号令がかかったので、急ぎ足で先生のもとに全員集合した。

「ハードルのタイム測定が終わったから、余った時間はクラスマッチの競技決めの時間にする。

体育委員を中心に仲良く話し合いで決めてくれ。それじゃあ解散」

話が終って先生がその場を離れると、皆はざわざわと騒いで競技を決める話し合いを始めた。

私はその集まりから少し離れたところで遠目に話し合いを眺めることにする。

(クラスマッチかあ…めんどくさ……)

うちの学校は体育祭がない代わりに、年に二回、クラス対抗のスポーツ大会が行われる。

春にも一度あったので、私は比較的在地味で楽な卓球を選び、シングルで適当に頑張って適当に終わった。

今回もできれば卓球を選べるといいんだけど、確か前回と同じ種目は選べなかつたはず。次に楽な種目は何だろう……そうだ、ドッジボールの外野手になれば苦労しなくて済みそうだ。

「天吹さん、ちよつといい？」

簡単そうな種目を考えていると、体育委員の人に話しかけられた。同じクラスだけど名前は覚えていない。

「ああ、種目？それなら」

「天吹さんは前回卓球だったわよね？それじゃあ今回は中距離走に出てもらうから」

「はあっ！？なんで！」

「前回のクラスマッチが一番楽な競技に出た人は、今回一番きつい競技に出てもらうことになったのよ」

「なっ」

どうしてそんなことになった。ていうか誰だそんなこと決めたヤツは！

中距離走といえば確か1000mで、この馬鹿広いトラックを3周ほど走らなきゃいけなかつた気がする。

どんなに頑張っても2周目でへばってしまふ私が3周も走れるわけがない。

「あのさ、私が運動できないって知ってるよね？中距離走は勝ちにいく気ないの？人選ミスだよ？」

「アンタが運動苦手なのも知ってるし、負けるつもりもない。だから頑張らなさい」

「無理だつてのー！」

「あ、もう決定事項だから取り消しきかないのよ。それから中距離走に出るのは私とアンタの2人だから。それじゃそういうことで宜しく」

「待てこら体育委員っ！！えーと、えーと、名前知らないけどその体育委員ー！！」

完全無視されて憤っている心配そうに柚葉が寄ってくる。

もうすっかり慣れたけど、隙あらば隣にいるんだよね…この子。

膝の怪我を気にしてくれているのか、さりげなく肩を貸してくれる。

「千晴さん。バレーで良かったら、代わりましょうか？」

「いや…いい…」

「でも」

「あの体育委員が許さないだろうし、無駄だと思う。ま、できる範囲で頑張るよ」

私の運動神経じゃクラスに貢献なんて出来そうもないけど、やるだけやってやる。

クラスの為に頑張るわけじゃないけど。

「無理なときは無理だって、言うてくさいね」

「……わかってるってば。心配しなくていいよべつに」

過保護な母親じゃあるまいし、そこまで甘やかしてくれなくてもいい。

美空といい柚葉といい、どうしてこう私の友人はお節介なのだろう。柚葉はもしかしたら着々と私の好感度を上げているつもりかもしれないが、残念ながらその手は食わない。

絶対に攻略されてたまるかっての。

彼女に借りていた肩を返そうとして、ふと違和感に気づいた。

あれ？ まさかとは思っけど。

「柚葉、もしかして……………」

「なんですか？」

きよとん、と首を傾げる彼女。

「…………いや、やっぱりなんでもない」

気になったことがあったけど、聞くのはやめておく。きっと私の気のせいだろう。

それより今気にしなければならぬのはクラスマッチのこと。

たかが中距離走だから死ぬわけじゃない。面倒だけどクラスマッチなんぞ適当に頑張っつて終わらせるさ。

「あの、千晴さん」

「ん？」

「その…………手が…………ですね……………」

消え入るような彼女の声と手の感触に違和感を感じて、恐る恐る腕の先を見る。

肩を貸してくれていたので肩に手を乗せていたはずなのに、どうして私の手は彼女の柔らかい胸元にあるのだろうか。

「ひぎゃあぁー……っ！！！！？」

「…………普通、悲鳴を上げるのは私の方だと思っんです」

頬を染めている彼女は、困ったように眉を下げ、小さく笑っていた。

* * *

夕日が差し込み、オレンジ色に染まった放課後の教室。

そこには3人の少女たちがひとつの机に集まって楽しそうに談笑していた。

とうに下校時間を過ぎていたのだが、くだらない話に花を咲かせているのかいつまで経っても帰る気配はない。

「今日の体育の授業のアイツ、まじ傑作だったよねー」

「なんか漫画みたいなコケかたしてなかった？」

「ほんつとトロイよね〜いつもぼけっとして何考えてるのかわかんないし。やらしいことでも考えてるのかな、あの変態」

「やだあ、もうまじ引くんですけどー」

どうやら彼女たちはクラスメイトの陰口を言い合っているらしい。

何が楽しいのか解からないが、ケラケラと品のない笑い声が室内に響いていた。

……自然と自分の口がっぴり上がって歪んでいく。ああ、私も笑いを堪えきれないかもしれない。

「でもさあ、なんで大須賀さんはあの変態にいつもくっついてんの？」

「なんか弱みとか握られてたりして！」

「ありえるう〜」

「大須賀さんと円堂さんマジかわいいそーだよねー」

「アハハハハハ」

(……………)

いい加減聞き飽きてきたことだし、そろそろ教室に入ろうか。

下で二人を待たせているから、あまり遅くなってしまうと心配してここまで迎えに来られる可能性がある。

さっさと用事を済ませて愉快的友人たちのもとへ戻らないといけない。

さて……私が突然教室に入ったら、陰口で盛り上がっている彼女たちはどんな反応をしてくれるだろうか。

ガラッ

「!?!」

気配を殺していた私は、教室のドアを勢いよく開けて中へと入った。途端に少女たちの話し声は消えて、みな驚いた顔で私の方を見ている。

これじゃ予想通りの反応すぎてつまらないくらいだ。

「ふふ、楽しそうな話してるじゃない」

「え、円堂さん」

困惑している彼女たちのもとに微笑を浮かべて近づいていく。私は何もしていないのだから、そんなに怯えなくてもいいんじゃないかと思う。

「忘れ物を取りに来ただけだ。ええつと……ああ、あった」

自分の席に寄って、机の中に入れっぱなしだった英語のノートを取り出した。

今日は英語の宿題があるからこれがないと困るので、わざわざ取り戻ってきたのだ。

ふふ、学校を出る前に気づいてよかった。

「ごめんなさいね、お話の邪魔をしちゃって」

「え、あの、ううん」「き、気にしないで……」「また、明日ねー」

私が普通に接したので先程の話の内容を聞き取れていないとでも思ったのか、彼女たちはぎこちなく笑って何もなかったように振舞っている。

平気でやり過ぎそうとしている彼女たちは、実に人間らしい。それに誤魔化すことも悪いことじゃない。

どうせこの場にあの子はいないのだし、余計な波風をたてることもない。

何も言わず教室を去ろうとドアに手を掛けたとき、信じられないことに彼女たちは小声で陰口を再開させていた。

まだ私が教室の中にも拘らず、だ。

「そっいえばアイツ、クラスマッチ中距離なんだよね」

「天吹嫌いな子が不公平っていつたらしいよ。楽な種目にさせたく
なかったっばい」

「アイツ運動音痴だから周回遅れで恥じかくんじゃない？いい気味
よねー」

「やっだ、うちのクラスの恥になるじゃん」

誰だって嘘をついたり、他人を貶めたりする。

私も善人とは言えないから、どこかの誰かを傷つけながら生きてい
る人間のひとりだろう。

でも、そんな私でも譲れないものや許せないことだってある。

ガタンッ！！！！！！

「……えっ！？」「」「」

近くにあった誰かの机を足で蹴っ飛ばしたら、周りの机や椅子を巻
き込んで倒れてしまった。

そんなに強く蹴ったつもりはなかったけど、加減がよくなかったら
しい。

大きく音を立てて倒れた机を見て、さっきまで楽しそうに笑ってい
た彼女たちは顔を青くした。

やっぱり、模範的で面白い反応をしてくれる。

「ああそつだ。言い忘れてたけど、大切な友人のことを悪く言うよ
うな酷い子には、私、容赦しないから」

「……っ！！？」

憤りで昂ぶっている感情とは違い、頭は妙に冷えていて、冷静に目の前の少女たちを見ている。

私を“止めてくれる”人がここにいないから、いつ感情が暴走してしまうかは解からない。

……そうならないうちにこの教室を出たほうが良さそうだ。私だけならまだいい、ここでキレたら千晴たちにも迷惑がかかる。

「…それじゃあね。今度から、陰口は陰で言ったほうがいいわよ」
できるだけいつもの調子で笑う。

固まっている彼女たちを一瞥してから教室を出ると、すぐ目の前に大須賀ちゃんが立っていて驚いた。

表情を変えることなく彼女はいつもの穏やかな瞳で私を見つめている。

「どうして、ここに」

「美空さんの戻りが遅くて千晴さんが拗ねてましたから、私が迎えに来ました」

「千晴は？」

「下で待ってますよ。膝を怪我してるので、大人しくしてもらってます」

「…そう」

どうやら時間をかけすぎたみたい。

ここにあの子が来ていないのは不幸中の幸いだ。

「声、聞こえてた？」

「すみません、立ち聞きするつもりはなかったんですが」

私もさつきまで教室の外で立ち聞きしていたのだから、聞こえるのは当然か。

「出来れば今あったことは、千晴には黙っててくれないかしら？」

「ええ、それはもちろんです。忘れろと仰るのならすぐに忘れませ

彼女は何事もなかったように至って普通の顔で了承してくれた。

騒ぎに動じることなく、詳しく問いただす事もせず、私の願いをすんなり聞き入れてくれる。

彼女は察しがよくて頭が回るようだから無駄な手間がかからなくて助かった。

「千晴さんが傷つくことを言うのは、私の望むところではありませんし」

なるほど。

本当に千晴には勿体無いくらいの出来たお嫁さんだ。なのにあの子は彼女を嫌がってるのよね、贅沢なことに。

こればかりは本人次第なのだから、私が横から口を出すことではないだろう。

それに、あの子が幸せであるのなら、細かいことはどうでもいい。

「それにしても、大須賀ちゃんは本当に千晴のことが大好きなのね」

「はい。……美空さんも、千晴さんのこと大好きですよね？」

にっこりと笑って、照れもせず真正面からとんでもないことを言う。

「……ふふっ、そうね。私も千晴のことが大好きなもの。私たち、とっても気が合うわね」

「そうですね」

この子は本当に面白い。そして、私と似ている気がする。だからだろうか。人見知りの私が、初めて会った時から警戒することなく接することができるのは。

それに千晴のことを大事にしてくれてるのもポイントが高い。婚約者だとか、わけのわからない部分が気になってはいるが、些細なことだ。

まだ出会って間もないけれど、あの子を本当に想ってくれているのは見ていてなんとなく解る。

「早く千晴のところに戻りましょうか。あんまり遅いとさらに拗ねちゃうから」

「はい」

どんなワケありの人間であろうと、あの子の友人が増えるのはいいことだと思う。

いつも強がってなかなか弱みを見せようとしなないけど、本当はとも脆い子なのだから、支えてくれる人は必要だ。

あの子のことを理解してくれる人はとても少ない。けれど、大須賀ちゃんや上原ちゃんのように歩み寄ってくれる人もいる。

私は、大切な人が心から笑ってくれるのなら、どんな努力も惜しまない。

そう、だからこそ

私の大切な人を傷つけようとする人間を、私は決して許さない。

明日はきっと

今日は日曜日なので、もちろん学校はお休み。

とくにやることがない私は昼食を食べたあと居間でのんびりとテレビを見ていた。

淡々と流れる旅番組は特別に面白いわけでもなく興味もないけれど、こうしてのんびりと安らぎのひとときを過ごせている。それだけで十分に幸せだった。

普段慌しくて落ち着けないからこそ、こういう穏やかな時間を至福と捉えてしまうのかもしれない。

外に出れば嫌でもトラブルに巻き込まれてしまうのだから、今日も大人しく家でごろごろしていようと思う。

しかし家にいたらいたで面倒を巻き起こす人物が約1名いるので、心から寛ぐことはできないのだが。

「千晴さん」

「ぎゃあああー！」

出たー！！

「そんなに驚かれると結構ショックなんです」

「……まだ慣れてないからしょうがないんです」

柚葉が居候することになってからもう2週間は経つ。

けれど、この家に自分とはあちゃん以外の人間がいることにいまだ慣れていないせいか、今のように急に話しかけられてしまうと驚いてしまうのだ。

それに彼女は2階の自室で勉強していると思っていたので、すっかり油断していた。

不満そうな顔をしていた彼女はすぐにいつもの表情に戻り、私の傍に腰を下ろす。

私が不快にならないようギリギリの距離感を保ってくれているので、一応は気を使ってくれてるんだと思う。

あまり近くに寄られると『また何かやってしまうんじゃないか』という不安に襲われてしまうことを、彼女はこの2週間で理解したようだ。

気を使ってくれるんならいつそのこと寄ってこないでくれると嬉しいんだけど、どうしても傍にいたいらしい。

「もう勉強終わったの?」

「はい。宿題も予習も終わらせました」

「ふーん……あとで宿題見せて」

「ごめんなさい。美空さんから絶対見せないようにと言われてます」

「あんにやろっ」

まさかすでに先手を打たれていたとは。

袖葉なら何も言わずに見せてくれると踏んだのだが、勘の鋭い友人のおかげで断念せざるをえない。美空はよほど私に勉強させたいらしい。

正解を書き写すだけでも勉強になると思うんだけどなあ………少なくとも全然やらないよりは幾分良いと思う。

しかたない。面倒だけど提出しないと宿題の量が2倍に増えてしまうので、寝る前に適当にやるか。

答えが間違っつていようが提出さえすればいいんだし。

「テレビ面白いですか?」

「いや、特に。暇つぶしに見ただけ」

「旅行番組ですか。今度3人でどこか旅行に行きたいですね」

「めんどくさいから嫌」

「ふふっ、そう言っと思ってました」

「……………」

考えてることを見透かされているようで面白くない。

私が顔をしかめると、彼女はくすくすと花の咲くような可愛い笑みを浮かべた。

何を言っても軽くあしらわれてしまいそうだったので、悔しいが大入しく口を噤む。

それからしばらく二人でテレビを見ていたけれど、徐々に柚葉の様子に変化してきた。

私の方をチラチラ見たり、なにやらもじもじと足を摺り合わせて落ち着かない様子。

こういう仕草をする時の彼女は大抵ろくでもないことを言い出す。

「ところで千晴さん。……あの、今、ふたりつきりで」

「あーっと！用事あったのすっかり忘れてたわー！」

嫌な予感がしたので彼女の言葉を遮るように慌てて立ち上がった。

…私の第六感が今すぐこの場から立ち去ったほうがいいと告げている。

ここは自分の直感を信じて速やかに退避したほうがいいかもしれない。

本当は用事なんてないので、部屋に籠って宿題をやるうか……いや、それだと勉強教えますよとか言い出して狭い部屋に二人つきり状態で悪化する恐れが。

それにはあちゃんばあちゃんは老人会の集まりで商店街に出かけているから、

今この家は私と柚葉の完全な二人つきり状態なのだ。
それならいつそのこと外に出かけて人の少ない道を散歩したほうが
落ち着けるかもしれない。よし、そうしよう。

「そういうわけで出掛けてくるから、柚葉は留守番お願いね」
「わかりました」

やたら残念そうな顔をしているが、どこに行くのか追求されずに済
んだのでほっとした。

彼女のことなので一緒について来そうだと思っていたのだが、あつ
さりと頷いてくれたのでちょっと拍子抜けだ。
しつこく付きまったり、かと思えば妙にあっさりと身を引いたり、
彼女の基準はよくわからない。
いつもベタベタされるよりはマシなんだけど。

「あ、千晴さん。今日の晩御飯は何が食べたいですか？」

居間を出ようしていた私の背に声がかかる。
食べたいもの…食べたいものね…。彼女が作る料理はどれも美味し
いので何でも良いんだけど、しいて言うのならば。

「エビフライ」

「……あの、昨日もエビフライしましたよね？」

「うん。美味しかった」

「あ、ありがとうございますっ。いえ、それは嬉しいんですけど、
結構頻繁にエビフライ作ってるような気が」

「そうだっけ？でも美味しいから何度食べても飽きないし、いいん
じゃない？」

「油物ですし、同じものだと栄養が偏ります」

「む、それじゃあハンバーグ。デミグラスじゃなくてケチャップソ

「スの」

「はい、わかりました…ふふ」

「? …なに?」

何故か笑われてしまったんだけど、何か変なこと言っただろうか？
自分の言ったことを思い返してみても、特に変なことは言ってない
ような気がする。

「ごめんなさい。つい、その……可愛いなあって思っちゃいまし
た」

「は?」

彼女が言った言葉が信じられなくて、間の抜けた声で聞き返してし
まう。

「エビフライにハンバーグ、それにカレーやオムライスも好きです
よね。」

千晴さんが好きな食べ物って小さな子供が好きそうなモノばかりだ
ったので、可愛いなって思ったんです」

幼子を見るような微笑ましい目で見られて、だんだん顔が熱くなっ
てくる。

「……いいでしょ、別に！私が何を好きだろうが自由だったの」

「はい、それはもちろんです」

「~~~~っ!!…ああもっつ、出かけてくるっ!」

「気をつけて行ってきて下さいね」

子ども扱いされているのが気に入らないのと、何ともいえない恥ず
かしさで頭に血が上ってしまう。

これ以上彼女にいいように翻弄されては堪らないので、急いで家を出た。

*

いつも利用している学校へ向かう道ではなく、その反対側の山に向かう道を歩く。登山しに行くわけじゃないが、こっちの道は人が少ないし静かなので散歩にはうってつけなのだ。少し距離はあるが麓までゆっくり歩いて、そこで折り返して帰ろうと思っている。

(平和だなあ)

周りには誰もおらず、聞こえるのは自然が奏でる音だけ。片側には広大な田んぼ、もう片側には林があり、草や木が沢山生えている。

綺麗な花が咲いていれば足を止め、気が済むまで眺めた。何も考えず、何も気にせず、ただただ目に映る景色を楽しみながらゆっくりと前へ進む。

緑に囲まれた道をこうして歩いているだけで、私の荒んだ心は癒されていくのだ。

……散歩とは、とてもいいものだと思う。今度から休みの日は散歩に出かけることにしようかな。

(そっぴや明日はクラスマッチだったっけ)

行事そのものが面倒なのに、それに加えて一番キツイ中距離走に出なきゃいけないとか拷問だ。

私が最下位になってクラスの順位落としてもそれは私のせいではな

くて、私をこの種目に任命した奴の責任だと思っ。運動出来ないってみんな知ってるだろうし明らかに人選ミス…といふよりほぼ嫌がらせだった。

(サボっちゃおうかな)

そう考えて、すぐにその考えを打ち消す。

逃げ出すのだけは、絶対に嫌だ。私にだってちっぽけなプライドぐらいあるのだ。

最下位だろうが転んでしまおうが、どんなに遅くなっても必ず完走してやる。

(……あれ?)

明日のことを考えていると、道の向こうから誰かが走ってくるのが見えた。

この道を通るのは車か近所に住んでる顔見知りのお年寄りだけなので、知らない人が通るのは珍しい。

足を止めてその姿を見ていると、その人物は段々とこっちに向かってきている。

どこかで見たとようなジャージを着ているようだけど……ああそうだ、うちの学校の陸上部が着てたやつかもしれない。

ということはこんな所までランニングしに来てるんだろっか。学校からここまでかなりの距離があるはずなんだけど。

ふーむ、休みだというのに大変だなあ陸上部の人。

相手の顔が分かるほど近づいてきたので、とりあえず私は顔を見られないように背中を向けて屈み、近くに咲いていた花を眺めているフリをすることにした。

その数秒後に、すぐ後ろで足音が聞こえる。早く走り去ってくれ
ことを願いながらそのまま花を見つめていたのだが、何故か足音が
止んだ。

「……こんなところで何やってるの天吹さん」

「今日もいい天気だよなあ……ねえ、シラタマホシクサ」

「無視しないでよ」

まさか話しかけられるとは思ってなかったので、つい動揺して目の
前に咲いている花に話し掛けてしまった。

後ろに立っているジャージの人の声はちよつと引いているようだ。

これ以上無視をするわけにもいかないので、しかたなく立ち上がっ
て振り返れば、見知った顔が視界に入る。

そう、目の前にいるのはうちのクラスの体育委員だった。

こんなところで偶然クラスメイトに会ってしまうなんて、不運以外
のなんでもない。

「天吹さんってこの近くに住んでるの？」

「まあ……」

「ふうん。ここから学校に通うのも大変そうね」

「体育委員も、ここまでランニングなんて大変だね」

「別に私は好きで走ってるから。陸上部は今日休みだし、自主トレ
してるのよ」

あ、自主トレなんですか、それはご苦労様です。

でも体育委員って陸上部だったんだ、知らなかった。そういえば名
前も知らないし。

ぶっちゃけどうでもいいんだけど。

「そうなんだ、頑張ってるね。それじゃ私はこれで……」

「あつ、ちよつと待ちなさいよ」
「はあ？」

なんだなんだ、今日はやけに絡んでくるなこの人。

いつもは変態だとか破廉恥とか言って避ける奴のひとりだというのに。

こうしてお互いのことを話すなんて、今日が初めてじゃないだろうか。

「天吹さん、今暇なんでしょ？」

「忙しいです」

「どこからどう見ても暇そうにしてたじゃない！」

「散歩してるので忙しいです」

「若者のくせに休みの昼間っからぼけーっと散歩してんじゃないわよー！」

「部屋でゴロゴロしないでこうして散歩してるだけ健康的じゃん」

「ああもうつー！何なのよアンタ」

いきなりキレるアンタが何なのよ、だよ……。

せっかく気持ちよく散歩していたのに、どうしてこつ面倒が向こつから走ってくるのやら。

「天吹、暇なんでしょう？暇なのよね？暇なら一緒に走るわよっ！

！」

「どうしてそうなるのっ！？」

いきなり手首をつかまれて引っ張られた。

あとさりげなく呼び捨てになってるし。

ええい、このままだと強制的に地獄のランニングに付き合わされて

しまっ！

「明日はクラスマッチでしょ？だから、その練習よ」

「今から練習しても無駄だって！今日走りこんで疲れを溜めるより、明日に備えて休んだほうがいいって！」

「まあ、それも一理あるけど」

納得してくれそうだったので、ほっと息を吐く。
しかし手は離してくれない。

「じゃあ疲れが溜まらない程度に走ればいいわね」

「なんだそれ!?!」

「大体クラスマッチの練習のとき、アンタすぐ休んで全然走ってなかつたじゃない。いつの間にかどこかにいってるとし」

「……………私はどこかの誰かさんと違ってか弱いんです」

「だから走って体力つけるって言ってるの。努力しないからひ弱なままなのよ」

「いいよ別にひ弱で……………ってうわあああっ!?!」

いきなり走り出した彼女に引つ張られるかたちで、無理やり走らせられてしまう。

握られた手を振り払おうとしても硬く掴まれているのか振り解くことができなかった。

……………

結局。

私が豪快にすっ転ぶまでの10分の間、そのまま彼女のペースですっつと一緒に走る事になったのだった。

*

「本当に体力ないのね……少し走っただけで歩けなくなるほど疲れるなんて」

「うるさいなあ」

無理やり走らされたせいで私の身体は限界に達してしまい、動けなくなってしまうた。

ちよつと座れる大きさの石があったので、体力が回復するまでここで休むことにする。

体育委員は、疲れてぐったりしている私を上から見下ろすように見ている。

「普段ならだらしてるから、こんなことになるのよ」

「強引に引つ張って走らせたのは誰でしたっけねえ!？」

こうなることが分かっていたから、走りたくなかったのに。

私が深い溜め息を吐くと、体育委員の目がどんどん鋭くなっていく。

「……私、アンタのこと嫌い」

「は？ 何をいまさら」

「違う。私は別にみんなが避けてるような理由でアンタのことを嫌いなんじゃない。私が天吹のことを嫌いなのは、アンタが頑張らないからよ」

「……………」

「運動が苦手だったら、どうして改善しようといわないの？ みんなに酷いこと言われて、どうして言い返そうとしないの？

どうにかしようって思えば、努力しだいでどうにでもなることじゃない」

捲くし立てるように言いたい事を吐き出して、息が続かなかったのか一息つく。

「いつだってやる気がない、努力をしない、すぐに諦める。いつもいつも、そうじゃない。だから、アンタのこと嫌い。だいつ嫌い」

私から目を逸らすことなく、彼女は真面目な顔をして言い放つ。

嫌いだと言われたけれど、何故かその言葉は私の心を暗くすることはなく、むしろ清々しい気分させてくれた。

「努力をすれば、きっと報われる。私は…そう信じてるの」

「……でもさ。どんなに努力しても、どんなに頑張っても、どうにもならないことだってあるんだよ」

ちよつと走つたくらいでどうにかなるほど、私の体力のなさは半端なものじゃない。

どんなに“わざとじゃない”と声を張り上げても、信じてくれる人なんてごく僅かしかない。

一生懸命に頑張っても、願いが届かないことのほうが多い。

「結果が出なかったとしても、頑張った過程は、決して無駄なんかじゃないもの。いつか積み重なった『過程』が、きっと結果になる」

それは私に言い聞かせるというよりも、まるで自分に言っているような気がした。

「つまらない言い訳だけど、私には陸上の才能なんてないのよ。どんなに頑張っても練習しても、たまに、ほんの少しタイムが伸びるだ

け。
才能を持つてる人は、走るたびにタイムを伸ばしてレギュラーにな
ってるのに。悔しいけど、投げ出したくなるけど、
それでも私は走って、努力してるわ。最後まで、レギュラーになれ
るまで、諦めたりしない。私はいつだって本気だから」

「……………」

本気、か。なんというか、自分には縁遠いものだなあと思っ
てしま
う。

私には努力とか根性とかそういう熱いものは、似合わない。
でも……私だって、努力した人はその分だけ報われるべきだと、そ
う思っている。じゃないと不公平だ。

「私は今の自分を変える気はないよ。面倒だし」

目の前の彼女に嫌われようが、みんなに馬鹿にされようが、私は努
力をするつもりはない。

「アンタね……」

「けど、努力そのものを否定しない。無駄だとは思わない。だから
体育委員は……いつかきつと報われるよ」

「え……………」

「応援してるから」

足に力を入れて、立ち上がってみる。うん、もう歩けるくらいには
回復したようだ。

あまり遅くなると過保護な同居人がうるさいから、暗くなる前には
帰りたい。

足の調子を整えて体育委員のほうを見ると、何故か目を見開いて問

抜け顔を晒していた。

不思議に思っただけを傾げると、彼女はハッと正気に戻りすぐに私を睨む。

「やっぱり天吹なんてだいつ嫌い」

「はあ、どうぞご勝手に」

「明日、最下位になったら絶対許さないから」

「それは無理」

さつき私の体力のなさを目に焼き付けたらうに、まだ言うか。

「最下位になってもいいけど、最初から最下位にしかねないって考えるその思考が許せないのよ」

「だってわかりきってることだし」

「だーかーらー！最初から諦めるなって言ってるのよ！」

「ああもう、わかったってば……あれ？」

鼻先にポタリと水滴が落ちてきた。

不思議に思っただけを見上げると、晴天だった空はいつの間にか薄暗い雲が一面を覆っていて、今にも雨が降りそうな天気になっているではないか。

ポツポツと冷たい滴が顔に落ちてきて、どんどんその量は増えてくる。

このままだと雨が本降りになりそうなので早く帰ったほうがいいのかもしれない。

けど私は走って帰る体力なんて残ってないし、家までまだまだ距離がある。

「体育委員、走って先に帰ったほうが良いよ。もうすぐ雨、酷くなりそうだし」

「アンタはどうするのよ」

「のんびり帰るよ。走る体力なんて残ってないから」

「じゃあ私も歩いてかえる。天吹を一人だけ残して先に帰るなんて後味悪いもの」

「いいから気にしないで帰れってば」

「うるさい」

私の隣に並んで、同じ速度で歩く彼女。

何を言っても私の言うことを聞いてはくれないようだ。

もしかしたら、無理やり走らせたことを悪いと思っていたのかもしれない。

しばらくすると雨は勢いを増し、容赦なく私たちの身体全体を濡らしたので、あっという間に全身びしょ濡れになってしまった。

服が肌にくっついて気持ち悪いし、冷たくて悪寒がする。早く帰って温まらないと風邪を引きそうだ。

「くしゅっ」

隣から可愛いクシャミが聞こえてきた。いくら健康そうな彼女といえど、流石にこの雨では風邪をひくかもしれない。

そういえば彼女の家はどこなんだろう…ここからだ私の家より遠いのは間違いないだろうが。

……彼女が明日休んでしまうと中距離走は私だけになってしまう。そうなる順位が大きく下がってしまう可能性が大なわけで、それは困る。

だから、しかたがない。凄く面倒なことになると分かっているけど、見過ごすことも出来ない。

「体育委員、このままだと風邪引くからうちに寄って帰りなよ」

「へっ!？」

「着替えと、傘貸すし」

「う、うん」

「……………」

ええと。なんでそこで怪訝な顔をして、さらに顔を赤らめるんですかね。

クラスのみんなと嫌ってる理由は違う!とか言ってたけど、やっぱり私のこと変態か何かだと認識してて、家上がりこんだら食われると思ってるんじゃないかなーか。

確かにある意味間違っていないんだけど、そこまでは面倒見きれません。私はどうすることも出来ないのです、自分の身は自分で守ってください。

なるべく早く家に着くように、鈍い足を一生懸命に動かして先を急いだ。

それでもいつもより歩く速度は遅いんだけど、隣を歩く彼女はそのことに文句のひとつも言わない。

ただ口を閉ざし前を見て、私と歩幅をあわせるように黙々と歩いている。早く歩け、とか口煩く言われると思って身構えていたのに。

気まずい沈黙の中歩いてみると、ようやく自宅が見えてきた。

玄関の戸をあければ、すぐさま慌てた様子の柚葉がタオルを持ってやってくる。

「千晴さんっ」

「ただい…うわっ」

いきなり真っ白いタオルが視界を覆ったかと思えば、すぐさま凄い勢いでわしわしと水分を拭ってくれる。

拭いてくれるのはいいけど、息が苦しいのもう少し優しくしてほしい。ていうか自分で拭いたほうが良さそうだ。どうかタオルを奪って彼女の方を見ると、その視線は私の後ろにいる体育委員の方に向いていた。

「……平さん？」

「大須賀さん……？どうして天吹の家に」

あ、そうか。柚葉と一緒に暮らしていることを知ってるのはクラスの中で美空と上原さんだけだったっけ。

疲れて色々考えるのが面倒だったので、そのことをすっかり忘れていた。

「ちょっと待っててください。平さんの分のタオル取ってきますから」

「あ、ありがとう」

柚葉は彼女の感謝の言葉に笑みで返して、タオルを取りに奥の部屋へ向かった。

私は濡れた身体を拭いていたけれど、背中に痛いほどの視線を感じたので、不穏な空気を感じながらも振り返ってみる。

「……なんでアンタの家に大須賀さんがいるの？どういう関係？」

「ただの親戚で同居してるだけです」

今、絶対私と柚葉の関係を疑ってたよね、彼女。だって蔑むような目でこっち見てるし。

しかし私の言ったことを信じてくれたのか、段々と普通の顔に戻っていった。

「そうだったんだ。だから天吹と大須賀さんって仲良かったのね」
「いや、仲が良い訳じゃ……」

「転校初日からベツタリだったから、みんな大須賀さんのこと天吹の毒牙にかかった可哀想な子って噂してたけど」

ぎゃー！何だその不吉な噂！でもあながち間違いつてわけでもないのが恐ろしい！

でも私たちが同居してるってバレたらもっと凄い噂を流されそうだなあ。なんか容易に想像できてしまう。

恐ろしい想像をして身震いしていると、袖葉が新しいタオルを持って戻ってきた。

「平さん、タオルどうぞ。身体が冷えますから二人とも早くあがってください」

「ん」

「お、お邪魔します」

ぐつしよりと濡れた靴と靴下を脱いでから、いつの間にか用意された雑巾で足を拭く。

水滴を落とさないように気をつけながら居間に向かうと、テーブルにケトルとお茶の葉と湯呑みが準備してあった。

きつと濡れて帰ってくる私の為に、前もって用意しておいてくれたやつなんだろう。

……あれ、うちにケトルなんてあったっけ？ どうでもいいけど。

「濡れたままだと風邪を引きますから、お風呂に入ってください」

「……体育委員、先に入っているよ。私は自分の部屋で着替えるから」

「私は後でいいわよ。天吹が先に入って」

「いいから先に入れてば。あ、それとも一緒に入る？うちの風呂
つて結構広いし二人で入れないこともな」
「お断りよ！！」

怒りで顔を赤くした体育委員は、案内役の柚葉を引き連れて風呂場
へ向かっていった。

ふむ、なんとなく彼女の扱い方が分かった気がする。

「……寒い」

このままでいると風邪を引くので、ひとまず自分の部屋で着替えて
くることにした。

*

「あ、千晴さん」

着替えて居間に戻ると、ちょうど柚葉がお茶を入れているところだ
った。

いつもの定位置に座れば、慣れた手つきで入れたてのお茶を差し出
してくれる。

両手で湯呑みを包むと手先から熱が全身に伝わり、ほんのりと身体
が暖かくなった。

「あつたまるー」

「それは良かったです。……でも、なるべく早くお風呂に入って休
んで下さいね」

「はいはい。でも、風邪引いたら明日クラスマッチ休めてラッキー
かもね」

それは、「冗談交じりに言ったはずだった。なんてことはない、いつもの雑談のつもりで。」

けれど彼女はいつものような微笑みではなく真剣な表情をしていたものだから、それ以上軽い言葉を紡げなかった。

「お願いですから、無理はしないで下さい」

「なん……」

「顔色、悪いですよ。本当は動くのも辛いんでしょう?」

私は今、そんなに酷い顔色をしているんだろうか?

おかしいな。私はいつも通りだったはずなのに、どうして彼女は些細な変化に気づいてしまっただろう。

「心配すぎ。だいたい無理なんてしないってば。柚葉も知ってるでしょ? 私が面倒なことが嫌いだって」

「はい、知ってますよ」

いつの間にか柚葉は正面から隣に移動していて、私のことを傍で見つめている。

せっかく気を使わせないように普段どおりを装っていたのに、そんな私の努力をあっさり水に流してくれた彼女。もう、なんていうか

「ほんと、面倒……」

疲れているせいか、考えるのも取り繕うのも、喋ることさえ億劫になってきた。

だから柚葉が手を額に当てていても、払い除けるなんてことはしない。黙ってされるがままの状態だった。

「熱はないみたいですね。一応、風邪薬飲んでおきますか？」
「大丈夫だつてば」

ちよつと気だるいけれど身体はちゃんと動いてくれる。

少し寒気を感じたので、温もりを求めるように暖かいお茶を啜った。柚葉はまだ心配なのか曇った顔をしていたけれど、私がお茶のおかわりを頼むと諦めたように微笑んだ。

「お風呂ありがとう」

しばらく経つと、柚葉の私服を着た体育委員が居間に戻ってきた。

「お湯加減は大丈夫でしたか？」

「うん、ちょうど良かった。ごめんね大須賀さん、面倒かけちゃつて」

「気にしないでください。濡れた服は洗濯して乾燥させますから、少し待っていてくださいね」

「色々ありがと、大須賀さん」

私のことは無視ですか。べつにいいけど。

ぼんやり二人を眺めていると、彼女はようやく私がいることに気付いたのか視線をこちらに向ける。

「いたの天吹」

「いたよ体育委員」

柚葉と話していた時とは態度を変え、不機嫌そうなジト目でこっちを見ている。

「ずっと気になってたんだけど、どうして私のこと名前で呼ばないのよ」

「知らないから」

「ちよつと待つて。今、2学期よね…？2年になってからもう半年は経ってるわよね？あれ、でも私と天吹って1年の時も同じクラス……」

「え、そうなの？」

「なによっ！その今初めて知りましたー的な顔は！！数日前に転校して来た大須賀さんでさえ覚えてるっていうのに！！」

「あららごめん。だって仲良いわけじゃないし、話す機会もないからクラスメイトの名前なんて殆ど覚えてないんだよね。

ま、別にいいじゃん。体育委員は私のこと嫌いなんだからどう呼ばれてもべつにいいでしょ？」

今は成り行きで話しているが、クラスマッチが終われば前のように話す機会もなくなるだろう。

体育委員が私をどう呼ぼうが、私が体育委員のことをどう呼ぼうが、関わりがなくなってしまうえば意味のないことだ。

「なんか腹立つから名前で呼んで」

「えー……」

「本当は嫌だけど、自己紹介してあげるわ。私の名前は『平 裕子』。二度と忘れないでよね」

「…平。ああなるほど、胸が平さんね。覚えやす
「なんだとこらあああああ……！！！！」

彼女は絶壁と言っほどじゃないけど、控えめで薄い胸元を腕で隠しながら吼えた。

……どうやら胸のサイズを気にしていたらしい。

今にも襲い掛かって来そうになった体育委員　改め平さんを、柚葉が必死で抑えていた。

「平さんっ！？お、落ち着いてくださいっ」

「嫌い！やっぱり絶対アンタなんて大っ嫌い！！」

「望むところだったの」

柚葉をはさんで睨み合う。

彼女は私のことを心底嫌っているようだけど、べつに私は彼女のことを嫌いなわけじゃない。

だからといって好きと言うわけでもないんだけど。

「と、とりあえず千晴さん、早くお風呂に入ってください」

「はい。……あ、そうだ」

「？」

「平さん、覗かないでよね」

「誰が覗くかこのド変態！！さっさと入れっ！！」

「おお怖い怖い」

柚葉からお風呂セットを受け取って、逃げるように風呂場へ行こうと背を向ける。

「天吹！」

「……なに」

呼ばれたので振り返ると、彼女は変わらず眉を吊り上げたまま不機嫌そうな顔で私を見ていた。

まだ私に言い足りないことでもあるのだろうか。

「さん”はつけなくていいから。さん付けだと逆に気持ち悪いし、

宿題をやる気力もなく、自分の部屋に戻ってすぐ布団の中に身を投げた。

明日は、クラスマッチがある。やる気なんて沸いてこないけど、真面目に走らないと平がウルサイだろうな。

一生懸命走ったら走ったで、柚葉が心配しそうだけど。

走るのはしんどいが、無難に終わってくればそれでいい。

何も起こらず無事に終わりますようにと、ささやかな願いを抱きながら、私は深い眠りへと落ちていった。

怠け者の悪あがき

『第25回、クラス対抗運動大会を始めます。速やかに各自競技会場に移動してください』

実行委員のアナウンスが流れ、クラスマッチ大会が始まった。

準備を済ませた生徒たちは、それぞれ競技会場へ向かうため足早に散っていく。

私が参加する中距離走は午後からなので、それまでは練習するなり同じクラスの子の応援をするなり自由だ。

教室でのんびりしてようと思っていたけれど、美空と柚葉が参加する競技がこれから始まるので仕方なく体育館へ向かう。

興味ないしギャラリーが多くてあまり行きたくないけれど、二人から応援に来いと言われてるので我慢して行くしかない。

二人とも運動神経がいいんだから、私が応援に行かなくても余裕で勝てるんじゃないだろうか。

体育館に入ると、キュキュツという甲高いシューズの音と、観客の歓声が響き渡っている。

予想以上の人の多さと騒音にうんざりして引き返したくなかったが、後からどうして見に来なかったのかと文句言われるのも嫌だったので気合で進む。

午前の部はバレーボールで、二人はその競技に参加しているはずだ。壁に貼られている対戦表を確認して、応援席になっている2階へ上がる。

なるべく人の少ない席に腰を下ろして一階を覗くと、すでにうちのクラスの試合は始まっているようで、コートの中に美空と柚葉の姿が見えた。

二人とも体を動かしながら楽しそうに笑っている。息を切らせている相手チームと違い、随分と余裕そうだ。

どちらが勝っているのか気になったので得点ボードを見てみると、17対3でうちのクラスが勝っているらしい。

時間の都合で1セット試合なのでこのままいけばうちのクラスの勝ちだろう。

(げっ)

二階にいる私に気付いた柚葉が、嬉しそうに手を振ってきた。それを見て美空も同様に笑いながら手を振っている。うわあ、やめて恥ずかしい。

逃げ出したい衝動に駆られたけどなんとか耐えて、顔を引き攣らせながら手を振りかえす。一応、応援しに来たんだし。

私が手を振り返したことで満足したのか、二人は再び試合のほうに戻っていく。

一生懸命にボールを追っている選手たちを見てみると、後ろから肩を叩かれた。

「……上原さん」

「隣、いいかな?」

彼女はぎこちなく微笑んでから、おずおずと私の隣に座る。

傍に寄られると落ち着かないけど、いきなり逃げ出すのも悪い気がしてそのままでした。

「友達の応援に行かなくていいの？」

確か上原さんとよく一緒にいる子達は外の競技に出ていたはずだ。

「ちゃんと応援してきたよ。円堂さんと大須賀さんの応援もしたかったから、途中でこっちに来たの」

「へー。上原さんは何にでるの？」

「バスケだよ。バレーが終わってからだから、午後からかな」

確かクラスマッチのバスケってボールの奪い合いが凄まじくて毎回問題が起こる競技なんだけど、小柄な上原さんがそこに入って大丈夫なんだろうか。

前回いくつか試合を見てたけど、ファールギリギリのぶつかり合いで参加者はポロポロになっていたような覚えがある。

そんな過酷な戦場にほわほわした彼女が向かうだなんて、無事に帰ってくる気がしない。

改めて思うと、一番キツイ競技ってバスケなんじゃないの？

「天吹さんは午後からの中距離走だよ。時間が重なっちゃったから、見にいけなくて残念」

「ははは…」

時間が重なってくれたおかげで、情けない姿を見られずに済んだよ
うだ。

美空と柚葉の二人には見に来るなと釘を刺しておいたけれど、どう
せ見に来るんだろうな。

「わ、見て！大須賀さんすごい！」

「……やっぱりバレーも得意なんだ」

上原さんが小さな歓声をあげたのでコートに目を向けると、柚葉がアタックして得点を決めたところだった。嬉しそうに笑みを浮かべ、同じチームの仲間とハイタッチを交わして喜び合っている。うーん、眩しい位に青春してるね。

柚葉のプレイが目立っているので分かりにくいだが、美空も影でこそとフラインプレイをしているようだ。

嫌がらせのように左右にボールを叩きこんで相手を疲れさせたり、後ろのラインギリギリに落としたかと思えば今度はネットすれすれに落としたり。

いいように相手を翻弄して面白いのか、美空はとても楽しそうだった。息を切らせている相手チームを見てるとちよつと可哀想に思えてしまう。

そしてトントン拍子で試合は進み、25対6でうちのクラスの圧勝だった。

その得点の半分以上は、アタッカーである柚葉によるものだろう。輝かしい功績を称えるように、同じクラスの皆は彼女を囲んで騒いでいた。

「凄いよね。このままだと優勝しそう」

「あのチームなら可能性はあるね」

万能型の柚葉とサポート型の美空を筆頭に他のメンバーも連携の取れたいい動きをしていたので、バレー部顔負けの最強のチームと言えるだろう。

優勝できなかったとしても、確実に上位は狙えるはずだ。

「うん。私も、試合頑張らないと」

「ほどほどにね」

頑張りすぎて空回りしそうだからなあ、上原さん。無理に勝たなくてもいいから怪我だけはしないで欲しい。

…たかがスポーツなのに、なんでこんなハラハラしてるんだろう私。他人の心配をしてる場合じゃないってのに。

「天吹さんも中距離走、頑張ってるね。見に行けないけど、その、応援してるから」

「まあ、そこそこ頑張る」

真面目に走らないと誰かさんが怒るからね。目指せ完走、だ。志は低いけれど、これが私なりの精一杯なんです。

「そこそこじゃなくて、精一杯頑張りなさいよ」

いつの間にか平が後ろにいた。

「うわ、出た」

「ああん？」

因縁つけるように睨まれてしまった。どこの不良だよ。迫力あって怖いよ。

「裕子ちゃんもバレー応援しに来たの？」

「ううん。私、体育委員だからさっきまでバレーの審判してたの。今は終わったから休憩中。」

「そうだったんだ。お疲れ様」

「菜月も試合頑張ってるね」

「うん、裕子ちゃんもね」

あれ、この二人って仲良いんだ。同じクラスだから不思議じゃない

けど、性格が正反対だから妙な組み合わせだ。それにしても裕子ちゃんって誰だ。あ、平か。普通に考えればそうだけど、平って呼んでるせいで違和感がある。

「天吹はこんなところにはいないで走りこみでもしてきなさいよ」

「やだ。私は一生懸命バレーの応援してんの。午後から走らなきゃいけないんだから動きたくないし」

「そんなだからひ弱なのよ」

「はいはい、分かっていますよ」

「……裕子ちゃんと天吹さんって、仲良かったんだ」

「どこがっ!?!」

どこをどう見たら仲良しに見えるんだろう。

むしろ仲が悪く見えるほうがありえる。実際、嫌われてるんだしね。

それから、なんだかんだで、3人一緒にずっと応援していた。

試合の合間に雑談したり、口喧嘩したりしていたら、いつの間にか全部の試合が終わっている。

優勝したのは案の定、うちのクラスだった。

午前の競技が終わったので二人と別れ、私は美空と柚葉と一緒にお昼を食べた。

午後から走らなきゃいけないのに沢山食べてしまったので、ちょっとまずいかも。

これも柚葉と美空のお母さんが作ってくれた弁当が美味すぎるのがいけないんだ。

「あー、美味しかったあ。やっぱり大須賀ちゃんの作るお弁当は最

高に美味しいわね」

「ありがとうございます。美空さんのお母さんが作られたお弁当もとても美味しかったですよ」

「ふふ、ありがと。大須賀ちゃんみたいな料理上手で気の利くお嫁さんが欲しいわ」

「どうぞどうぞ」

欲しいのなら先着一名様に喜んで差し上げます。

そう言っと、柚葉はにっこりと微笑んで「私はまだ千晴さんの婚約者のつもりですから」と言った。

……いい加減そろそろ諦めてくれないだろうか。いい人だと思うけど、やっぱり婚約者云々は無理だ。

「あら、千晴そろそろ時間じゃない？会場に行かなくていいの？」

「あ、うん。更衣室にタオル置いたままだったから、取ってから会場に行くよ」

「あんまり時間ないみたいですから、早く行ったほうがいいのかも少しありません」

「わかった」

「頑張つてね、千晴」

「んー。見に来ないでね、恥かしいから」

「わかってるわよ」

みんなと別れてから更衣室に向かう。

今の時間帯なら誰もいないと思うけど、いつものように念のためドアを開ける前に誰かいないか確認する。

うっかりドアを開けて誰かが着替え中だった場合、悲鳴を上げられる恐れがあるからだ。

私は女で相手も女なのに、なんでキヤーとか言われなといけないんだろう。酷い話だ。

とりあえずドアの前で聞き耳を立てると、中から2人くらいの女の子の声が聞こえた。

ああ、一応確認しておいて良かった。私はドアから手を離して、彼女たちが更衣室から出るのを待つことにする。

近くにいたら覗いてたんじゃないかと疑われてしまうので、少し離れた場所で待ったほうがいいだろう。

(…ん?)

移動しようとしたけど、私のクラスのことを噂しているみたいだったので、なんとなくそのまま聞き耳を立ててしまおう。

「あーあ……バレーもサッカーもあのクラスが優勝しちゃったからなあ。うちのクラス勝ち目なくね?」

「平気平気、うちバスケ強いじゃん。それにあのクラスの中距離走は運動オンチの天吹が出るみたいだし、大丈夫じゃない?」

「でもさ、もう一人が陸上部じゃなかったっけ?」

「ああ平さんでしょ?あの人、あんまり速くないらしいから」

「えっマジで?。速そうに見えるんだけど」

「陸上部で遅い方らしいよ。うちのクラスは陸上部のレギュラーの子が出るから楽勝だって」

あらま。平って自分で才能ないとか言ってたけど、本当に走るの遅いほうだったんだ。

部活がなくても自主練で遠いところまで走ってるのに、それでも足りなくらい才能がないのか彼女は。

「そうそう。陸上部の子から聞いたんだけど、平さんって1年の頃から真面目にやってるのに全然タイム伸びないんだって」

「えーかわいそう。それって陸上に向いてないんじゃないの?」

「才能ないことに気付いてなかったりして。周りの子がそれとなく言ったらしいけど、意地になって練習してるってさ。それって無駄な努力じゃん」

「……………」

用事が済んだのなら喋ってないで早くどこか行ってくれないかなあ。あんまり時間もないんだし。

ここで私が更衣室に入ったら面倒なことになりそうだから、なるべく顔を合わせたくないんだよね。

「天吹」

「っ!？」

後ろから突然声をかけられて心臓と肩が同時に跳ね上がった。大きい声を出さなかった自分を褒めてあげたい。

振り向くと、むっすりと不機嫌そうな顔をしている平が腕を組んで立っていた。……もしかして、今の話を聞いていたのだろうか。

「こんなところで何してるのよ。早く行かないと競技始まるわよ」

「え、なに、わざわざ私を探しに来てくれたわけ？あーやだ平ってば意外と優しい」

「違う！逃げないように捕まえにきたのよ!!」

「いまさら逃げないってば」

「どうだか」

半信半疑な目で見られたので、首を竦める。

ここで逃げたら後からどんな目に合うか分からないし、それにもうつ走る覚悟は出来ているのだ。

自分で言うのもなんだが今日は珍しくやる気がある……気がする。

ちょっとだけ。

「もうこんな時間だ。行こうよ、平」

さて、更衣室の中にいる女の子たちが私らに気付く前にさっさとここから離れるとしますか。

平は話を聞いてなかったみたいだけど、わざわざ聞かせるような面白いものでもないから。

タオルのことは仕方がないので諦めよう。

「ちょっと待ちなさいよっ」

彼女を置いて先に行くと、慌てて追い駆けてきて隣に並んだ。

私が逃げないように見張るつもりなのか、会場まで一緒に付いてくるみたい。そんなことしなくても逃げないのに。

まあ同じ競技だし行く先は一緒だからしかたないか。

『 中距離走の選手は、指定の場所に集まってください』

開始前のアナウンスが流れる。ちょっとゆっくりし過ぎたらしい。

「やば、早く行かないと」

「……ねえ、天吹」

「平？」

競技が始まるから早く向かわなくちゃいけないのに、彼女は急に足を止めてその場に立ち尽くしていた。

どこか浮かない表情をしているのが気になって、眉を顰める。

「私って、馬鹿なのかな」

「そんなこと聞かれても」

どうして今、私にそんなことを聞くんだろう。

大体私は平のことを何も知らない。こうして話すようになったのもつい最近なんだから、私に分かるはずもない。

普段ならふざけて「馬鹿なんじゃないの?」って言ってやるんだけど、どうも冗談を言っていないような、そんな軽い空気じゃないようだ。

……彼女は私に何と答えて欲しかったんだろう。

「私がやってることは、信じていたことは、まったく価値なんかなくて、本当に無駄なことだったの?」

「……………」

「努力なんて言葉で誤魔化して、本当は意地になってただけで、無駄だつてことに気付かないフリしてたんじゃないの?」

「……………」

ああ、なるほど。聞いてないと思ってたけど、更衣室から漏れてた話をすっかり聞いていたわけだ。

結構大きい声で話してたからドアに耳を当てなくても丸聞こえだったもんね。

それが自分に関わる話だったら、尚更。気にしない方が無理だ。

「あ、あは…何言ってるんだらう私。さ、行くわよ、天吹……………」

繕うような笑顔を作って、何もなかったように歩き出す。

明らかに気にしてまですって顔をしてるくせに、無理してなかったことにしようとしている。

私は彼女のことをあまり知らないけれど、今少しだけ、どうでもいいことを知ったかもしれない。

「馬鹿なんじゃないの？」

「え……」

「ばーか」

「はあっ！？ケンカ売ってんの！？」

慰めの言葉なんて思いつかないし、励ましの言葉なんて言えないから。

優しい人間ならもっと上手いことを言えるんだろうけど、あいにく私はそんな高尚な人間じゃないもので。

「他人が何を言おうが、無駄が無駄じゃないかは、自分で決めればいいよ」

「……っ」

平を知らない奴に、平の努力の価値が解るはずがない。だから私だって、彼女がどんなに努力してきたかなんて解らない。

でも、彼女は思わず応援したくなるほど真っ直ぐな目で、自分の努力の価値を見出していたから。

いつかきつと結果が出るって信じて頑張ってる奴を、止めようだなんて思わない。憐れだなんて思えない。

「でもさ、やっぱり悔しいよね」

「天吹？」

自分の限界は自分が一番良く知ってるのに、どうして他人に無理だつて言われなきゃいけないんだ。

結果ばかりを見て、どうして過程を無価値だなんて決め付けるんだ。

「……………っ」

柄にもなく熱くなっていた自分に気付いて、唇をかんだ。いつの間にか握り締めていた拳を解くと汗をかいていたようで、手のひらが気持ちが悪い。滾った気持ちを落ち着かせるように重い息を吐いた。

「平はさ、自分のやりたいようにやりなよ」

「……なによそれ。もしかして励ましてくれてるの？」

「さあどうだろう」

「ふん、天吹のくせに生意気」

努力するのも諦めるのもそれは本人の自由なんだから、勝手にやればいい。

できれば、後悔のない様に。

「ほら、早く会場に行こうよ。遅くなると呼び出されて恥ずかしい思いをすることになるよ」

「それは御免だわ」

まだ浮かない顔をしているけど、さっきよりは元気が戻っているみたいだ。

覇気のない平と一緒にいると、なんだか調子が狂ってしまっ。

私たちは互いに口を噤んで足早に歩き出す。

会場であるグラウンドに出てから、中距離走の選手が集まっている場所へ急いで向かった。

平は第3グループで私は第2グループなので、先に走る私は彼女と別れて前の列に並ぶ。

そのまましばらく待っていると、午後の部が始まる爆竹の音が鳴り、ついに第1グループが走り始めた。

グラウンドの周りには大勢の観客がいて、誰もが興奮気味に応援している。自分もあそこで見世物のように走らなきゃいけないと思うと、辟易する。

次は私のグループが走る番なので、前に出て準備運動を始めた。

一緒に走る人数は私を入れて5人。さつき小耳に挟んだ情報によると、その中に陸上部の子が2人もいるらしい。

陸上部だろうが文化部だろうが、私にはそんなの関係ないんだけど。

ひとときわ大きい歓声が聞こえたのでゴール地点を見ると、どうやら第一グループが走り終わったようだ。

実行委員に指示されて、私は自分に割り当てられたレーンに入りスタート位置に並ぶ。

何気なく後ろを振り返ると平が怖い顔をして私のことを睨んでいた。すぐの前に向き直り見なかったことにした。

やばい、情けない走りをしたら後でフルボッコされそうな予感。

(あーあ、めんどくさいな)

たかがクラスマッチなのだ、本気になっただとしても何の得にもならない。

けどそれは私の場合で、平にとってはきつと『たかがクラスマッチで済ませられるものじゃないんだろう。』

「位置について」

ついに私の番がやってきた。

短く深呼吸をして、真っ直ぐ前を見つめる。

「よいい」

パァン！ とスターターピストルの音が響き、私の足はその音と同時に前へ出た。

なかなかいいスタートを切ったにも関わらず私の位置は最後尾だ。それは予想してたことだけど……なんか私のグループみんな異様に速くない？

先頭を走っている二人は陸上部の子だろうけど、そのすぐ後ろを負けない速さで二人が走っている。陸上部じゃないけれど、運動部の子なのかもしれない。

そして少し間が空いて一番後ろを走っているのはもちろん私。まだ1周もしてないのに差が開いているのが悲しかった。

追いつきたいのは山々だが、これ以上ペースを上げてしまうと体力が持ってくれないので、この速度を維持するしかない。

私が目指してるのは順位を上げることじゃなくて、完走することなんだから。

(とはいえ、このままだと周回遅れになりそうかも)

同じペースで走っているのに、前の集団との差はどんどん開いてしまっ
まう。

前を走ってる彼女たちが私の後ろに来るのも時間の問題かもしれない。
い。

冷静に分析しながら走っていると、ようやく1周目が終わり2周目に突入した。

負担を掛けないように走っていたお陰で体力の消耗は少ない。今のところ順調と言ってもいいだろう。

けれど前との差はどんどん開いていく。今、私は完全に孤立して走

っている状態だ。

(はは、馬鹿にされるんだろうなあ)

今私を見ている観客に笑われても、後から同じクラスの子に文句を言われても、全然構わないんだけど。

私を嫌いだと言った彼女は、どう思っただろう。走り終えた私に、何て言うだろうか。

このままの速度で走っていれば、遅くなってもゴールに辿りつくことができる。無難に終わる。

けど、そんな『結果』に何の意味がある？どんな価値がある？

『結果が出なかったとしても、頑張った過程は、決して無駄なんかじゃないもの』

「……………ッ！！！」

『努力をすれば、きっと報われる。私は…そう信じてるの』

私も、信じてる。

『私がやってることは、信じていたことは、まったく価値なんかなくて、本当に無駄なことだったの？』

だから私は、彼女に諦めて欲しくないんだ。

(……さてと)

そろそろ体力がなくなってきた、腕や足の動きが鈍くなってきた。順番待ちの選手たちが集まっている場所が見えたので、視線だけをそちらに向ける。

少しだけしか見えなかったけれど、次に走る選手たちの中に平が辛気臭そうな顔で準備体操をしていた。気のせいかもしれないが、一瞬だけ目が合った気がする。

(なんでそんな怯えた目をしてんの……)

努力を語る彼女はとても真っ直ぐな目をしていたのに、今は走ることを怖がっているような目をしていた。もしかしたら彼女は、私みたいな状況になることを恐れているのかもしれない。

(それは困るなあ)

2週目が終わり、最後の3週目。

残り400メートル……これが最後の周だ。

「はあっ」

大きく息を吸って、吐き出す。

久しぶりだから緊張するけど、もう覚悟は決めた。

(馬鹿だよなあ………私)

あとは、私の身体が言うことを素直に聞いてくれるかどうかだ。

「……っ!!」

足に力を入れて、強く地面を蹴る。

反動で揺れる身体を支えるように大きく腕を振る。

歩幅を大きくしてさらに足の動きを速くし、身体全部、余すことなく駆使して走る。

ぐん、と加速する。

さっきよりも速く、先頭を走っている彼女たちよりも速く。中距離の速さではなく、短距離の速さで私は走る。

残り少ない体力が尽きてしまう前に、私はゴールではなく、“一番前”を指す。

いつもの走り方では間に合わないから『本気』で走る。フォームを変え、イメージするのは昔の私。

(……っ！ やっぱ凄くしんどいッ)

本気を出して数秒で途端に足が重くなり走り難くなる。予想以上に消耗が激しい。

けれどペースは戻さず、ただ速く走ることだけを意識して足を動かした。

おかげで差をつけられる一方だった状況が一変して、今度はみるみる差が縮んでいく。

心なしか観客の声がどよめいている気がして、それがなんだか面白

かった。こんな気持ちになるのは久しぶりだ。

「千晴さんっ！駄目えっ！！！」

どこからか、柚葉の叫びが聞こえた気がした。

その声があまりにも必死で、悲しそうで……思わず足を止めそうになっちゃったけれど、やっぱり私は止まらない。

最後まで本気で走るって決めたから。

それにしても、見に来るなって言っただのにやっぱり来たんだ。きつと美空もどこかで見物してるんだろう。

（平も、見てるかな）

今、どんな顔をしてるのか見てみたい。驚いてるだろうか？それとも呆れているだろうか？

後からどうしていつも本気を出さないんだとか、怒られるかもしれない。

彼女が私の本気をどう捉えるかは彼女次第だけど……できればプラスに受け取ってくれればいいな。

前の集団の背中が見えてきて、追いつく距離まで来ることができた。

（ここまで来れたけど……本格的にやばいかも）

足の感覚がなくなってくる。まるで自分の足そのものを失ってしまったような気になってしまう。

この感じも久しぶりだった。これはもう限界に達している証拠で、

いつもならこの感覚が襲う前に動くことを止める。でも、止まるわけには行かないし、スピードを落とすわけにも行かない。

私は足搔かなくちゃいけない。無理だと思っていたことを、可能にして、彼女に見せ付けてやるって決めたから。

(やっと、追いついた)

思わず笑みが浮かぶ。

向こうは最初に飛ばして逃げ切る体力が残っていないのか、加速しない。これは、チャンスだ。

コーナーに差し掛かった時に上半身を使い、感覚のない足を誘導させるようにして減速せずに上手く曲がり、外側から一人、二人と抜き去る。

残りは約100mほどの直線。ここであと二人を追い抜かないと一番にはなれないのだが、直線で追い抜くには純粹に速さで勝負するしかない。

前を走っている陸上部の二人より速度はあるけれど、なにぶん距離が足りない。さらに加速する体力も残っていない。

むしろ身体の調子は悪くなる一方で、足は既に限界を超え腕は鉛のように重く、気分も最悪で酷く吐き気がする。

あと、もう少し。あとちょっとだから、それまで持ってくればいい。

「……………つ……！」

歯を食いしばり、ひたすら地を蹴る。

順位なんかどうでもいいし、必死になってる自分が馬鹿みたいだって自覚はあるけど。

でも、他人に馬鹿にされるのは本当は悔しいし、頑張ってる人が貶

されてるのを見るのも嫌だ。
結局は自分の為なんだけど
でもある。

これは私なりの、彼女へのエール

(あと、少し……)

さらに一人を追い抜いて、残るはあと一人。
ゴールがどんどん近づいてくる。

(これで、最後っ……！)

「!?!」

ガクン、と力が抜けて、身体が揺らぐ。どうやら限界を超えた身体
が、動くことを拒絶したようだ。

足に力を入れることが出来ないため、踏ん張れない。

このままじゃいつものように転んでしまう。そうならもう、終
わりだ。

ゴールはもう目の前だというのに。
諦めるしかない、なんて。

はは……なに、それ。

ふざけんなっ。

(諦めるもんかったのおおおおおお！！)

体力はとうに底を尽いているから、残っているのは気力だけ。持てる力をすべて使い、身体を引き摺るように無理やり動かして、投げ出すように前に進み、飛び込むようにゴールへ向かった。

(いけるっ！)

……のはいいのだけど。

「きゃああああああっ！？」

「へ？ うあ、あああああっ！？」

バランスを取れなかったせいで斜めに飛び込んでしまい、隣にいた先頭の子を巻き込んで転ぶようにゴールした。

勢いをつけて転んだせいで、砂埃が舞う。

衝撃に備えて閉じていた目を開くと、至近距離にあるのは女の子の顔、両手は当然のように柔らかな胸の上。

きつと周りからは「これ絶対入ってるよね」とか言われてしまいそんな危ない体勢だった。

あんなに騒いでいた観客の声はまったく聞こえない。驚くほど周りには静かだ。きつと誰もが啞然としているのだろう……色々な意味で押し倒してしまった子を見ると、顔を真っ赤にして目元に涙を浮かべている。

そりゃあ学校で噂の変態に公衆の面前で押し倒されたら泣きたくもなるだろう。ごめんなさい。

ビンタやら蹴り飛ばされてないだけマシな方だけど、私の罪悪感

さらに増す。いつそのこと殴って罵ってくれた方がすっきりするわ。

「は…はやく退いてよお…」

「ごめんね。動ける体力が残ってないから、救出待ち」

「うっ…」

彼女は身動きして覆い被さっている私から逃れようと一生懸命だが、力の抜けた重い身体を動かす力がないのか、無理のようだった。

しばらくして実行委員と先生が慌ててやってきて、動けない私を被害者の女の子から退かしてくれる。

結局はこんなオチになってしまったけど、私らしくていいんじゃないだろうか。

最後は散々だし、体調だって最悪だけど……胸が踊って凄く楽しかったのは確かだから。

結果はどうであろうと、本気で走った過程は、私にとって十分価値のあるものだった。

「天吹、歩けるか？」

「一歩も動けません」

「まったく、動けなくなるまで全力で走るやつがあるか。…まあでも、お前でもやるときはやるんだな。正直、見直した」

「はあ」

口の悪い体育教師に支えられて立ち上がるが、まったく足に力が入らないのでうまく立てない。腕も軽く麻痺していて先生にしがみつくのも厳しかった。

打開策として、背負われて保健室へ運ばれることになったわけだけど……なんだこの羞恥プレイ。いい年して恥ずかし過ぎる。

「その変態」

「いきなり変態呼ばわりは酷い。ていうか次は平が走る番じゃん。なんでこんなところにいるの？」

保健室に向かっていると、平が話しかけてきた。気を利かせて、先生は立ち止まってくれる。

「身体は大丈夫？」

「平気。慣れてるから」

「なんで最後は隣の子を襲ってんのよ。本気で走って興奮して発情しちゃったの？」

「違う！不可抗力だってば！」

「ふーん」

疑ってる。こやつ本気で疑ってる。もうちょっと労いの言葉とか、くれてもいいんじゃないだろうか。

分かった事とはいえ、やっぱり私のことマジで嫌ってるよね。

「…どうして、そんなになってまで本気で走ったの？…私が、言ったから？」

「まさか。私はただ悔しかったから走っただけだったの」

「悔しかった？」

きよとんとしている平に、言ってやる。

「ねえ、平。本気で走るの面倒で、きつくて、散々だったけど…
………悪くなかったよ」

きつと、こんな気持ちになれたのは平のおかげだ。感謝を口にするのは癪なので言わないけど、でも本当に今、とっっても満たされて、凄く楽しかったんだ。

何かを察したのか、平は呆けていた表情を引き締めて瞳に力を宿す。

うん、それでこそ彼女らしい。

「早く行かないと、始まるよ。それとも逃げんの？」

「んなわけないでしょ！あんたと一緒にしないでよ、変態！」

言いたいことを言ってから、彼女は私たちに背を向けてスタート地点に向かった。

彼女の走る姿を見れないのは残念だけど、きっと大丈夫だろう。

どうやら私の本気は、無駄じゃなかったようだ。

「先生、もう限界。あとは宜しく」

「…ああ。よく頑張ったな天吹」

その言葉を聞いて、安心して目を閉じる。

限界を超えた私の身体はさっきからずっと休息を欲しがっていたから。

私のやることは終わったんだし、あとは先生に任せてゆっくり休もう。

直後、ピストルの音が鳴る。きつと、次のグループが走り始めたのだらう。

彼女が満足できる結果を出せるといいな　　そう思いながら、私はゆっくりと眠りについた。

*

目を開けると、視界に柚葉がいた。
心配そうな表情で、私の顔を覗き込んでいる。

「千晴さんっ！」

「んー…よく寝た」

「どうやらここは保健室らしい。

ベットから身体を起こそうとしたら、彼女に止められてしまう。まるで重病人のようだ。

まあ…止められるまでもなく、私の身体はほんの僅かしか動いてくれなかったんだけど。

あんなに激しい運動をしたのは久しぶりだったので反動が凄いい。い。

今まで私は眠っていたのだろうか？それとも気を失っていたのだろうか？

ぼやっとしていると柚葉が掴みかかる勢いで顔を近づけてきた。

顔が近いけれど、いつも至近距離で女の子の顔を見て耐性がついているせいか、そんなに驚かない。

「どうしてあんな無茶をしたんですか！」

「え？いや、なんとなく気分で」

「な、なんとなくなっつて…もつと自分の身体を大切にしてください
！……！」

「死ぬわけじゃないんだから、そんなに心配しなくてもいいって」

「……っ。でも、二度と足が動かなくなる可能性だってあるんです！！貴女の体はもうポロポロなのに、どうしてそれ以上痛めつけてしまうんですか！」

「……………」

彼女は真剣で、とても悲しそうで、本気で心配していることが痛いほどに伝わってくる。

やっぱり柚葉は私の身体のことを知っていたんだろう。知っていたのなら、過保護になる理由もわかる。

…身体のことにはあちゃんに聞いたのかな……絶対誰にも言っなくて口止めしておいたのに。

「柚葉は、私の身体のこと知ってるんだよね？」

「はい。だから、無茶をして欲しくないんです」

「……なるほど」

知られてしまったものは仕方がないとして。

それにしても彼女がこんなに怒ってるのは初めてかも。怒ってる、んだよね？多分。

丁寧な口調だけどいつもより言い方が強めで、ほんの少し声が震えている。

「えーと、柚葉さん怒ってます？」

「誰も貴女を怒れないから、私が怒ってるんです。本当は私だって、貴女を責める資格なんてないのに……」

「よく解らないけど、いいよ別に。とにかく心配掛けてごめん。こんな面倒なこと、これっきりだから」

「……………はい」

いらぬ心配をかけたので、素直に謝る。

やれって言われても、もう絶対やらない。本当にこれキツイんだから。

「後でちゃんと病院に行つて下さいね」

「いや、わざわざ行かなくても大丈夫だって」

「身体が動かないのに大丈夫と言つても説得力がありません。私も付き添いますから、一緒に病院に行きましょう」

「……………ええー」

なんか非常に面倒なことになっちゃったなあ。

本気を出した代償は高くついてしまったようだ。

「大須賀ちゃんジュース買って来たわよー…って千晴!」

紙パックのジュースを持った美空が、起きている私を見て慌てて保健室に入ってきた。

傍に来て、心底ほっとした顔をしている。

「良かった、目を覚ましたのね」

「もうぐっすり。気分爽快」

「馬鹿ね」

優しい目をして、私の頭を撫でる。彼女にも大変心配を掛けてしまったようだ。

「具合はどう?何か飲みたいものとかある?」

「へーき。ちよつと寝たら気分良くなったし。あ、でもジュース飲みたい」

「はい、オレンジジュースでいい?」

「ありがと」

「大須賀ちゃんは緑茶だったわね」

「ありがとうございます、美空さん」

わざわざストローをさして、そつと渡してくれる。

実はさつきから喉が渴いていたので、受け取つてすぐに飲み干した。そんな私を二人は満足そうに見つめてくるので、なんか居心地悪い。この二人つて私のことをよく子ども扱いしてる節があるからな！。同い年だつてのに。

無意識に拗ねた顔をしていたのか、彼女たちは私を見て困つたように笑つた。

「それよりクラスマツチまだ終わつてないんでしょ？私のことはいからクラスの応援に行つてきなよ」

「私はずつとここにいます」

「同じく」

「ああもう、いいから。そこに居られると気になつて寝れないから一人にしてくれない？クラスマツチ終わつてからまた来てよ」

「でも……」

「仕方ないわね。大須賀ちゃん、こう見えて干晴つてデリケートだし、一人にさせといた方がいいかも」

「…わかりました」

渋々といった感じで頷く柚葉を連れて、美空は保健室から出て行く。こんなところで私と居るより、クラスの応援をしている方がよっぽど有意義だろう。

あれ？そういえば私つて結局何位だつたんだろうか。競うのは順位じゃなくてタイムなんだけど。

(ま、いいや)

後で聞けばわかることだし、そこまで興味はない。

さてと。少しでも体力を取り戻すためにもう一眠りしようかな。

目を閉じようとしたところで、保健室のドアが開く。

誰が来たんだろうと思いい頭を動かすと、入口のところには平が立っていた。

私がおか言おうとする前に、彼女は無言でツカツカと傍まで歩いてきて、ベットの脇にあった丸椅子に座る。

ええと、見舞いに来てくれたんだらうか？それにしても険しいお顔をしてくらっしやるんですけど。

「元気？」

「そこそこ」

「あつそ。良かったじゃない」

言葉を選ぶように慎重に口を開く。……なんだかズバズバ言う彼女らしくない。

それからしばらく無言の状態が続いて、静寂に耐えられなくなったのか、ぽつりと言葉を漏らす。

「あの、さ。天吹って運動苦手じゃなかったの？運動苦手な人がいくら本気出したって、あんなに速く走れるわけないと思うんだけど」
「正直に言つと苦手じゃないよ。ただ、身体が貧弱で追いつかないだけ」

「……そうだったんだ。普段から本気で動かないのは、“動けないから”だったのね」

「……………」
「私、アンタのこと何も知らないで、頑張れだなんて、酷いこと言っちゃった。馬鹿みたい」

「そんなの平が気にすることじゃないよ。それに身体が普通に動いたとしても、面倒だから本気なんて出さないと思う」
「……………」

こんな不便な身体だけど、普通に生活する分には何の問題もない。それで十分だと思ってる。

他の人より動けないけれど、まったく動けないわけじゃないから。私が頑張らないのは決して身体が悪いからではなく、自分の怠慢のせいだろう。そういう性格なのだ。

「まあ、その……今日楽しかったのは平の“おかげ”だよ。ありがとう」

「なんでアンタに感謝されなきゃいけないのよ。大体……お礼を言うのは私の方だわ」

「え？どうして……」

遠くからホイッスルの音が鳴り響く。おそらくクラスマッチが終わったのだろう。

いつの間にやら、もうそんな時間なんだ。

「私は努力していれば必ず結果が出るって信じてた。そう思ってないと辛くて、頑張れなかったから。」

「どんなに必死になって頑張っても、誰もが諦めろって言うの。努力してもその先には何もないんだって、無駄だって。」

「何度も諦めようと思ったけど、私意地っ張りだから、負けたくなかった」

「誰だって希望があれば前に進もうとするけど、絶望を突きつけられたら進むことを躊躇ってしまうに決まってる。」

「今まで辛くても諦めなかったのは、彼女の強さだろう。」

「でも天吹は応援してくれた。頑張ることの本当の価値を教えてください。だから……私はまだ頑張れる。」

「努力してその先に望んだ結果がなくても、それはきっと無駄なん

かじゃないから」

真っ直ぐな目で見つめてくるものだから、照れくさくてまともに顔を見れず、目を逸らした。

「……あーなんていうか……勝手にやれば？」

「勝手にやるわよ。誰も信じてくれなくても、私は自分を信じてるもの。今日だって一位にはなれなかったけど、いい走りが出来たし」「はいはい。ま、適当に頑張れ」

「うん。……ありがとう、天吹」

その表情にもう迷いはなく、吹っ切れたような清々しい顔をしてる。それを見て、不本意ながら安心してしまった。

「そ、それから、その……本気で走ってるアンタって、結構……アレよね」

「アレ？」

「……っ！いや、やっぱりなんでもない！！馬鹿！！帰る！！察しろ！！」

「……酷い無茶振り」

なんでいきなり機嫌悪くなってるんだろう。

顔を真っ赤にしているので相当怒ってるっぽいけど、理由がわかんないからどうしようもない。

「じゃ、じゃあね天吹っ」

「そっだ平、ちょっと待って」

聞きたいことがあったので、慌てて出て行こうとする平を引き止めようと一生懸命に腕を伸ばしたのはいいんだけど。

「あ」

「え？」

伸ばす位置を間違っってしまったのか、私の手は彼女のとある部分に触れてしまった、よう、だ。

それは、女の子のものにしては控えめで慎ましい大きさだけれど、確かに存在する彼女の胸。

温かくて、むにゅっとした柔らかい感覚が、手先から伝わってくる。小さいけど触り心地がいいなあなんて馬鹿なことを考えながらも、全身の血の気が引いていく。

「あのですね……信じてもらえないかもしれませんが、これってわざとじゃないんですよ。」

ただ、その、不可抗力っていうか。私は自分の順位を聞きたくて引き止めようとしただけで……」

私の必死な言い訳が、空しく静かな部屋に消えていく。

完熟トマトのように真っ赤な平は驚きに目を見開いて、小刻みに震えていた。

あ、やばい。このパターンは凄くやばい。

逃げたくても身体が動かないので、そのまま彼女の動向を見守るしかなかった。

「た、平さん？ あの……」

「あああああああぶっっっっっきいいいいいいっっ！！！！！！」

ぎゃー！！！！椅子持ち上げたあー！！！！
それでいったい何をする気なの！？いやいや、本当はわかっているけどね！現実から逃避したいだけなんだけどね！

「ストップ平！それはまずい、私死んじやう！ていうかここ保健室！私、いちおう病人！」

「知るか変態い！アンタは病人じゃなくてド変態よおおお！！！」
完全に理性失ってるうううう！！！！？

今までいろんな人にセクハラして殴られたり怒られたりしてきたけど、こんな命の危険を感じるような怒り方をされたのは初めてだ。もしかして平ってこういうのに免疫ないのかな。顔真っ赤で半泣きだし。いやいや、それよりどうにかしないと無抵抗に椅子で殴られてしまうよ私。

落ち着かせる方法が何も浮かばなかったのでそのまま黙っていたら、ついに彼女が私に危害を加えようと動き出した。どうか死にませんようにと祈りながら、すぐにやってくる衝撃に備える。

「ひゃあ！？」

「げー！」

彼女は運悪くコードに引っかかり足を取られたらしく、バランスを崩した。

頭の上に掲げていた椅子は彼女の背後に落ち大きな音を立て、自身は狙ったんじゃないかと思ってしまうほど不自然に私の方に倒れこんでくる。

受け止めようとしたけど私の身体は動いてくれないし、支えられるほど腕の力は戻っていないので、そのまま彼女を自分の上に受け入れた。
上に乗られた衝撃で吐きそうになったけれど、気合で耐える。

「うつつ、びっくりした」

「……それはこっちの台詞」

ぴったりと彼女の上半身が私の身体に重なっている。布団越しだけだ。

平の顔は私の胸元よりちょっと上辺りに埋まっていて、顔が見えない。
しかし……なんだかんだで命の危機は脱したようだ。ほっ。

「ひっ！」

「？」

彼女がようやく顔を上げたと思ったら、何故か短い悲鳴を上げてそのまま固まった。

お、顔が近いので、彼女の綺麗な瞳がよく見える。

「あ、あ、あ……っ」

「……平？」

よく解らないけどパニックになってるらしい。

迂闊に声を掛けようものならまた暴走して面倒なことになりそうなので、大人しく黙っていたほうが良さそうだ。

でもいい加減上に乗ったままだと重いので、早く退いて欲しい。

……まあ、面白い顔してるので見て飽きないけど。

さすがにずっとこの状態はまずいので、どうやって落ち着かせようかと考えていると、保健室の扉が開いた。入ってきた人物は私たちを見て驚きの声を上げる。

「な、何してるのふたりともっ!?!」

「菜月!? ちっ、違うのよ!?! 天吹が嫌がる私を無理やり」

「捏造……!?!」

上原さんっていつもタイミングが悪いよね!

でもどこからどう見ても襲われてるように見えるのは私だよね!

「うう……! やっぱり、天吹なんて大っ嫌いっ!?!」

「もう勝手にしておくれ」

叫びながら保健室を出て行く平と、慌ててそれを追いかける上原さんを見送って。

私は自分でも気付かないほどの、小さな笑みを浮かべていた。

足場のない安息

自業自得とはいえ散々な目に合ったクラスマッチが終わり、一週間が経った。

無理して走ったせいで動かなくなった身体は、病院で3日ほど寝ていたらすぐに回復して元通り。

家に帰ってきて普通に生活できるようになったけど、医者からしばらく自宅療養をするように言われているのであれからずっと学校を休んでいる。

授業を受けなくていいので最初は喜んでいたのだが、一週間も休んでいると何もすることがなくて退屈だった。

部屋から出ようとすれば心配性な同居人に怒られてしまうので、大人しくベットで寝ているしかない。

美空が差し入れてくれた漫画や小説は読み終わったし、携帯でネットやゲームをするのも飽きてしまった。

ちなみに柚葉が毎日のように持ち帰ってくる宿題をやるという選択肢は存在しない。だってどうせ解んないし、面倒だし。

「居間でテレビでも見ようかな……」

平日の昼間だから、昼ドラか何かやってるだろう。

柚葉は学校で、ばあちゃんは買い物に行ってるから、家には誰も居ない。部屋から出るなら今のうちだ。

このままベットで寝転んでいてもどうせ退屈だし、気晴らしにテレビを見に行くことにした。

(あれ？)

誰もいないはずなのに居間から音がする。
警戒しながらこっそり居間に入ると、正座をしたばあちゃんが熱心にテレビを見ていた。

近くに寄ってみても私に気付くことなく、魅入られたようにテレビに集中している。

それはもう、話し掛けるのを躊躇ってしまうほどの熱中ぶりだ。

「……………ばあちゃん、帰ってたの？」

私が起きている時は玄関が開く音を聞いてないから、寝ている時に帰っていたんだろう。

うちの玄関の戸は開けるとガタガタと大きな音がするので、誰かが帰って来るとすぐわかる仕組みになっている。

「ねえ、ばあちゃ」

「ちよつと黙ってな」

「……………」

有無を言わせぬ強い口調で、私の言葉は遮られてしまう。

釈然としないものを感じつつも言われた通り黙っていることにした。
集中しているばあちゃんに何を言っても無駄なことを、一緒に住んでる数年で理解しているからだ。

このまま立っていると「気が散る」とか言われそうなので、視聴の邪魔にならないように部屋の隅に座ることにした。

私もテレビを見る為に此処に来たのだし、せつかくだから一緒に見るとしますか。

(何を真剣に見……………うわぁ)

この部屋に来て初めてテレビの方に目を向けると、画面に映っていたのは昼ドラでもニュースでもバラエティでもなく……アニメだった。

それも国民的なアニメではなく、オタクが好みそうな絵柄の美少女アニメだ。

さつきからあざといパンチラや裸同然のお色気シーンが目を逸らしなくなるほど流れてるし、健全な時間帯に流す内容の物じゃない。昼ドラを見ようと思ってテレビをつけた主婦がこんな破廉恥なアニメを見たら、お茶吹いて速攻でテレビ局に苦情の電話を入れるだろう、絶対。

私は気にしないけど、それよりもさつきから出てくる女の子が全部同じ顔に見えるので混乱してしまう。見始めたのも途中からなので話もよく解らないし。

段々とアニメから興味が失せてきたので、何気なく違う方向に視線を漂わせる。

（ん？なんだろ、あれ）

ばあちゃんのすぐ横に四角いケースのような物が置いてある。

目を凝らしてよく見てみると、今見ているアニメの絵が描かれたブルーレイのパッケージのようだ。

（か、買ったやつ見てたんだ……）

まあ、こんな時間帯に萌え系？のアニメが放送されてるわけじゃないよね。

少し前に購入した我が家のブルーレイ再生機は、どうやらお目当てのアニメを見る為のものだったらしい。

ばあちゃんの方を向けば、口を開けたまま目を輝かせてアニメを鑑

賞している。

(まあ、楽しそうで何よりだけど)

私の祖母は大のアニメ好きで、昔のものから今時のものまで幅広く見ている。

アニメだけじゃなくゲームも時々やるし、漫画だって読むのだ。

「はあ、良かった良かった。やっぱりこの製作会社のアニメは一級品だねえ」

「……………見終わったの？」

「おや、千晴。いつからココに居たんだい？」

「さっき話し掛けたじゃん!!」

「そうだったかねえ？」

聞いてないだろうとは思ってたけど、やっぱり聞いてなかった。

不思議そうに首を傾げているところを見ると、本気で私の存在に気付いてなかったようだ。

「買い物行ってくつて言ってたけど、今見てたアニメを買いに行ってたの？」

「ああ、そうさ。ずっと前から予約して今日ようやく手に入ったアニメでね、初回限定のレア版なんだよ」

「はあ……そうですか。良かったね」

「しかも予約特典で主人公の×××が×××バージョンのフィギュアが！」

ばあちゃんによく解らない専門用語を熱心に語りながら、悩ましいポーズをとった美少女フィギュアを取り出した。

嬉しそうに見せつけられると、そのうちフィギュア集めに目覚めて

しまっんじやないかと不安になってくる。

今はそうでもないけど、ああいうのって集めだすと止まらないって聞いたことがあるし。

趣味に関して文句を言うつもりはないけど、家がフィギュアだらけになるのは嫌だなあ。

「ところで千晴。病人のくせして部屋から出たら駄目じゃないか」

「だからもう健康だって言ってるのに。柚葉が過剰に心配してるだけだってば」

「ふうむ。確かに元気そうだし、明日から学校に行っても大丈夫そうだねえ……」

学校に行かなきゃいけないのは複雑だけど、ずっと暇だったので自由に動き回れるようになるのは嬉しい。

「けど、明日の学校の帰りに病院に寄って帰ってきな。万が一ってことがあるからね」

「わかった」

「ついでに本屋でいつもの雑誌を買ってきとくれ」

「……わかった」

病み上がりなのにさっそくパシリかい。

柚葉のように過保護に心配されるよりは、気楽でいいんだけどね。

「さてと、部屋に戻って同梱の設定資料集でも読もうかね。もうテレビは見ないから、好きにしな」

「ああ……うん」

大好きなアニメを見てご機嫌なばあちゃんはアニメの主題歌を口ずさみながら出て行った。

部屋にひとり残された私は当初の目的通りテレビをつけて適当な番組を見ることにする。

しかし。

(うーん、つままないのばっかだなあ……)

これといって興味のある番組が見当たらなかったもので、すぐにテレビの電源を切った。

暇つぶしの手段を失ってしまった私は、その場にごろんと寝転んで大の字になる。

……これから何をして時間を潰そうかな。できる事は全てやったし、何もすることがない。

ただこうしてボーっとしてることしか、時間を進める方法を思いつかなかった。

あ、でも明日は学校に行っていていいってばあちゃんに言われたし、もう外に出掛けてもいいんじゃないだろうか。

(近くを散歩するぐらい、いいよね)

時計を見ればまだ午後の一時過ぎ。

柚葉が帰ってくるまで、まだ十分に時間はある。彼女が帰宅する前に戻ってくれば、何の問題もない。

そうと決まれば善は急げだ。

わずかな時間も惜しいので勢い良く身を起こしてから玄関へ向う。家の周りを歩くだけだし、すぐに戻ってくるから何も持っていかなくても平気だろう。

サンダルを履いて、玄関の戸に手を伸ばしかけたところで…

「…え？」

戸を開ける前に、まるで自動ドアのように勝手に引き戸が開いたのだ。

…いつの間にかうちの玄関は近代的な発展を遂げたのだろうか？これ、ちょっと便利でいいかもしれない。

「ただいま帰りました、千晴さん」

「…お、おかえりー、柚葉さん」

現実逃避していた思考が彼女の声によって引き戻される。

玄関が開いて目の前に現れたのは、素敵な笑顔を浮かべた同居人だった。

予期せぬ人物のご帰宅に私の心臓は早鐘を打ち、ゆっくりと冷や汗が頬を伝う。

「どこへ行くこうとしていたんですか？」

「…あれ、なんで、こんな時間に帰ってきてるの？」

「今日の授業は午前中で終わりだったんですよ」

「ああなるほど。そうでしたか」

「はい。それで、千晴さんはどこへ行くこうとしていたんですか？」

「いや…その…散歩に」

上手い言い訳が思いつかなくて、正直に話した。どうせ嘘をついても、彼女は見抜いてしまうだろう。

彼女は困った顔や怒った顔をせず、さっきと変わらぬ笑顔のまま私を見つめている。

「いくら動けるようになったからって、大丈夫とは限らないんです。外出は駄目だって何度も言ったじゃないですか」

「でも明日は学校に行ってもいいってばあちゃんに言われたしさ」

「そうだったんですか。でも、病院でちゃんと診断して貰ってからにしてください。一人で出かけて、もし何かあったらどうするんですか？」

「……………」

ずっと笑顔だった彼女の表情がようやく変化し、みるみる曇っていく。

いつものように過保護すぎだと言おうとしたけれど、喉元まできていたその言葉を飲み込んで黙っていた。

心配をかけているのは他の誰でもない、ここにいる自分なんだから責められるべきは私だ。

「じめん」

「あ…いえ、その…言い過ぎました」

お互いに黙ってしまい、気まずい空気が流れる。

こんなふうに悲しい顔をさせたりとか、傷つけたりとかじゃなくて……ただ、構わないで欲しいだけなのにな。

私なんかには構ってないで、自分のことだけを考えてればいいのに。口下手な私は、それを上手く伝えることができない。

「……………はあ」

心配してくれる彼女に感謝の言葉の一つでも言うべきなのだろうが、これ以上素直に口にするのも躊躇われる。

だってそれは、少なからず彼女を許容している自分を認めてしまうことになるから。

「えっと、2人とも？そろそろ私達のこと気付いてくれると嬉しいんだけど」

「え？」

「あ」

いい加減この鬱陶しい空気をどうにかしようと思っていたところで、良く知った声が聞こえた。

袖葉の背後に視線を移すと、玄関の戸の影からひょっこりと姿を見せたのは、制服姿のままの美空だった。

「み、美空？なんでうちに」

「今日は学校が早く終わったから千晴のお見舞いに来たの。それに私だけじゃないわよ」

「……………どういうこと？」

背の高い美空の陰に隠れて見えなかったけど、彼女の後ろに誰がいるようだ。

袖葉が家上がり、美空が玄関に入ってようやく姿を現したのは、恐縮している上原さんと不機嫌そうな平だった。

誰の差し金かすぐに解ったので、そ知らぬふりで楽しそうに笑っている美空を睨みつける。

「美空あ……」

「うふふ、大勢でお見舞いに行った方が千晴も喜ぶかなあと思って上原ちゃんと平ちゃんも連れてきたの」

「嘘つけっ」

絶対私が嫌がると思って連れてきたんだろうなあ。

それより、巻き込まれた上原さんと平がかわいそうだ。何の得もないのにわざわざ学校から遠いこの家に連れてこられるなんて。上原さんは優しいから純粋にお見舞いに来てくれたのかもしれないけど、どうせ平は無理矢理連れてこられたに決まってる。今は不機嫌そうにこつちを睨んでるだけなんだけど、あとで八つ当たりされそうで怖い。

「ごめんね天吹さん、勝手に押しかけちゃって。迷惑だったかな？」
「ううん、気にしないで。わざわざ来てくれたのは嬉しいし、悪いのは全部美空だから」

「えー。ひどーい」
「……まあとにかく、せつかくこんな所まで来てくれたんだから家が上がってよ」

「そ、それじゃあ、お言葉に甘えてお邪魔します」
「私もお邪魔するわ」

美空と上原さんに続いて、平も家に入った。

「では、私はお茶とお菓子を用意してきますね」

柚葉はひとり台所に向かい、私はみんなを居間に案内する。美空と平はうちに来たことがあるから普通にしていたけど、上原さんは初めてだから物珍しそうに視線を彷徨わせていた。

「そういえば、千晴の家に来るのも久しぶりね」

「あれ、そうだったけ？」

「ええ。確か夏休みの始めに遊びに来たのが最後じゃなかったかしら？」

この家は学校からも美空の家からも離れているので、彼女がこの家

に遊びに来ることは滅多にない。
逆に美空の家は学校から近いので、休みの日や学校帰りにちょっとだけ寄ることが多かった。

「でも美空、なんで平まで無理矢理連れてきたの？上原さんはまだわかるけど」

「なによ。菜月は良くて私は来ちゃいけないって言うの？」

「そんなことはないけど……美空と平って仲良かったっけ？」

「え？だって、千晴は平ちゃんと仲良しなんでしょ？だから誘ったんだけど」

「「はあ!?!」」

平は心外だと言わんばかりに声を荒げ、怒りからか顔を真っ赤にさせていた。

そんな大げさに反応しなくてもいいのにと思ってたけれど、嫌いな相手と仲が良いと言われるのは不愉快だろうから怒りもするか。

それにしても。上原さんにも言われたけど、私と平ってそんなに仲が良さそうに見えるんだろうか？

「だっ、誰と誰の仲が良いって!?!根も葉もないこと言わないでよ円堂さん!?!」

「でも上原ちゃんがそう言ってたわよ？」

「菜月っ!?!」

「えっ!?!だ、だって、この前2人で楽しそうに話してたよね?…」

「…それに、保健室で……」

「だからそれは誤解って何度も言ってるでしょうが!私とこいつの仲が良いなんて絶対にありえないんだから!」

捲くし立てるように否定する平を見て美空はしばらく呆気に取られていたが、すぐに含み笑いを浮かべる。

あー……これは、美空の悪戯心に火が点いてしまったみたいだ。こ
うなったらもう誰にも止められない。

「じゃあ平ちゃんは千晴のこと嫌いなの？」

「と、当然でしょ!？」

「ふうん?でも苗字とはいえお互い呼び捨てで呼んでるじゃない。

千晴が“さん付け”しないって、とつても珍しいことなんだけど」

「そ、それはっ…同級生に敬称つけて呼ぶのも呼ばれるのも嫌なだ
けで!」

確かに仲が良い人は呼び捨てで呼んでるけど。

珍しいのは単に友達が少ないからであって、特別な意味は含まれて
いない。

それに平や柚葉のことを呼び捨てで呼んでいるのは本人にそう呼べ
と言われたからだ。

あれ、でも平は美空や柚葉のこと敬称つけて呼んでるような……?」

「……………いいなあ」

2人の口論を心配そうに眺めていた上原さんの小さな声が私の耳に
届いた。

いいなって、いったい何がいいんだろう?

「でも、私が一緒に千晴のお見舞い行こうって誘った時に断らなか
ったのはどうして?

嫌なら断ってくれても良かったのに、わざわざ学校から離れた千晴
の家に来たのは何故かしら?」

てつきり美空が嫌がる平を無理矢理連れてきたのだと思っていたけ
れど、どうやら一応合意の上だったらしい。

「あ、う……それは…体育委員として…責任が……」

「そっかあ。平ちゃんは優しいわねえ」

「うううっ…！」

「ふふ、今まであまり話したことなかったけど平ちゃんって面白いわね。千晴と同じだからかいがいがあるわ」

反論しても無駄だと悟ったのか、平はそれ以上何も言わず疲れた顔でぐったりとしていた。

むきになって否定しても美空を喜ばせるだけなので、諦めるのが一番いい。

散々彼女をいじって満足したのか、げんなりしてる平とは対照的にニコニコと笑みを浮かべている。

「……………どうかしたんですか？」

人数分のお茶とお菓子をお盆に載せてやってきた柚葉は、様子のおかしい平を見て不思議そうに首を傾げた。

「なんでもないわ。ただ、平ちゃんが千晴のこと大好きだって話を
」

「違っつて言ってるでしょおおがああ……逆よ逆っ！」

「ね？面白いでしょ？」

「そうですね……でも、ほどほどにしてあげて下さい。平さんが可哀想ですよ」

「はい。あ、お茶ありがとう」

美空は柚葉が差し出したお茶を受け取って、口をつける。

私は彼女から渡される前に自分でお盆から取っただけで、なにや

ら不満そうな顔をされてしまった。

「平さんと上原さんもどうぞ」

「うん、ありがとう」

「…いただくわ」

全員にお茶が行き届いたので、一息つく。

お茶の効果か、さっきまで騒がしかったこの部屋はあっという間に静かになった。

思えば、この家にこんな大人数の人が集まったことが、今までにあっただろうか。

ばあちゃん知り合いや友人を家に呼ばないし、私は家に招くような付き合いの深い友人は美空だけだった。

柚葉がこの家に住むようになってから、段々人と接することが多くなっているような気がする。

「……今更だけど、もう身体は大丈夫なの？」

お茶を啜っていると、珍しく美空が神妙な顔をして話し掛けて来た。さっきまで己の欲望のままにクラスメートをからかっていた人物とは思えないほどの、真面目な表情でだ。

そんな滅多に見せない真剣な顔を向けられると、調子が狂ってしまふ。

美空は暢気に笑ってるのがちょうど良いのかもしれぬ。

「う、うん、平気。それに明日から学校に行っていていいって言われた」

「身体が弱いことは知ってたけど、一週間も休むなんて今までなかったから心配したのよ？」

「あー、はは、ごめんね、心配掛けて。普段だらけてるから運動不足だったのかも」

「何にせよ無事に治ったのなら良かったわ」

胸を撫で下ろし、にっこりといつも笑みを浮かべる美空。

そういえば私が休んでいる間、彼女は毎日のようにメールで体調のことを気にかけてくれていたっけ。

普段は飄々として掴みどころのないけれど、本当は面倒見が良くしてお節介で優しい友人なのだ。

そんな彼女の存在に、だいぶ救われている。

「……天吹さん、身体弱かったんだ」

「ん、弱いといってもあんまり無茶しなければ大丈夫だし、そんな深刻なものじゃないから。何日か休めばすぐに治るし」

「それって、生まれつきなの？」

「いや、昔は普通に健康だったけど……こっちに引っ越してくる前にあった事故の後遺症つてとこ」

「……………」

あまり詳しく話すと気を使わせてしまうので、当たり障りのないよう説明する。

それに“あの時”のことは自分もよく覚えていない。

私が話したくない事だと察したのか、みんなはそれ以上聞いてこなかった。

「そういえば千晴さん。明日学校に行くのなら、渡した宿題はちゃんと終わらせてあるんですか？」

「あら、大須賀ちゃんったら。そんなこと聞くのは野暮ってものよ？ だっつてずっと暇だーってメールが来てたんだもの。終わってるに決まってるじゃない」

2人は曇りのない晴々とした笑顔で私の方を見つめてくるので、私

もつられてぎこちない笑みを返す。

ああ、今の気分は双蛇に睨まれた蛙つてところだろうか。

「で、ちゃんと宿題やったの？天吹」

「え？もちろんやつてないよ」

「威張つて言うなっ！！」

「あんなの解るわけがない。したがって終わるわけがない」

「馬鹿じゃないの！？今週出された宿題は全部2学期の復習問題なのよ！？」

「平に馬鹿つて言われたくないや」

「……あのね。言つとくけど、私それほど馬鹿じゃないわよ。そりゃ円堂さんや大須賀さんより良いわけじゃないけど、テストで普通に平均取れるんだから」

「え……嘘……だよ、上原さん」

「え、ええとく。裕子ちゃん、頑張り屋さんだし真面目だから、いつも成績良いよ？」

「そんな……ばかな……」

てつきり私と同じくらい成績なんじゃないかと予想してたのに、実は勉強ができる奴だったとは。

だって陸上一筋っぽかったし、勉強そつちのけだとはばかり。

ていうか平均取れるって頭良い方じゃないですか。うわぁ詐欺だ。

「千晴？」

「千晴さん？」

「あ、あはははー」

ちょっと前までは美空だけに怒られていたのに、今は柚葉も加わって倍怖いです。

うーん、この2人を一緒にすると危険のような気がする。

よし、ここは素直に謝っておこう。そして答えを写させてもらおう。

「ごめんなさい、反省してます」

「はぁ・・・こうなるとは思ってたけどね。でも、もうすぐテストだからいつもみたいに答えは見せてあげないわよ？自分で考えて解きなさい」

「ええっ！？それだと今日中に終わらないんだけど」

「大丈夫です。解らないところは私達がサポートしますから」

「しかたないわね…せっかくだし私も手伝ってあげるわ」

「わ、私も！みんなより頭良くないけど、数学と英語は得意だから」

「あらあら良かったわね千晴」

何…この、今から勉強するよ的な流れ…。

いや、宿題は終わらせないといけないから、手伝って貰えるのは正直有り難いのだけど。

それに全員、成績優秀の方々ときたまもんだ。こんな贅沢な環境はなかなかないだろう。

でも、勉強嫌いだから素直に喜べないんだよねえ。

「はぁ…わかった。部屋から宿題とってくる」

自分ひとりで終わらせる自信が無かったので、結局みんなの好意に甘えることにした。

居間からひとりで抜け出し、宿題を取りに自分の部屋に向う。

ええと確か宿題のプリントは机の上に置いたままだったような気がする。それと、筆箱は鞆の中だったっけ。

机の上に無造作に置かれたままの宿題を見つけ、それと鞆にしまったあつた筆記用具を持ち、みんなの元へ戻る。

これから頭のいい人達に囲まれて勉強しなきゃいけないのかと思う

と憂鬱だ。逃げたい。

「きゃっ!?!?」

「わっ!?!?」

途中の廊下で誰かとぶつかりそうになって、思わず身を引く。その拍子にバランスを崩してしまい後ろに倒れかけたけれど、相手が私の腕を掴んで引き寄せてくれたおかげで転ばずに済んだ。けれど勢いよく引つ張られた私の身体は、吸い寄せられるように相手の身体に寄りかかってしまう。顔を見なくても柔らかい身体の感触で誰だか解ってしまう私は、いよいよ変態と罵られても反論できない域なのかもしれない。

「いつもごめんなさい、上原さん」

「ううん、私の不注意だから気にしないで」

上原さんは少し顔を赤らめて、照れ臭そうに微笑んだ。

いつもと同じ反応で、彼女は怒らない。嫌悪しない。反撃もしてこない。

初めて彼女を押し倒してしまった時も、凄く恥ずかしがっていたけど笑って許してくれたんだっけ。

何度も何度も迷惑をかけているのに、何もなかったかのように普通に普通に話しかけてくれる。

押し付けの好意ではなくて、純粹な優しさで接してくれる。

きつと彼女は、生粋のお人好しなんだろう。

このまま密着しているのも恥ずかしいのでやんわりと身体を離して、落としてしまった宿題や筆記用具を拾う。

上原さんも一緒に拾うのを手伝ってくれて、かき集めた宿題のプリントを渡してくれた。

「拾ってくれてありがとう。あれ、でもどうして廊下に……」

「あ、えっと、トイレを借りようと思って」

「それならここを真っ直ぐ行って左に行けばいいよ」

「うん、ありがと」

「じゃあ先に戻ってるから」

「あ、天吹さんっ」

背を向けたところで、呼び止められる。

もしかして戻り方がわからないから待ってて欲しいとか？いやいや、
うちは迷うほど広い家じゃない。

「あ、あのね」

「なに？」

「ずつと前から、言いたかったことがあって……」

上原さんは言い難そうに口を閉じたり開いたりして、なかなか言葉を紡ぐことが出来ずにいた。

そういえば彼女はいつも私に対して何かを言い掛ける事が多い。

けれど結局は何も言わないから、大した事じゃないと思ってあまり気にしていなかった。

「えっと、クラスメートになれたけど、でも、だから、あの……ええと……っ」

「落ち着いてからでいいよ。ちゃんと聞くから」

「う、うんっ」

彼女は大きく息を吸ってゆっくりと吐き出し、落ち着こうと頑張っている。

些細な仕草がいちいち可愛らしく小動物のように愛らしい。

そんなことを考えながらのんびり待っていると、彼女はようやく決心がついたのか、真剣な目で私を捉えた。

「天吹さん！」

「え、あ、はい」

先程とは打って変った勢いに圧倒されて、思わず背筋を正してしま
う。

こんなに切羽詰った様子なのだから、彼女にとって重大な話をしよ
うとしているのだろう。

緊張して、ごくりと喉が鳴る。

「あの…よかったですら私と…と、友達になってくださいっ！！」

「……………ほあ」

気合の入った彼女に何を言われるのかと身構えていた私は、突拍子
の無い言葉に間抜けな声を漏らした。

いやしかし、友達になってくださいなんて初めて言われたなあ。友
達って、自然となるものだし。

「だ、駄目？」

「うーん、なんというか」

嫌われ者の私と友達になってしまったら、彼女の周りは悪い意味で
一変してしまうだろう。

今でさえ上原さんの友人は私と彼女が仲良くしていることを快く思
っていないのだから。

だから……………ここで突き放しておいたほうが彼女の為になるはずだ。

こんな私に優しく接してくれている彼女だからこそ、悲しませたくない。

それに面倒なことが増える。それも、遠慮したい。

しかし、やんわりと断るにはどう言えばいいだろうか。

角が立たない上手い言葉が思いつかなくて、困ってしまう。

「迷惑かなって思って、言えなかったけど。でも、やっぱり天吹さんとともに仲良くなりたいんだ」

「……どうして？ 私と一緒にいてもろくなこと無いよ？」

「そんなことないよ」

いつも控えめな彼女が、はっきりとした口調で反論する。

その根拠と自信はいつたいたいどこから来るんだろう。

「上原さんも知ってるよね？私が周囲から嫌われてるって」

「……うん」

「私と一緒に居たら変な目で見られる。今まで付き合ってた友達も離れてしまいかもしれない。だから」

「例えそうなたとしても、それでも私は、一緒にいたいよ。私は、もう……」

「上原さん？」

必死な表情で何かを言いかけて、彼女は慌てて口を閉ざした。

「……ううん。なんでもない」

「？」

「ごめんね、困らせちゃって。でも、それを理由に断わるのは無しにして欲しいな。」

もちろん、天吹さんが嫌だったら諦めるつもりだよ。自分でも、凄

「我俥言ってるって、解ってるから」

彼女は どうして そんなに 私と 仲良くなり たい んだろう。
私と いても 得 なんか ない し、 損 ばかり が 一 方 的 に 増 える。
だから、 やっぱり

「上原さ」

「おや、初めて見る顔だね」

「えっ？」

「げっ」

私の言葉を遮ったのは、部屋で趣味に没頭しているはずのばあちゃんだった。
いつの間に傍にいたのか、私の隣で上原さんを値踏みするように眺めている。

「ほほう、今回はまた随分とまた可愛らしい子を手籠めにしたんだねえ……末恐ろしい孫だよ」

「ちよつとばあちゃん、いきなり変なこと言わないでよ。それにこの人は……」

「はっはっは、申し訳ない。私はこの子の祖母だね」

この人はクラスメイトの上原さん、と言おうとしたところでまたも遮られてしまう。

まったくもう、話の途中で割り込むなっつての。

「お、お邪魔してます！私は天吹さんと同じクラスの上原菜月とい
います」

「菜月ちゃんか。遠いところわざわざ見舞いに来てくれてありが
うね」

「いえ、連絡もなしに勝手に押しかけてしまつて」

「いやいや、そんな些細なことを気にしないでいいんだよ。それより、柚葉に美空に裕子ちゃんに菜月ちゃん……ははは、千晴の周りはまつたく美人揃いじゃないか」

ああ確かにみんなレベル高いよね……つて、あれ？

平がうちに来た時はあちゃんは出かけてたから、彼女とは顔を合わせたことが無かつたはずだ。

「ばあちゃん、なんで平のこと知ってるの？」

「さつき挨拶してきたからに決まつてるだろう？」

いつの間じ。

余計なことを言つてないといいいけど……何故だろう、凄く嫌な予感がする。

「ま、今後も千晴と仲良くしてやつておくれ。この子は誤解されやすういせいか、なかなか友人ができなくてね」

「ちよつ！ばあちゃん余計なことを……」

「千晴。いいかげん、妙な意地を張るのやめな」

「……………」

ぐしゃぐしゃと荒つぽく頭を撫で回されて、あつという間に髪が爆発したように乱れてしまつた。

上原さんに見られていると思うと恥ずかしいので、頭に置かれたばあちゃんの手を払いのけてから髪を手櫛で整える。

「おつと、そろそろ時間だ。これからちよいと所用で出掛けてくるから、後は若いもんだだけで楽しんどくれ」

「わかつた」

「そいじゃまたね、菜月ちゃん。またいつでもおいで」
「は、はい！」

ばあちゃんは満足げに頷いてから、玄関のほうへ歩いていった。もつと絡んでくるものと思っていたので、あっさりと出掛けてくれたのは助かった。

ばあちゃんのことだから、何を言うか解ったもんじゃないし。とにかく、面倒なことにならずに済んで一安心。

いや、それより平たちと何を話していたのが気になってしかたないので、早く居間に戻る。

「天吹さん」

「あー……」

さりげなく逃げようとする私を引き止める為に、手を掴まれてしまった。

どうしても彼女は私の返答を望んでいて、有耶無耶に誤魔化すことができないようだ。

それほど真剣に考えているということなんだろうけど。

「駄目かな？」

「……………」

同じクラスになって、あまり話す機会はなかったけれど。

普通に話しかけてくれた彼女は、柚葉や美空と同じように、変わり者なのかもしれない。

だから、私は彼女のことを嫌いにはなれないのだ。

「何もかも承知の上で言ってるんだったら、断る理由がない、かな」

「え」

面倒なことになるって解ってるけど。

強く握られている彼女の手を、私は強引に振り払うことができないから。

だから、仕方がない。

「ほどほどに宜しくね、“菜月”」

「……わ、わあっ！あ、ありがとうっ、ハ……じゃなくて、千晴、ちやんっ！……」

嬉しそうな顔を隠しもせず、瞳をキラキラと輝かせて、眩しくてまともに菜月の顔を見てられない。

なんだろう、友達になっただけなのに、この喜びよう。正直、こういうのは苦手だ。

彼女の眩しい瞳で見つめられるだけで精神がどんどん磨り減りそうな気がする。

「菜月」

「な、何？」

「そういえばトイレ行かなくて、大丈夫なの？」

「あ……う、うん、そうだった。行ってくる、ね！」

彼女は恥ずかしそうに顔を伏せながら、早足で廊下を歩いていった。私も身体を反転させて、居間に戻ることにする。

(……これでよかったのかな)

断るつもりだったのに、断ることができなかった。

友人関係なんか増えても面倒だと思っていたはずなのに、どういう心境の変化だろう。自分のことなのに、よくわからない。

彼女を受け入れたことを後悔しているはずなのに、どこか嬉しいと感じている自分もいる。

騒がしいのも、面倒なものも、悪くないって思い始めてる。

(深く考えるのは、やめとこ)

自分は、あくまで自分だ。

小さな変化が起ころうとそれは変わらないんだから、今までどおり適当に過ごせばいい。

いっそのこと頭を空っぽにして何も考えずにいられたら楽なんだろうけど。

(……………疲れた)

柄でもないことを考えたせいか、頭が鈍くなってきている。

この程度だったらしばらくすればすぐ治るだろうし、気にすることもない。

「宿題持ってきたよー……………ってあれ？」

居間に戻ると、あきらかに部屋の空気が変わっていることに気がついた。

柚葉はいつも通りだけど、平はいつも以上に目つきが鋭く無言で、美空は随分と楽しそう……ってこれは普通か。

でも、これはいったいどういう状況なんだろうなあ。気になるけど知りたくない。

ただひとつだけ解ったことは、ばあちゃんが何か余計な事をみんなに吹き込んだってことだ。

「千晴さん。今さっきおばあ様に来て、用事で出かけると」

「うん知ってる。廊下で会って聞いたから」

「そうでしたか」

柚葉の隣に腰を下ろして座ると、正面に座っていた平と目が合った。うちに来た時から不機嫌そうな顔をしていたけれど、今はさらに不機嫌というか、怒ってる感じだ。

触らぬ神に祟りなしと言うし、不用意に触れると何されるかわからないのでこのまま放っておこう。

この場をやり過ぎすには、勉強を真面目にやって早く終わらせるしかない。

まずは数学のプリントを広げてからシャーペンを握り、難解な問題に立ち向かう。

最初の問題から挫けてしまいそうだけど、やれるところまでやって、解らない所を教えて貰うことにする。

「ねー、千晴？」

「何？今まじめに勉強してるんだけど」

「大須賀ちゃんがきてもうすぐ一ヶ月だけど、ふたりの仲はいいどこまで進んだのかしら？」

「……………」

プリントに強くペンを押し付けすぎて、芯が折れた。

内心動揺しつつも冷静を装ってシャーペンのノックを力チ力チと無駄に鳴らす。

いかん、ここで取り乱してしまつたら美空の思つツボだ。何もやましい事はないのだから、堂々としていればいい。

「……進んでないし、進めるつもりもないから」

「もー、駄目じゃないの。おばあさんが心配してたわよ？大須賀ちゃんがいるのに愛人ばかり増やして困つた子だね、って」

「何を話してんだあのおばあさんっ！！もしかして他にも余計なこと言つたんじゃないっ」

「そうね、平ちゃん（の胸）を見て“千晴は嗜好が変わつたようだねえ”って言つてたわね」

私はべつに巨乳好きってわけじゃないし、そもそもそれ自体に興味がないってのに。

ああでも平の機嫌が悪化してるのは十中八九それが原因か。

美空の機嫌が良いのは、ばあちゃんと一緒に平をからかつて遊んでたんだらうなあ。

「…なんで私がアンタの愛人扱いされなきゃいけないのよ。全くいい迷惑だわ」

「ばあちゃんが勝手に妄想してるだけだから、気にしないでいいよ」

「大体、柚葉があんたの婚約者ってどういふことよ。色々おかしいでしょ」

「ばあちゃん達が勝手に妄想した設定だから、気にしないでいいよ」

私が居間を抜けていたわずかな時間で、平は柚葉のことを名前で呼ぶようになつていた。

もともと敬称をつけるのが好きじゃないと言つてたから驚くことでもないか。

「別に、天吹のことなんてどうでもいいけど。私には関係ないし」

「あら？大須賀ちゃんの婚約者が天吹って聞いた時は平ちゃん、凄く動揺してたわよね？」

「ふ、普通は驚くでしょうがっ！」

「……同性同士だからですか？」

「まあそれもあるけど、柚葉の相手が天吹だったのが一番驚いたわ。天吹に柚葉は勿体無いと思う」

確かに柚葉は私には勿体無い位の女の子って思ってるけれど、改めて言われると腹立つな。

「もし婚約が本当だとしたら、絶対家の事情とかで無理矢理〜とかそんなところでしょ」

「少なくとも私は千晴さんのこと大好きですよ？婚約についても私が望んだことです」

「う…こ、コイツのどこがいいんだか…早く目を覚ましたほうがいいわよ？」

柚葉は何も答えず、柔らかな笑みだけを返す。

何を言っても無駄だと感じたのか、平は呆れ顔で溜め息を吐いた。その隣では美空がにこにこしている。

私としても、いい加減早く目を覚まして欲しいのだけだ。

すぐに嫌気がさしてこの家を出て行くと思っていたのに、一向に諦める気配がないのだ。

予想よりも遥かな長期戦を覚悟しないといけないのかもしれない。

「ほらほら勉強しないと明日までに終わらないわよ〜？」

「自分が邪魔したくせに…」

ここで言い争っては終わるものも終わらないので、黙って勉強

を再開した。

美空と平は持参したファッション雑誌に夢中らしく、結局菜月が戻ってくるまで勉強を見てくれたのは柚葉だけだった。

といっても、柚葉は解らないところを聞けば頭の悪い私に分かるよう丁寧に教えてくれるので、彼女ひとりだけで十分だ。

もしかしたら、学校の先生よりも教え方が上手かもしれない。

「柚葉、ここの空欄だけど」

「そこは関係副詞が入ります。例文の中にありますよ」

「なるほど、これね」

柚葉のおかげで、順調に宿題が進んでいく。

数学と英語のプリントを半分ほど終わらせたところで、ようやく菜月が戻ってきた。

「遅かったね」

「クラスの友達からメールがきて、廊下で返事を打ってたの」

彼女は躊躇いなく私の隣に座ってきたので、私は柚葉と菜月に挟まれている状態になった。

2人の女の子に寄られて心中穏やかじゃないのだが、菜月はそんな私の動揺に気付くことなく、興味津々にやりかけの宿題のプリントを覗き込む。

「わ、結構進んでるね。…私の出番はないみたい」

「先生がいいから」

「そんなことないですよ。千晴さんは呑み込みが早いみたいなので、真面目にやればちゃんと出来るんです」

そんなこと言われても勉強なんてつままないから真面目にやる気が

起きないのだ。

こうして勉強するのは、どうしてもしなければいけないって時だけ勉強なんて面倒なのに自主勉強とかやつちゃう人はマゾなのかと思ってしまう。

「ちょっと菜月、こっち来て！アンタに似合いそうな服が載ってるのよ」

「え、あ、うん！…じゃあ、頑張ってるね千晴ちゃん」

「はい」

「……………」

平に呼ばれた菜月は美空たちと混じって、何やら楽しそうに雑誌を見て盛り上がっているようだ。

しかし…何しに来たんだろうな、あの3人。邪魔されずに勉強できそうなので、別にいいけど。

楽しそうに談笑している彼女たちは気にしないことにして、目の前の問題を考えることにした。

ええと、あれ？ be 動詞 + 過去分詞って受動態だったっけ？教科書に載ってたような気がするけど、うる覚えだ。

「千晴さん」

「んー？」

「千晴さんは、アニメや漫画に興味ないんですか？」

「？ 興味はないけど、暇な時やばあちゃんに薦められたヤツは見てる」

「……………そうですか」

何でそんなことを聞くのか不思議に思ったけど、勉強のほうに集中していたので疑問を口にはしなかった。

「私もある人の影響で時々見るようになったんですが、面白くて大好きなんです」

「へー、ばあちゃんと話が合うんじゃないの？」

「おばあ様は何と言うか、次元が違いますから…」

「ああ…そうかも…」

ちよつとかじつた程度らしい柚葉と専門用語を当然のごとく喋りまくるばあちゃんじゃ無理か。

不本意ながら私もばあちゃんの影響で知識はあるけど、ばあちゃんの話についていけない時があるのだ。

同じものが好きでも、差が激しいと語り合うことができない場合もある。

「お薦めの漫画があるので、よかつたら今度読んでみてください。」

お貸しますから」

「うん、わかつた」

漫画を読むくらいどうってことないので適当に頷くと、彼女は幸せそうに微笑んだ。

……自分の好きなモノを誰かと共有できるのが、嬉しいのかもしれない。

でも、優等生の模範のような彼女が漫画やアニメのことを好きだとは思わなかった。

ある人の影響って、もしかしたらばあちゃん……だったりして。まさかね。

「千晴ー！大須賀ちゃんー！見て見てこの服ー！」

目を輝かせた美空が手招きをしているが、問題を解くのに忙しいので適当に返事して無視をすることにした。

こっちは真剣に勉強しているというのにあちらは随分と楽しそうだ。

「ええい、勉強させたり邪魔したりどういつつもりだったの」

「ふふ。だいぶ進みましたし、少し休憩しましょう。あまり根を詰めても捗りませんから」

「じゃあ……そうする」

握りっぱなしだったペンを置いて立ち上がる。

ずっと苦手な勉強をやっていたので、休憩は嬉しい。

(げっ!?)

そのまま美空たちの元に行こうと足を動かした時に、ようやく自分の身体の違和感に気がついたのだが、

気付くのが遅れてしまったせいで身体は自分の意思に反してぐらりと傾いた。

身体が治っていないわけじゃなくて、ただ単に同じ姿勢でずっと座っていたせいで足が痺れただけだ。

(わっ、わっ、やばい!)

このままだと楽しそうに談笑している美空たちを巻き込んで倒れてしまう。しかし自分には、回避する方法と自信がない。

倒れてまたいつものような展開になってしまっただろうなあと半ば諦めて流れに身を任せているしかなかったのだが

(……あれ?)

トン、と両肩に暖かな手の感触を感じる。
身体を支えられたおかげで倒れることなく、いつものような展開になることもなかった。

「大丈夫ですか？」

「……うん」

私が倒れそうになっていたことに気付いた柚葉が助けてくれたようだ。

彼女の支えを借りて、倒れかけていた身体を自力で起こす。

柚葉のほうを向いて謝ろうと口を開きかけた時、そっと彼女の指で押さえられてしまい言葉を紡げなかった。

「大丈夫ですよ、私が支えますから。だから」

「え？」

その先は声が小さくて聞き取れなかったので何を言ったのか解らない。

気になったので何と言ったのかももう一度聞こうとしたけれど、美空に急かされたので結局聞き返すことができなかった。

雑誌を読んでいた3人の輪に加わり、他愛もない話をしながらこっそり柚葉の横顔を盗み見る。

一度見たら忘れられないほど端麗な顔なのに、彼女の顔は自分の記憶の中に存在していない。

彼女は過去に私と会ったことがあると言うけれど、未だに思い出すことが出来ていないのだ。

いつどこで会ったのか聞いても、柚葉もばあちゃんも教えてくれないのはどうしてだろう？

教えてくれないとなると、彼女のことを知る方法はもうひとつだけしかない。

(思い出さないと、いけない)

そうしないといけない気がする。
彼女から解放される為じゃなく、静かな日常を取り戻す為でもなくて。

ただ漠然と、そう思うのだった。

難しくても簡単なこと

先週、恐怖の定期テストが行われた。

いわゆる中間テストなので試験範囲は狭いのだが、広がるのが狭かろうが頭の悪い自分にはあまり関係のないこと。

さすがに勉強嫌いの私でもちゃんと対策をしてテストに臨んだわけだが、所詮は一夜漬けという名の付け焼刃。

なかなか手応えがあったとはいえ、どうせ今回も低い点数に違いないだろう。しかし、私は赤点さえ回避できていれば全く問題はないのだ。

教師や身内のお小言は聞き慣れてはいるけれど、赤点を取った者だけに課せられる地獄の補講を受けるのだけは御免だった。

もうテストは終わってしまったので、今はとにかくそうならないように祈るしかない。

そして数日経った今日、ついに全教科の成績が書かれたプリントを渡されたのだが

「……………oh」

予想していなかった結果に、開いた口が塞がらなくなった。

「……………ありえない」

自分の手にしている成績表が自分のものとは思えないくらいありえなくて、持つ手がガタガタと震える。

間違つて他の人のものを渡されたのではないかと、何度も何度も名前を確認してしまつた程だ。
もしかしたらプリントミスではないかと疑つてしまつぐらいに、自分の成績が不可解だつた。

「千晴？なに成績表見て変な顔してるの……って、もしかして相当酷かつたとか？」

「うん、これは酷い」

「どれどれ？ な、なにこれ」

恐る恐る私の成績表を覗き込んだ美空の表情が、驚きに変化していき、

疑うように何度も目を擦り、私から成績表を奪つて顔の近くでじっくりと成績を確認していた。

私だけでなく、彼女もまた信じられないという表情をつくる。

普段の私の成績を知っている彼女なら、そんな顔をするのは当然といえよう。

「これ、本当に貴女の成績なの？」

「そうみたい」

「ち、千晴の成績とは思えないわね」

「自分でもそう思う」

「赤点が一つもないどころか、三分の一の教科は平均点以上って…
…今までの成績からは考えられない程上がってるじゃない」

そう。驚いていたのは、今回の成績が予想を遥かに超えて良かったからだ。

今までは美空が綺麗にまとめた「特製ノート」を借りていたので、高確率で赤点を回避することはできていた。

しかし彼女の力を借りても赤点を回避することで精一杯で点数はどれも低く、悲惨な成績だったのだ。

それが今回、不思議なことに全教科の点数が高く、三分の一は学年平均を上回っているという予想外のことが起きたのである。

普通の学生から見たら平凡な成績かもしれないが、これは、頭の悪い私にとっては考えられない程の好成績なのだ。

「クラスでの順位が18位とかありえないよね」

「まあ、いつも最下位あたりだったものねえ」

ちなみにうちのクラスは30人いて、私の成績順位はいつも25位、最下位の辺りを彷徨っている感じだった。

なので今回の順位は劇的に上がっていると言っているといいだろう。

「奇跡だよね」

「奇跡よね」

うんうんとお互いに頷きあう。こんな成績、奇跡でも起こらない限り取れっこないんだから。

あー、いや……心当たりがないわけじゃないんだけど。

「そういえばテスト前は柚葉に勉強見てもらってた。強制的に」

勉強は嫌だと言っても駄目ですの一点張りで断ることが出来ませんでした。

「なるほど、大須賀ちゃんのおかげかあ。それにしても救いようのない千晴の成績をここまで上げるなんて凄いわね」

「まあ確かに教え方は凄い丁寧で解りやすかったかな」
「ふふ、真の天才は他人にも影響を与えるものなのね」

影響、ね。

それを言ったら、今まで赤点を回避できていたのは真の天才・美空さまの影響だと思っただけだ。

「……ところで美空はどうだったの？」

「見てみる？いつもと変わらないけれど」

彼女の成績表を渡されたので、遠慮なく見させてもらうことにする。ざっと目を通せば、私には一生かかっても取れないような成績がたくさん並んでいた。うん、予想通りっていうか、美空らしい成績だわ。

「クラスで2位、学年では5位かあ……はは……」

凄すぎて笑いがこみ上げてくる。

順位もだけど、点数も普通に100点とかあるのがまた恐ろしい。いったいどう勉強したらこんな成績を取ることができるんだろうか？

「真面目に授業を受けて、テスト前にちょっと復習すれば誰でも取れるんじゃないかしら？」

「まじですか」

そんなお手軽に上位成績者になれば、世の中の学生は苦勞しないんだろうけど。

なんにせよ、私には到底無理な話だ。美空とは頭の作りから勉強への姿勢まで何もかもが違うのだから。

それに私は成績を良くしたいわけじゃないし、赤点さえ取らなければ

ばそれでいい。

「あ。さっき見せてもらったんだけど、学年1位はやっぱり大須賀ちゃんだったわ」

「それは何となく予想できてたー」

たしか、テスト前は私の勉強に付きりだったはず。

自分の勉強をしながら見てくれていたけど、私が質問ばかりしてたからなかなか捗らなかつただろうに。

それでも好成绩をとった袖葉は、素直に凄いと思う。完璧超人って実在したんだなあ。

「でも千晴も頑張ったじゃない。そうだ、成績良かったから何かご褒美をあげようかしら」

「え、いいよ別にー。まあ、くれるんなら貰うけど」

「何がいいかしら。千晴の好きなモノ、といえば……………えっちな本とか？」

「いつエロ本が好きって言ったっ!? むしろ嫌いな部類だったのっ!?!」

「巨乳のおねえさん系が好みだとか言っただけじゃなかった？」

「言っただけじゃせんっ!」

「あー、照れなくてもいいのよ。お年頃なんだから興味を持つのは当たり前だし今後の為にもちゃんと勉強を」

「いらないっ! 絶対対いらないっ! もう何もいらないっ!」

「はいはい、軽い冗談なんだから拗ねないの。今度一緒に甘いものでも食べに行きましょ、奢るから」

「ぐぬぬっ」

「うふふ、商店街のチョコパフェでどう? 好きだったでしょ、あれ」

さすが中学からの腐れ縁。

私の好きな物も機嫌のとり方も何でも把握しているので、簡単にあしらわれてしまった。

やっぱり美空は一枚も二枚も上手だ。今までも、そしてこれからもずっと、私は彼女に敵わない。

けれど私と美空の関係は、今の感じで丁度いいんじゃないかと思う。

「それにしても遅いわね大須賀ちゃん。誰かに捕まってるのかしら」「かもね」

柚葉は今、クラスの日誌を届けるために職員室へ行っているので教室には居ない。

私と美空は彼女と一緒に帰る約束をしていたのでさつきから戻ってくるのを待っていたんだけど、

成績優秀で授業態度も良い彼女は教師にも好かれているようだから誰かに捕まって長々と話し込んでいるのかもしれない。

ちなみに菜月も一緒に帰りたと言っていたけど、家の手伝いがあるからと残念そうに先に帰っていった。

「……バスの時間まで余裕あるから気長に待つよ。最終便に間に合えばいいし」

「あら優しい。いつもの千晴なら遅くなると愚図って先に帰ろうとするのに」

「成績良かったから、機嫌良いの」「ふうん？」

どうしてそこで嬉しそうな顔をするのかね。

いつものことだけど美空の考えていることは全く読めない。私が馬鹿だからかもしれないけど。

「あ、見て千晴。あれって平ちゃんじゃないかしら？」

「んー？ 平？」

窓から外を覗き込んでみると、陸上部がグラウンドで1000m走をしているようだった。

美空が指で示した先には元気よく屈伸をしている平の姿がある。

「頑張ってるわね、彼女」

「そうだね」

やっぱり意地だけで部活を続けているわけじゃなくて、走ることが本当に好きなんだろうな。
離れていてよく見えないけど、どことなく生き生きしていて楽しそうだと分かる。

テスト期間中は部活が休みで走れなかったみたいだから、今日からようやく走ることが出来て嬉しいんだろう。

どおりで今日は一段とご機嫌だったのか。うん、納得した。

「お？」

「！」

しばらく部活に励んでいる彼女を眺めていたら、突然平が校舎を見上げたので目が合ってしまった。

応援の意味をこめてなんとなく手を振ってみると、平は慌ててそっぽを向いて、逃げるように仲間の元に駆けていく。

ははは、無視ですか。相変わらず嫌われてるなあ私。

「平ちゃんは照れてるだけよ？」

「いやあそんな風には見えなかったけど」

「ふふ、彼女つてちょっと干晴に似てるのよね…今みたいに素直じゃないところとか」

「は？？似てないっての」

拗ねた口調で反論すると、笑われてあやすように頭を撫でられてしまった。

子供じゃないんだからそんなこととしてご機嫌取りしなくてもいいのに。

「似てるといえば、千晴と大須賀ちゃんも似てる気がするわ」

「いやいや、それはマジで絶対にありえない」

あんな完璧超人と私みたいな無能な人間を一緒にしたら駄目だってそれに似ている箇所なんてひとつもないに決まってる。

「確かに今の千晴とは似てないんだけど、雰囲気は昔の貴女に少し似てるのよ。そうね、出会ったばかりの千晴に、かしら」

「そんなまさか」

「最近その事に気付いたんだけど……ふふ、よく考えると私の気のせいかもしれないわね。　　あら？」

と、話の途中で聞き覚えのある着信音が鳴った。多分、美空の携帯の音だろう。

よく聞く音だから、きっと彼女の両親からのメールに違いない。

「お母さんからみたい」

携帯を取り出した美空はしばらく画面に見入っていたけど、すぐに慣れた手つきで返信を打ち始めた。

しばらくすると送り終わったのか、携帯を閉じてポケットへしまっ。

「……千晴、悪いけど先に帰ってもいいかしら」

「ん、いいよ。柚葉には言っておくから」
「うめんね」

美空は慌てて自分の荷物を掴み、早足で教室を出て行くこととする……が、一旦こっちに戻ってきた。

「ねえ、今度の休みにでもうちに来ない？お母さん、千晴に会いたがっていたから」

「じゃあ、週末暇だし遊びに行く。美空のお母さまに宜しく言っています」

「……ええ。それじゃ、また明日ね」

いつもと変わらない笑顔を浮かべて、美空は教室を出て行った。

ひとりになった私はすることがないので、机に突っ伏して柚葉が戻ってくるのをのんびり待つことにする。

きっともうすぐ、戻ってくるだろう。

「……………」

他のクラスメイトはもう帰ってしまったようで、教室に残っているのは私だけだった。

辺りは静かなもので、聞こえてくるのは外で頑張っている陸上部の元気の良い掛け声ぐらいだ。

騒がしいのは苦手だから、これぐらい静かだと心が落ち着く。

昔はいつもこんな風に独りでいたはずなのに、最近は美空だけでなく柚葉も近くに居るし、この間からは菜月もよく一緒に居るようになったし、

おまけに平まで話しかけてくるように……っていうか、因縁をつけてくるようになった。

そのおかげで毎日が騒がしい。いや、自分の体質のせいで騒がしいのはずっと前からだったはずだけど。前とはちよつとだけ違う気がする、自分の周りの騒がしさ。それはやっぱり苦手だけれど、嫌じゃない。相変わらず面倒なことは嫌だし、厄介なことには関わりたくないとは思っているのだが。

(厄介事といえば、柚葉のことを思い出さないといけないんだっ)
あれから何度も昔のことを思い出そうと頑張ってはいるが、この街に引越してくる以前の記憶は霧がかかったようにぼやけている。大雑把なことは覚えていてくれるけれど、出会った人の特長とか名前とかを思い出すことが出来ないのだ。柚葉のように目立つ子なら覚えていてもおかしくないはずなのに、いくら記憶を探っても彼女の存在はなかった。こうなったら、じっくり時間をかけて自然と思い出していくしか方法がない。こればかりは焦ってもどうしようもないのだ。柚葉かばあちゃんか正直に全部話してくれれば話は早いんだけど、期待できそうもないし。

これ以上考えてもしかたないので、思考を停止させることにした。

(… ああ、暇だな)

静かで気は楽だけど、つまらない。

丸めていた背中が痛くなつたので机から身を起こし、茜色に染まりつつある空を眺めながら息を吐いた。

*

しばらくして、教室のドアが開く。

ようやく戻ってきたかと目を向けると、入ってきたのは柚葉ではなく見覚えのない女の子だった。

彼女は教室を見渡してから私に気付くと、つつかかと足早に寄ってきて細められた目を向ける。

「ねえ、円堂は？」

「美空なら先に帰ったけど」

なんだこの人。別のクラスの美空の友達…みたいだけども。

「ふーん？彼氏とデート？」

「知らない」

母親に呼ばれて帰ったみたいだけど、話すのが面倒なので知らないふりをする。

「あ、そう……天吹さんって円堂と友達なんでしょ？」

「そうだけど」

「友達なのに、置いてかれたんだ？そりゃ貴女なんかよりも彼氏や別の友達を優先するわよね」

何がおかしいのか解らないが、目の前の少女はくすくすと一人で笑っている。

ひとつ言っておくと、美空に彼氏なんていない。今は誰とも付き合っていないことを、私は本人から聞いて知っている。

「ねえ貴女って、本当に円堂の友達？」

「さあどうだろうね」

この人はいったい何が言いたいのだろうか？

美空はここにいないんだし、用が済んだのなら早く帰ればいいのに。そつえば最近こんな風に特に仲のよくない人に話しかけられることが多い気がする。大抵はこの人と同じように嫌味とかだけ。

「勘違いしてるみたいだから、教えてあげてるのよ」

「はあ？」

「貴女の周りに居る人たちはみんな、残念で可哀想な貴女のことを放って置けなくて、同情してるだけなんだから」

「……………」

「いい加減気づいたら？友達だなんて思ってるのは自分だけなんだって。全然つり合っていないよ、貴女と、周りの人と」

わざわざ丁寧に忠告してくれているのだろうか。

本当のところは、私と美空の仲が良いのが気に入らなくて文句を言いたかっただけだろうけど。

「言われなくてもわかってたよ、そんなこと」

私と彼女たちと肩を並べるためには圧倒的に、足りない。何もかもが足りない、欠陥だらけだって解っている。

そんなこと、ずっと昔から理解している。

「それに円堂って面倒見がいいもんねー。いっつも貴女のこと気に

してばかりで、私達とはなかなか遊んでくれないもん」

「美空がアンタと遊びたくないだけじゃないの？」

「は？馬鹿じゃないの？そんなわけないでしょ……ってなにその目、すんごい腹立つんだけど」

「元からこんな目をしてるんで」

「っ！ああもう、気分悪い！てか美空たちも馬鹿よね、なんでこんなヤツの」

「あのお」

私は勢いよく席から立ち上がり彼女と距離を詰めて、正面から見据えた。

すると、相手は怯えた様にうろたえて一步下がる。

「な、なによ」

「私のことは何言っても構わないけど、友達のこと悪く言うのやめてくれる？なんか、腹立つから」

「……っ、元々は貴女が悪いんでしょ！？」

「うっさいよ」

「っっ！いい気になって！調子に乗らないでよねっ！！」

言いたいことを言って満足したのか、彼女は慌てて教室を出て行ってしまった。

うるさい人が帰って私一人になったので、再び教室に静寂が訪れる。なんか、ちよつと喋っただけで疲れたな。適当にはいはい領いてやり過ぎればよかったけど、つい言い返してしまった。

こここのところ沸点が低くなってる気がするのだが、ストレスでも溜まってるんだろうか？

心当たりが多すぎて絞れないけど。ていうか全部かも。

気分を紛らわせるように頭をわしわしと搔いて、大げさに溜め息を

吐く。

さてと。

そろそろ、いいかな。

「 いるんでしょ、 柚葉」

独り言のように呟けば、カラカラと控えめに教室のドアが開き彼女が入ってきた。

「バレてましたか。ごめんなさい、盗み聞きなんかしてしまって」

「いいよ別に、気にしてないから。それよりバスの時間があるから早く帰ろう……あ、美空は用事あるから先に帰るって」

柚葉が戻ってきたのなら、もうここに残る意味はない。

自分の荷物を持って教室を出ようとしたところで、柚葉に腕を掴まれた。

「……なに？」

「私、千晴さんの目が大好きですよ」

「ぶはっ」

急に変なことを言われたので噴出してしまった。くそ、今のはちょっと不意打ちだ。卑怯だ。

耳の辺りが熱いので、もしかしたら赤くなってるかもしれない。とにかく、動揺を悟られないよう心を落ち着けて、冷静なフリをする。

「よく死んだような目だと言われてますが」

「私には優しい瞳に見えます。普段は解り難いかもしれませんが、千晴さんは力強く優しい瞳をしてるんです。きっと美空さんも、そう見えてますよ」

「ないない。ありえない。といいますか鳥肌立つので恥ずかしい」と言うのをやめて」

「気付いてないのは見ようとしなの方と、千晴さん自身です」
「……………」

柚葉は私のことを過大評価しているし、何を言っても無駄な気がする。

けれど彼女の言葉は真実のように聞こえてるから厄介で、本当にそうなんじゃないかと錯覚してしまいそうになるのだ。

「同情なんかじゃないです」

「え？」

「私も美空さん達も、好きで、自ら望んで、貴女の傍に居るんです。

千晴さんが責任を感じる必要なんてないんですよ」

「……………なんのことやら」

前にも同じようなことを言われた気がする。

独りでいた私につきまとして、ずっと傍にいてくれた友人に。

（美空…………）

何を言っても、迷惑をかけても、それでも笑ってずっと一緒に居てくれた。

私がいっつもの騒ぎを起こしても、茶化して場の空気を和ませてフォローしてくれていた。

そんな彼女の優しさを何も考えずただ当たり前のように享受して、

いつもずっと甘えていた。

「やっぱ私って駄目で、馬鹿で、無神経で、変態で、どうしようもないよね」

「そんなことないですよ」

「いや、このままじゃ駄目なんだよ、きっと……」

「え？」

「なんでもない、ただの独り言。…いいから早く帰ろう柚葉。バス逃しちゃったら、歩いて帰らないと行けなくなるよ」

「いえ、遅れてしまっても大丈夫です。タクシー呼びますから」

「うわあ、セレブだ!!」

やっぱり柚葉はどこぞのお嬢様かもしれない。

パスケースに入ったゴールドに輝くカードを見せられて、そう確信した。

いやあ滅多に現物を見れない物を見せられたから、庶民の私は眩しくて危うく目が潰れるところだったわ。

「ああ、そうだ。テストの結果なんだけど、おかげで赤点取らずにすんだ…というより成績が凄くよかったわけなんですが」

「わあ！それは良かったですっ。おめでとunggございます」

まるで自分のことのように喜んでくれる彼女を見ると、自然と顔が綻んでしまう。

「うん。だから、勉強に付き合ってくれてありがとう」

「……………あ」

柚葉は一瞬驚いた表情をして、けれどすぐ嬉しそうに破顔する。

そんな顔をされるのが照れ臭くて苦手だから、素直にお礼を言いた

くなくかつたんだけど、まあいいや。

「と、とにかく、帰りますか」

「千晴さん、あのっ！ 帰りに商店街に寄ってもいいですか？ 晩御飯のお買い物をしたいので」

「もちろん。あー、私も買うものあった。……ある人にプレゼントをあげたいんだけど、私ってセンスがないから柚葉も選ぶの手伝ってくれない？」

「それは構いませんけど、私でいいんですか？」

「？ 私より、柚葉のほうが何倍もセンスいいからお願いしたいんだけど」

「ふふ、私が選ぶより千晴さんが選んだ物のほうが美空さんも嬉しいと思いますよ」

「バレてるし」

「だってもうすぐ美空さんの誕生日ですよね？」

貴女はどこぞのエージェントですか。

何年も一緒にいる私でさえさつき誕生日のことを思い出したというのに、知り合って一ヶ月ちよいの彼女が知ってるなんて。

驚いたというより、そのことをほんの少し“悔しい”と感じている自分に気がついて、呆れた。

これは嫉妬しているのだろうか？ それとも友人を取られるのではという危機感なのだろうか？

「んー……友人関係って難しいね」

「じゃあ私と恋人関係になってください」

「なんでそうなる」

相変わらずの柚葉の頭を軽く叩いてから、私達は教室を後にした。

(……………)

帰路を歩きながら考える。

努力すれば、美空たちが信じてくれていた私に近づけるだろうか。己を蔑むことしかできず、何もかも諦めて、目を背けて周りを見ようとしない愚かな自分を、変えることができるだろうか。

すぐには変われないかもしれないけど、今よりマシになれる自信なんてないけど……それでも彼女たちの友人として胸を張れるような人間に、私はなりたい。

(大変そうだけど)

正々堂々と、向き合おうじゃないか。

今まで目を背けてきた全てのことに、真正面から。

それは苦しくて、悲しくて、自分の臆病な心を躊躇なく傷つけるかもしれないけれど。

その先にきつと、忘れていた何かがある気がするから

「柚葉」

「なんですか？」

「今日はオムライスが食べたいな」

「……はいつ、らせてください！」

笑顔を向けてくれる人達のために。 自分自身のために。

ちっぽけなことかもしれないけど、私に出来ることを始めてみよう。

いつか晴れた空に・前編

天吹千晴との出会いは、最悪だった。

これまで沢山の人と出会ってきたけれど、彼女との出会いは今まで生きてきた中で一番酷いものかもしれない。

その時のことを思い出しただけで無性に恥ずかしくなり、穴を掘って叫びたくなる程だ。

確かに最悪で強烈で一生忘れられない出会い方だったけれど、その記憶を消してしまいたいとは思わない。

どんなに最悪な出会い方でも、あれは千晴との大切な思い出のひとつだからだ。

あの出会いがなければ彼女と関わることなどなかったのだから、忘れるなんてことできるわけがない。

彼女、天吹千晴と、私、円堂美空が初めて出会ったのは、中学に入学してしばらく経った頃だ。

あの頃の私は些細な誤解とすれ違いのせいで両親と仲が悪かった。今思えば、重度の反抗期だったのだと思う。

ちよっとしたことでもキレてすぐに喧嘩をしたり、度の過ぎた悪戯を

繰り返したりと、手のつけられない凶暴な子供だった。

教師はそんな私を当然のように問題児として扱い、顔を合わせれば口を酸っぱくして説教ばかりする。

最初の頃はクラスメイト達も健気に話かけてきたけど、しばらくすれば気性の激しい私を恐れて誰も近寄ってこなくなつた。

自業自得だったし、交友関係など煩わしいと思つていたので寂しいなんて感じたことはない。むしろ清々していた。

……けれどあの頃はずっと、理由もなくイライラしていたような気がする。

そんな時期の…そう、あれは昼休みのことだった。

喉が渴いた私は飲み物を買う為に食堂の自販機の前に立っていた。

その日はいつも飲んでるお気に入りのコーヒーを買うか、新入荷したらしい紅茶のどちらを買うかで迷つていて。

真剣に悩んでいたから、気付かなかつた。

迫り来る、足音と、人の気配に。

「おわ、ちよつ、あ、あ、危ないっつ！ー!!」

「えっ？」

後ろから聞こえてきた間抜けな声で、ようやく私は異変に気付いた。いったい何事だろうと振り返ってみれば。なんと、私に向って一直線に女の子が飛び込んで来るではないか。

状況を理解する時間などなかったので避けることが出来ず、ただ呆けて他人事のように見ているしかなかつた。

ぶつかる！と思った瞬間、自然と目を閉じてやがて来るはずの衝撃を待っていたけど、それはいつまで経ってもやってこない。

「……………」

不思議に思っただけで恐る恐る目を開けてみると、さっき突進してきた女の子の姿が消えていた。

衝突せずに済んだのでとにかく安堵したのだが、何やら周りの様子がおかしい。

食堂にいる生徒の全員が口を噤んで、私のほうを見ながら呆然としているのだ。おかしいというよりも、不気味だった。

いや、確かに私の方を見ているようだけど、正確には私の足辺りを見ているようだ。

不躡な視線を不快に思いながら、そこにいる全員の視線と重なるように私は自身の足元へと視線を下げる。

そこには、うつ伏せになって呻いている少女の情けない姿があった。…さっきぶつかりそうになった子だけど、どうやら衝突する前に躓いてこけてしまったらしい。

どうするべきか悩んだが私に責任はないのだし、ここに居たら沢山の視線に晒されて気分が悪くなるので無視して教室に戻ることにしよう

と、思ったのだけど、ここでようやく私は現実を受け入れ始めていた。

いや、受け入れなければいけなかった。

本当は気付いていたのだ。けど、認めたくなかった。

目を背けたくなるような、現実を。

「……………」

再度、うつ伏せになっている少女を見る。

彼女はきつと、こける寸前に倒れないよう、何かを支えにして踏み止まろうと思ったのだろう。

そして手を彷徨わせて掴んだのは、私のスカート。

けれど勢いに耐え切れなかったスカートは踏ん張ること叶わずそのまま少女に引つ張られてしまい　足元までずり落ちたわけだ。ちなみに倒れている少女はいまだに私のスカートを握ったままである。

「う、うう…………… やってしまっただけ……………　　ってうえええっ!？」

ようやく起き上がった少女は目の前に立っている私を見て叫び、そのまま固まった。

ああ、それはそうだろう。だって今の私はスカートが足元まで脱げている状態……………つまりパンツ丸出しで公衆の面前に立っていたのだから。

なるほど。どつりで私は周囲の生徒達の視線を独り占めしていたわけだ。

「あ、あれ、えっと、水色と白のストライプ柄……………ですね」

顔を引き攣らせた少女は下着の柄を呟いてから、ようやく自分がスカートを握り締めていたことに気付き、慌てて手を離す。

「……………」

「う、ごめんなさい」

直立不動で固まっていた私に、彼女は神妙な顔でスカートをそっと引き上げてくれた。

あまりの出来事に放心していたので、スカートを穿くということさえ思いつかなかったのだ。

しかし、何もなかったように元通り……とはいかない。

食堂にいた生徒全員にパンツを披露してしまったという事実は消えない。一生。

「お、おい、あれって三組の円堂……」

「しかしすっごい光景だったなあ……目の保養になった」

「あーあ、あの子殺されるんじゃない？」

「よく見たらあれ、最近噂のセクハラ女子じゃん……。よりによってあの円堂とかご愁傷様」

「やばい、色んな意味で、やばい」

周囲の様々な声が耳に届く。

とんだ晒し者だ。

「~~~~~つ!!!!!!」

声にならない叫びを上げて、私はその場を走り去る。

本当はあの少女を気の済むまでボコボコに殴って蹴って痛めつけてやりたかったのだが、あの場所に一瞬一秒でも居たくなかった。

強がっていても私はまだ中学一年生になったばかりの女の子。普段は気丈な自分でも、流石にあの状況は耐えられない。

とにかく走って人のいない校舎裏に移動し、荒ぶった気を鎮めるま

で校舎の壁を蹴り続けたのだった。

次の日。

クラスの奴らに落ち込んで思われるのが嫌だったので、普段どおり学校へ行った。

ヒソヒソ話をされたり同情や憐れみの目を向けられたりしたけど、以前から問題児の自分は常にそういう境遇だったのでこれくらい耐えられる。

それでも、昨日の少女を許すことは出来ない。私に恥を掻かせたあの罪深き少女には、厳罰を持って償ってもらおう。

すでに私の頭の中は、あの少女をどんな風に懲らしめるかということとでいっぱいだった。

私がされたことと同レベル、いや、それ以上の仕返しをしなければこの怒りは収まらないだろう。

けれど困ったことに、私はあの少女のいるクラスどころか肝心の名前も知らなかった。

上履きの色が同じだったので同学年というのは解っているのだが、それ以外は何も手掛かりがない。

生徒数の少ない学校なので、一年のクラスを片っ端から覗いていけば見つかるだろう。面倒だがそうするしかない。

顔はしっかり覚えているので教室を探せば見つけることができるはずだ。

昼休みになるのを待って、まずは一組に向うことにする。

その途中の廊下で運の悪いことに生徒指導の教師とすれ違ってしまい、呼び止められてしまった。

この教師には目の敵にされているので、心の中で舌打ちする。

「……おい円堂、お前スカート短すぎるんじゃないか？」

「はあ？どこ見てるの？セクハラ？」

「違う！この前スカート丈を注意したばかりだろう！なのにまだ直してないのか！？」

「直したわよ、1ミリ」

「それは直したと言わん！もつと長くしろっ、校則違反だぞ！！」

「はいはい、明日直してくるわよ。長くすればいいんでしょう？昔のヤンキーみたいに」

「そこまで長くせんでもいい！……ってこら円堂、まだ話の途中だ！どこへ行くっ！」

「私は忙しいのよ。じゃあね」

「円堂！こら、待て、円堂っ！！！！」

必死に名前を呼ぶ教師を無視して、私は目的の場所へ向う。

自分のクラスから少し離れているが同じ階なので楽といえは楽だ。

一組の教室まで辿り着いたけど、教室に入ると目立ちそうなので開いている窓から中を伺うことにした。

馬鹿騒ぎしている男子や机を寄せ合って楽しそうに雑談している女子が見える。

入念に探したけれど、この中に昨日の少女はいないようだ。

「……いないみたいね」

それならもうここに用はないし隣のクラスに行こうかしら。

踵を返して立ち去ろうとすると、教室に入ろうとした女の子と鉢合わせになる。

「あ、じゅめんなわいっ」

「ぶん」

慌ててその場を譲る彼女を一瞥してから、先を急ごうと足を踏み出した。

「あの、え、円堂さん」

「あ？何よ？」

「ひっ」

自分の行動を邪魔されたのが不快だったので相手を睨み付けると、少女は怯えた様に肩を竦めて小さな悲鳴を上げた。

何もしていないのにそんな態度をされると余計に腹が立つてくる。いつもなら締め上げるところだけど、他に優先すべきことがあるので我慢した。

ひとまず黙って、彼女が話すのをじっと待つ。

「私さっきまで隣の二組にいたんだけど、そのクラスの男子がこそ話してたの。あの、き、昨日の食堂での円堂さんを、携帯で撮ったって……」

「……………へえ」

スツと頭のスイッチが切り替わる。

どうやら昨日の少女を探す前に、やらなければいけない事が出来てしまったようだ。

いや、どうせ今から行くつもりだったのだから、ついでに済ませればいい。

「その男子の特徴は？」

「あ、阿部君って言うんだけど、制服の下に黄色いシャツを着てるから解りやすいと思う」

「ふうん」

オロオロしている少女を置いて、私は何も言わず隣のクラスへ向かう。

ドアの窓から中を覗くと、教室の中央辺りに黄色いシャツを着た男子を見つけた。他に当て嵌まる奴はいないから多分アイツだろう。普通にドアを開けて中に入ると教室にいる全員の視線が私に集中して、さっきまで騒がしかった室内は一瞬で静かになった。

私は気にせず目的の人物まで歩み寄り、にっこりと人畜無害な笑みを浮かべて話しかける。

「ねえ、貴方が阿部くん？」

「……そ、そうだけど、なんか用かよ？」

「ちよっと携帯を貸してくれないかしら」

「なっ、なんで」

阿部という名前の男子は、携帯という単語を聞くと顔を真っ青にして動揺した。

なんてわかりやすい奴だろうか。その表情が面白くて自然と口が歪んでしまう。

「昨日、食堂で私のこと撮ったでしょう？だから画像を消そうと思っ
つて」

「し、知らねえよ！！」

「撮っていないのなら確認させて貰える？そうしないと解らないから」

「はあ！？なんで見せなきゃいけないんだよ！言い掛かりつけんな
っ！！」

「撮っていない証拠を見ないと安心できないじゃない」

「嫌だよ！俺にだって見せたくないもんがあるんだ！だいたいお前、騒がれるからって調子に乗ってんじゃ……え、何す　ぐふ
ツツツ！！」

聞き分けのない態度にイラついたので、阿部を強引に立たせてから腹を思いっきり蹴飛ばしてやった。

勢いが良かったのか、彼の身体はガラガラと騒がしい音を立てて無関係な机や椅子と一緒に倒れてしまう。

近くに居た周囲の人間は、きゃーきゃーと騒ぎながら教室の端へと逃げていった。

せっかく穩便に済ませようと思っていたのに、抵抗するからこんなことになる。ま、大人しく出したとしても一発殴ってたけど。

倒れた時ポケットから何かが床に落ちたので、腹を押さえて呻いている彼を無視して拾い上げた。

これは、こいつの携帯だ。

「ちよつと借りるわよ」

返事を待たず阿部の携帯をいじると、画像フォルダの中に何枚か昨日の写真を見つけた。

怒りに任せて携帯を破壊してやろうかと考えたが、これ以上事を荒立てるのはよろしくない。もう、遅いかもしれないけど。

とりあえず自分に関わる画像を……いや、それだけじゃ生温い、画像フォルダを全て初期化してあげよう。

消去し終えたので、倒れたまま起き上がれないでいる彼に投げて返す。

「……他に撮った人はいないかしら？今のうちに名乗り出たら、画像を消すだけで何もしないわ」

言っではみたものの、誰も名乗りを上げない。まあ当然か。

こんな雰囲気ではわざわざ自白するような奴はいないだろう。そんな勇気のある奴がいたら褒め讃えたい。

流石に手当たり次第調べるわけにはいかないし、もしかしたら撮ったやつは本当に居ないのかもしれない。

確認できないのは悔しいが、ここは退くしかないか。

騒ぎを聞きつけて教師が来る前に、早くここを出て行ったほうが良さそうだ。

「あの」

「……………」

一人の少女が歩み寄ってきて、私の前に立つ。

「貴女…！」

その顔は昨日見たばかりで忘れられるはずもない、私が今日ずっと探し求めていたものだった。

まさか自分からノコノコ出て来てくれるなんて、この子は恐いもの知らずか馬鹿じゃないだろうか。

それも平然とした表情で、まるで今の状況を解っていないみたいな態度だ。ここであつたことを見ていなかった筈はないのに。

「そこ、私の席なんですけど」

彼女は私のすぐ隣の席を差して、ぽつりと言った。

「……………はあ？」

「今から宿題しないと、間に合わないのので退いてください」

「私、もしかして馬鹿にされてるのかしら？」

「え？してませんけど」

カツと頭に血が上って、荒々しく掴みかかる。

それでも少女は驚くことなく、顔色一つ変えないでただ呆然と私のことを見ていた。

「もしかして、昨日私にしたこと忘れてるのかしら？」

「昨日……………あ、ああ」

「忘れてたのね」

「あいにく、昨日みたいなのは珍しくないんで」

苦笑している彼女の襟元を掴んで自分のほうに引き寄せる。

それでも苦しそうな顔をしないので気に入らなかつたが、手を出すのはまだ早い。

「昨日は、その、わざとじゃないとはいえ、スミマセンでした」

「謝って済む問題だと思ってるの!？」

「……………じゃあどうやって償えと」

さて、どうしてやろうか。

気の済むまで殴り倒すか、私と同じようにスカートを脱がせて周囲に晒すか……………それ以上の痴態をここで披露させるか。

「ねえどうされたい？」

「まあ、殴って気が済むのなら、好きなだけ殴ってください。私が悪いんだし」

「……………っ」

何でもないことのようにさらっと言った彼女の目を見て、鳥肌が立った。

そこには光がなく、まるで死人のように濁っているその目を見てみると、吸い込まれそうな恐怖を感じる。

いや、そんなわけない。この私がこんな少女に恐怖を感じるわけな

い。気のせいだ。

「遠慮しなくていいよ、好きなんでしょ？人を殴るの」

「え、ええ。好きよ。だって、気分が晴れるし、面白くて楽しいもの」

「……………？」

「何よ、その顔」

不思議そうにしている少女の顔が癪に障る。

「…………… 本当に、楽しい？」

その言葉を聞いた瞬間、かろうじて冷静を保っていた頭が爆発したように熱くなり、我を失った。

気がついた時には少女をさっきの男子のように本気で蹴り飛ばして、周囲ではまた悲鳴が上がっている。

しかし、男子と同じように倒れたけど、少女は何もなかったようにすぐ起き上がってゆっくりとその場に立つ。

「…………… 頑丈なのね」

「まあ、慣れてますので」

その言葉の意味はよく解らなかったが、それよりも私の蹴りが全く効いてなかったことが気に食わない。

苛立っている私の目の前で、少女はというこのんきに制服についた汚れを払っていた。

「で、もう終わり？好きなだけ殴っていいよ？」

この子は、どこまでも私を馬鹿にしているようだ。煽りの天才か。お望みどおり、私は再び掴みかかる。彼女は抵抗せず全てを受け入れようとしていた。

怒りに任せて手加減はせず、精一杯力をこめる。

「ねえ、貴女痛くないの？ 恐くないの？」

「全然。私より“そっちのほう”が痛いんじゃないの？」

「……は、何言ってるの？ 蹴ったのは私のほうなのに」

「鏡で自分の顔見てみたら」

「え」

「アンタの今の顔、楽しそうには見えない」

毅然と、感情のこもってない表情で彼女はぽつりと漏らす。

苦しそうに見える、と。

「そ、そんなことっ……ないっつ……!!」

自分でも驚くほど、大きな声が出た。

人を屈服させるのが、自分の思い通りになるのが、楽しい。面白い。やめられない。

今までずっとそうだった。今も、昨日の分をやり返せて気分が良いのだ。

この少女の言っていることは、間違いなんだ。だから動揺する必要なんてない。

「どうでもいいけど、そんな自分が嫌ならやめればいいのに」

「貴女が何を知ってるっていうのよおっ！……！」

カツとなって拳を振り上げる。

けど、それでも彼女は自分を庇おうとしない。

なんだ。なんなんだ、この子は。異常だ。目の前にいる少女は何かがおかしい。

怖い

「っ！……！」

そのまま殴ってやろうとしたところで、数名の生徒に連れられてきた教師がやってきた。

「おい、おまえら何をやってるんだっ！……！」

「……ちっ」

「またお前か円堂。……まったく、天吹も何やってるんだ」

「…………」

天吹と呼ばれた少女と私は、そのまま職員室へ連れて行かれた。

彼女の担任と私の担任、そして生徒指導の教師に囲まれてのお説教が始まる。

さすがに騒ぎすぎたせいかわ護者を呼び出されてしまい、親たちが来るまでこの息苦しい職員室で待つことになった。

「はあ、いい迷惑」

「ちよつと、貴女が昨日私にあんなことするからでしょうっ？」

「わざとじゃないっつーの」

「ああ？」

「こらお前たち！喧嘩するな！」

教師に注意されたので、お互いに顔を背ける。

しばらくすると、先に彼女の保護者が来た。少女の祖母と名乗った人物は来客用のソファにどかっと座る。

「千晴、おまえ喧嘩したんだって？」

「違うよ。一方的に絡まれたんだよ。原因は私だけだ」

「ほう、それじゃあちゃんと謝ったんだろうね」

「うん。もちろん」

「そうかい。で、腹を蹴られたと聞いたんだが」

「全然へーき。大丈夫」

「お前の大丈夫は信用できないからね。あとでちゃんと病院に行くよ」

「うげ」

少女の憂鬱そうな顔を見て、祖母はくくくと愉しそうに笑った。

その和やかな様子に教師たちと私は困惑するしかない。普通、問題を起こした自分の子を真っ先に叱るもんじゃないだろうか。

私も何度が保護者を呼び出されているが、怒られるというより悲しまれるから余計にうざったいのだけだ。

こんな風に、茶化されたほうが何倍もマシだ。

「あんたが千晴の喧嘩相手かい？……ほほう、こりゃ美人な子だ。将来が楽しみじゃないか」

「はあ、どうも」

「今回はうちの子が迷惑をかけたね。許してやっつくれ」

「言っつくけど、今日の件で手を出したのは私だけよ？その子は全然反撃してこなかったし」

確かに原因を作ったのはその子だけど、危害を加えたのは私だから当然そつちから怒られなければいけない。そして私も謝らなければいけないはずなのだけど。

「そうだね、あんたもちょっとやりすぎたかもしれない。でも、原因はこの子なんだ。それを干晴はあんたから蹴られることで償ったから、それで帳消しなんだよ」

「けど…」

「当事者達でもう決着はついてるんだ、気にしなさんな。けど、やんちゃは程々にしときな。元気なのはいいことだけどね」

「……ん」

私が押し黙ると、老婆は満足そうに目を細めた。

納得いかなかったけど、向こうが気にするなというのなら、気にしないことにする。

それから少女とその祖母は少し離れた場所で担任の教師と何やら話し合っている。

時々豪快な笑い声が聞こえてくるのだが、いったい何の話をしているのかよく解らない。

それを横目でぼんやり眺めていると、ようやく私の両親がやってきた。いつも来るのは母ひとりだが、今日は珍しく父も一緒だ。

まず先に被害者の方に行って何やら話をしてから、加害者である私の方に来る。

「美空」

「美空ちゃん」

神妙な顔をしている父と悲しそうな顔をしている母を見たくなくて、顔を伏せた。

「事情は先生方から聞いた。美空、お前は どうして話し合いで解決しようとするの？」

「いつも言っているだろう、どんな理由があつたとしても暴力は駄目だ」と

「……………わかつてるわよ」

「何か不満でもあるのか？ いたい事があるのなら、はっきり言いなさい」

「美空ちゃん、ごめんね。お母さん、貴女が何を考えているのか解つてあげられなくて」

「……………っ！」

我慢の限界だつた。

やっぱり無理だ、この人たちと話をするなんて。話をするだけで苛々して吐き気がする。

もう、耐えられなくなって、乱暴に席を立つた。

「うるさいわねっ！ 話すことなんてないわよっ！！ どうせ無駄だものっ！」

「美空！」

仕事でろくに家に居ない厳格な父と、過保護でべつたりな母親。

何処にでもいるごく普通の両親のはずなのに、なぜか私はそんな人が煩わしくて、いつも窮屈だつた。

話せば気持ちが悪く合合わなくて、すぐに喧嘩してしまう。どうしても本当のことが上手く伝わらない。理解してもらえない。

それが段々嫌になつて、苦しくて 何かにぶつけないと、どうにかなつてしまひそうだつた。

「お父さんもお母さんも嫌い、嫌いっ……………だいつ嫌いなよっっ
! ! ! ! !」

「美空、話を　!」

「美空ちゃんっ!」

「円堂!」

「……………! !」

その場にいるのが辛くて、私は両親の元から逃げ出した。

後ろから必死に私を呼ぶ声が聞こえるけれど、両手で耳を塞いで何も聞こえないようにする。

運動神経に恵まれた私に教師や親が追いつけるわけもなく、すぐに撒くことが出来たのだった。

いつか晴れた空に・後編

そのままあてもなく走り回って辿り着いた場所は学校の屋上。

「はあ、はあ………！！！」

フェンスまで歩いて、そこに背中を預けて座りこんだ。

全力で走ったせいであがった息を整える為に、深い息を吐く。

ふと上を向けば見渡す限り美しい青空が広がっていて、よく見えていれば、雲が少しずつゆっくりと動いているのがわかる。

不思議なことに、そんな些細でどうでもいいことが、私の荒んだ気分を癒してくれる。

「…綺麗な空ね」

昨日のことも、今日のこと、親のこととも全て忘れて、ただぼんやりと頭上にある空を眺めていた。

頭を真っ白にして何も考えずに生きていけたら、どんなに楽だろう。全て捨ててしまえば、自分の気持ちに振り回されることもなくなるんだらうか。

周りに迷惑をかけずに済むのだらうか。

わからない。

どうすればいいのが、わからない。

苦しくて、息が詰まりそうだ。

「綺麗な空だね」

「……………」

空に向けていた視線を下ろして正面に戻すと、そこには一人の少女が立っていた。

無表情で、生気のない目をしていて、見ているだけで苛めたくなくなるような、そんな女の子。

私が黙って何も言わずにいると、彼女はこちらに寄ってきて図々しく私の隣に座った。

「天吹千晴、だったかしら」

「そうだけど」

「なんで私を追ってきたのよ」

「え？追ってないし。外の空気を吸いたくなっただけだし」

「じゃあ帰ればいいじゃない。もう、話は終わったんでしょ？」

「どこに行こうが私の勝手じゃん」

「やっぱり腹の立つ子ね、貴女」

けれど不思議なことに、さっきまで感じてた苛立ちはすっかり消えていて気持ちが軽くなっていった。

隣に座っている彼女はさっきまでの私のように黙って空を見上げている。

私もまた、どこまでも青く澄んだ空を見上げた。

「……………ねえ、貴女はお婆さんが来てたけど、親は？忙しいの？」

「いや、2人共もうこの世にいないよ。今はばあちゃんと二人暮ら

し」

「そう。悪いこと聞いたかしら」

「別にいいよ」

(…あら?)

なんで、私、普通に話してるんだろう。

今日はずっとこの子をどんな風に痛めつけようとか考えていて、苛々していたはずの相手なのに。

この気の抜けたような人間の傍にいと、こっちまで腑抜けてしまっただろうか。

さっきまで悩んでたこととか、どうでもよくなってくる。

虚勢を張ることが、無意味に思えてくる。

……やっぱりこの子、変だ。なんていうか、うん、面白い。

じわりと、久しぶりに胸の辺りが暖かくなる感覚に戸惑う。

「私には関係ないことだけども、一応言っとく」

「え?」

「嘘つてさ、長い間重ね続けると、嘘じゃなくて本当なんだって錯覚することがあるから」

「? それは、どういうこと?」

「本当は親のこと好きなのに、意地になってずっと嫌いだって嘘吐いてたら“本当に自分は親が嫌いなんだ”って思い込んじゃうってこと」

「……………」

「一人でいることが平気、喧嘩が楽しい、親のことが嫌い　そう言う自分は…本当?」

「…私は……………」

わからない。

本当に？

（嘘だ）

わかってた。

辛かった。

本当は独りでいるのは寂しかった。

人を殴って、悪いことをして、それが心から楽しいだなんて思えなかった。

でも、そう在ろうとした。

やり場のないストレスをそうやって発散しないと、おかしくなってしまうそうだった。

虚勢を張ってないとすぐに折れてしまいそうで、怖かった。

自分の思っていることが本当じゃないと、親のことを嫌いだと思っていないと駄目だった。

だって好きだったら、好きな分だけ苦しまなきゃいけないから。

だから痛みの少ないように、嘘をついてた。自分の思い通りにいかないから、逃げていた。

「嘘と本当を入れ替えて無理するなんて……………そんなん、苦しいだけだよ」

「……………うん」

ぶっきらぼうな彼女の声が、心を軽くしてくれる。

ぽたっ、とアスファルトに水滴が落ちた。

頬を伝って、嘘が抜け落ちるように透明な雫が流れていく。

久しぶりに、人前で涙が零れた。

今までずっと誰もいないところで、一人で泣いていたから。彼女はずっと空を見上げていて、私のほうを向いていないから見られていないと思うけど。

彼女なりの優しさなのか、それとも単に興味がないだけか。どちらでもよかった。隣に居てくれれば、それだけで。

こんなに落ち着いた気持ちで話せたのは、いつ以来だろう。

「ごめんなさい、蹴ったりして」

「いいよ、別に。やれって言ったのは私だから」

それでも本気で蹴りを入れるなんて、今更ながら罪悪感を感じる。

阿部とかいう男子にも後でしっかり謝らないといけないし、それから両親とちゃんと話し合わないと。

怖いけれど、今なら向き合うことが出来るような気がする。

「いろんなこと、どうでもよくなっちゃった」

「ふーん」

悪い意味じゃなくて、いい意味でね。

「そりゃ良かった」

隣で空を見上げていた少女はこちらを向いて、初めて微笑んだ。不気味だと思っていた瞳は優しく、綺麗で、ずっと見ていたくなる様な、暖かい眼差しだった。さっきまでとは違い、まるで別人のように見える。

けれどそれは一瞬のことで、すぐにやる気のない瞳に戻ってしまった。

「……さて、そろそろ行くのかな。えーと、りんどうさんだった？早く戻ったほうがいいかもよ」

「円堂よ。円堂美空」

「まあいいや。それじゃあね」

よっこらせ、という声とともに彼女は立ち上がり、そのまま出口に向って歩いていく。

まだまだ意地っ張りな私は、感謝の気持ちを伝えることが出来なかったけれど。

私は彼女の姿が消えるまで、ずっとその背中を見つめていた。

それからというもの、私は随分と大人しくなった。

すぐには変われなくて、すぐカツとなってしまうこともあったけど、絶対に手だけは出さなかった。

勉強だって真面目にやったら周囲が驚くほど成績がどんどん上がって、それが楽しくてもっと頑張った。

両親と私は、あの日を境に少しずつ打ち解けていき、今ではあの頃が嘘のように仲良くなった。

元々両親のことを好きだったのだから、仲を修復するのはとても簡

単だったのだ。

色々なことを整理して気持ちに余裕ができたのか雰囲気は柔らかくなったと教師に言われ、クラスメイトからも話しかけられるようになった。

それでも過去にやってきたことは消えないから、陰口を言う人もいたけど。

でも、私に貼られた「問題児」というレッテルは、ゆっくりと確実に剥がれていったのだった。

そして

「千晴！」

「げっ」

せつかく一緒にお昼を食べようと教室まで迎えに来たのに、彼女はこそこそと逃げ出そうとしていた。

いつものことなので諦めてはいるが、いい加減負けを認めてくれるといいのに。

隙を見て逃げようとしている彼女の首根っこを掴んで強引に中庭まで連れて行く。

私と彼女は、あれから一緒にお昼を食べるようになっていた。

……といっても、私が一方的に誘ってるのだけだ。

私を変えてくれた彼女と仲良くなりたくて、毎日のようにお昼休みや放課後に会いに行くようにしている。

会いに行くたび嫌な顔をされるけど、そんなことでめげる私じゃない。

とりあえず、今は餌付け作戦を実行中だ。

「はい、このキンピラあげる。菓子パンだけじゃ栄養足りないですよ？」

「えーあんまりキンピラ好きじゃない」

「好き嫌いは駄目よ。それにちゃんと食べないから力が出なくて転んだりするんじゃないの？騒ぎを起こすの嫌でしょう？」

「……円堂さんはわざとやってるって思わないの？」

「美空って呼びなさい」

「…美空」

「よしよし。んー……そうね、噂を聞いたところだと確かに皆の言うとおりわざとやってるように思うわね。貴女、偶然にしては毎日誰かにセクハラしてるじゃない」

「だよー」

「でも、違うんでしょう？」

「え？」

「貴女がわざとじゃないって言うのなら、そうなのよ。私は周りの奴よりも、千晴の方を信じてるから」

はつきり自分の考えを伝えると、彼女は怪訝そうに顔を顰めた。

「自分も被害者なのによく信じる気になるよね。それにあれから毎日付きまといってくるし」

「ふふ、そうね。不思議よね。でも、私は何でも自分の思うとおり、好きなようにやりたいの。その方が面白くて楽しいじゃない」

「あー、そうですか。よくわかんないけど好きにしてください」

「もちろん、言われなくても好き勝手やるわ」

千晴は拗ねた顔をしつつも、私があげたキンピラをもぐもぐ食べて「おいひー」と呟いた。

無愛想だけど小動物のような仕草がとても可愛くて、つついっ頼が

緩む。

(どうしてこの子が、独りなのかしら)

誰も彼女の良さに気付かない。

彼女のような子こそ、もっと慕われるべきなのに。

本人もそれを良しとしていて、むしろ望んでいるようにさえ見える。

(でも、私がいれば独りじゃないか)

ただ、私が彼女の傍にいたいただけなのだけ。

それになんだかこの子、危なっかしくて放っておけない所があるから。

だから、ついで。そう、ついでに彼女のことを守ってあげればいいんだ。

きっと私なんかよりもずっと深い何かを抱えているであろう、彼女を。

(……けど、もうそろそろ、その役目も終わりかしら)

中学から高校2年の現在までずっと千晴と2人だったけれど、今はもう、彼女の周りには彼女を慕う子がいる。

本人は嫌がっていたけど、少しずつその環境に馴染んできているよ

うだ。

その証拠にあの子は笑うことが多くなった。まだ陰のある笑い方だけど、それがなくなるのも時間の問題だろう。

それが嬉しい反面、寂しい。これまでずっと千晴の近くにいたのは、私だったのだから。

(私だけじゃ、きっと駄目なもの。これでいいのよね…)

俯いて、小さく苦笑する。

母親に呼び出され先に教室を出た私は、家に向って早足で歩いていった。

千晴をひとり残してきたのは気が引けるけど、母からきたメールの題名に「急用」と書いてあったので無視するわけにもいかない。

学校から家まで近いけど、用件が気になったので途中で母に電話をかけることにした。

「あ、お母さん？今家に帰る途中だけど、急用ってなんなの？」

『美空ちゃん？あのね、晩御飯に使うつもりだった小麦粉がなくて困ってるの』

「……そういうことは最初にメールに書いてねっていつも言ってるじゃない」

「ごめんね〜っ！」

「いいわよ。ついでに買って帰るから、待ちきれなくて片栗粉とか使ったりしないで」

「わかったわ〜」

溜め息を吐いて電話を切る。

母の天然で抜けてるあの性格はどうにかならぬものだろうか。

ま、それでも私の両親だから、なんだかんだで憎めないのだけ。

頼まれた小麦粉を商店街にある馴染みのお店で買って、母の待つ自宅に向う。
なるべく急いで帰りたいだったので、いつもはあまり使わない近道を通ることにした。

狭いし暗いし雰囲気が悪いので普段は通らないけど、この裏路地を抜けると時間を大幅に短縮できるのだ。

（今日ぐらい大丈夫よね）

よく柄の悪い奴がこの辺りをうろついていると聞いたことがあるから少し不安だったが、きっと大丈夫だろう。

覚悟を決めて人気の少ない道に入ると、気のせいか途端に周囲が暗くなり寒気がした。

転がっている缶やゴミを避けながら、小走りに路地を進んでいく。何度か通ったことがあるとはいえ、久しぶりに通るのでまるで知らない道を通っているような感覚だ。

こんな薄気味悪いところにはあまり長居したくないし、先を急ごう。

「よ、その美人のおねーさん。こんなところで何してんの？暇なら遊ばね？」

（最悪）

すでにフラグが立っていたのかもしれない。

路地を進んでいたら、立ち塞がるように体格の良い男がそこにいた。金髪でピアスをしていて、おまけにブカブカでだらしない服装。見るからに田舎の不良といった感じ。

「せっかくのお誘いだけど、今日は急いでの。また今度ね」

暇だったとしても、遊ばないけど。

そっけなく相手をかわしてそのまま帰ろうとするも、未練がましく腕を掴まれてしまった。

うーん、やっぱり簡単には帰してくれないか。

「いいじゃん、そんな冷たいこと言わないでさ」

「放して」

「大丈夫だって、絶対楽しいからさ」

男はそう言うと、私が抵抗できないように両手を掴んだ。

そのまま壁に押し付けられて、顔を近づけてきたので横を向いて逸らす。

思い通りにならず男は顔を顰めたが、すぐに余裕の笑みを浮かべた。私がもう抵抗できないと思っっているのだろう。

「はは、照れ屋さんだなあ」

「……………」

相手はたった一人だし少し痛い目にあわせれば楽に逃げられるだろうけど。

なるべく、騒ぎは起こしたくなかった。

どんな人間だろうと、もう傷つけるのは嫌だった。

(はあ)

けど、しかたない。

運が悪かったのだと、諦めるしかない。

荒事は久々だから上手くやれるかわからないけど、何とかなるだろう。

両手は塞がっているので、足で男の大事なところを蹴ってやるつもりを定めた。

全力で叩き込んでやるつもりで、力をこめる。

「うわー、あつぶなーいーい！」

(えっ?)

私が足を出す前に、ものすごい棒読みで間の抜けた第三者の声が聞こえた。

それもどこかで聞いたことがあるような。いや、毎日のように聞く、あの子の声が。

それと、だんだん近づいてくる足音。

気付いた時にはもう彼女の姿があった。

こちらに向かって、勢いよく突進してくる千晴の姿が。

「……………千晴っ!?!」

「は?」

「うわーいーっといーいーいー!」

ぶつかる少し前で、千晴は何かに躓いたように転んだ。

支えてあげたかったけど両手を掴まれていたので身動きができず、

見ていることしか出来ない。

彼女は転んだ瞬間に手を真っ直ぐ伸ばして“掴んだもの”を引き摺り下ろした。

遅れて、どさつと千晴が地面に倒れる。

男は倒れた千晴を呆然と見て、違和感を感じたのか次に自分の下半身を見た。

「……………なっ！？ず、ズボンが脱げてるっ！？」

「千晴ったら……………」

掴んだズボンを転んだ拍子にずり下ろしたらしい。ベルトをしていなかったのか、簡単に脱げてしまったようだ。

そんなわけで男の下半身はパンツ一丁というなんとも情けない格好である。

……………千晴と出会ったときのことを思い出してしまい、ほんのちよつとだけ同情してしまう。

「あー、アンラッキースケベが発動しちゃって。難儀な体質だよまつたく」

「わざとでしょ？」

「……………まさか」

男が慌ててズボンを履いているうちに、こっそり抜け出して千晴の元へ。

転んだせいで汚れている彼女の制服をはたいて綺麗にしてあげる。

ああもう、汚いところで転ぶからなかなか汚れが落ちないじゃない。

「あ、こんなことしてる場合じゃなかったわ。今のうちに行きまし
「よ

「そだね…って!?!」

「こんのクソ女があっ!!! 恥かかせやがってえ!!!」

ズボンを履き終えた男が凄い形相で、拳を振り上げながらこちらに迫ってくる。

私が応戦しようとするより速く、千晴は前に出て“自ら”殴られにいった。

「…っ!!!」

力強い拳が頬にめり込み、身体の軽い千晴は吹き飛ばされて地面に叩きつけられるように倒れた。

「千晴っ!!!」

「おっと、あんたはこっちだ。逃がさねえぞ」

彼女に駆け寄ろうとしたけれど、男が私の腕を掴んだのでこれ以上先に進めない。

「まったく、マジ腹立つ。あれだ、因果応報ってやつだな」

「……いい加減にしてくれない?」

「あ?」

頭の奥の方で、じりじりと焦げていく。

ずっと我慢していた怒りが全身に染み渡るように広がっていく。繕えないほどに顔が引き攣る。

(許さない)

女の子の。

千晴の。

大切な人の顔を、こいつは殴ったのだ。

理解した瞬間に頭の中が真っ白になり、激情だけが私を支配する。私はもう、目の前の男を立てなくなるまで殴り続けることしか考えていなかった。

男は片腕しか搦んでいない。なら、まずは空いている片手であいつの顔をぶん殴りそれから腹に一発ぶち込んで次に

「美空」

「ちは、る？」

「な、お前っ!？」

怒りに震えていた腕を、彼女はぎゅっと優しく搦んでいた。それだけで激しい感情に流されていた私は正常に戻る。

でも、千晴の頬は目を背けたくなるほど真っ赤に腫れていたから、静まりかけてた怒りが戻ってきた。

感情に任せて動かさうとした腕を、千晴は制止する。

「駄目だって。美空は喧嘩が嫌いなんだから」

「で、でもあいつっ、千晴をっ!」

「それに私も怒ってるんだよ。そいつ、私の大事な友達にちよっかい出したんだから」

「…………え？」

今まで一度も彼女の口から聞いたことのない言葉が聞こえて、自分の耳を疑う。

私の動揺を気にせず、千晴は目は真っ直ぐに相手を睨みつけていた。

「ああ？んだよ、また痛い目みたいのか？やんのか、お」

言いかけて、男は言葉を失う。

それはきつと千晴が握り締めていた物に気付いたからだろう。

彼女は倒れたときに拾ったのか、空き瓶を逆さに握って構えていたのだから。

「じよ、冗談だろ……は、はは」

顔を青くした男は、私の腕を放して少しづつ後退していく。

千晴はゆっくりと男に近づいて、持っていた瓶を握ったまますぐ横の壁に躊躇いなく叩き付けた。

途端、大きな音を立てて瓶が豪快に割れる。

「千晴っ！！？」

「ひっ！？」

甲高い音が響いてガラスの破片が飛び散り、千晴の持っていた瓶は見事に粉々だ。

男はまったくの無傷だけど、彼女の手は破片で深く切ったのか血だらけになっていた。ぽたりぽたりと、地が次々に滴り落ちていく。

千晴は何もなかったようにしゃがんで、散らばった瓶の欠片の比較的大きいものを拾い上げた。

そして、尖った瓶の欠片を相手に突きつける。

「私の友達に手を出すな」

揺らぐことなく凜とした立ち姿、それに普段の彼女からは想像できないほど勇ましく力強い声。

(千晴…?)

今ここにいる彼女は本当にあの“天吹千晴”なのだろうか？

「な、なんだこいつ、おかしいんじゃないか!? イカれてやがるっ
!!!!」

怯えて顔を引き攣らせた男は情けない声で吠えながら、尻尾を巻いて素早く逃げていった。

千晴はそんな男を追うことはせず、持っていた瓶の欠片を近くの空き箱に投げ捨てる。

呆然としていた私と目が合うと、困ったように眉を下げた。

さっきまでと違い私の知ってる千晴だったので安心したけれど、怪我をしていることを思い出して慌てて傍に駆け寄る。

「千晴!なんて無茶なことするのよっ!! 頬と手は大丈夫!？」

「平気だよ」

片頬は紫色に腫れているし、手は出血が酷く痛々しい。これで痛くないはずがない。

私が怪我の具合を確かめていると、けろっとした顔で大丈夫だからと傷の部分を隠す。

「そんなに酷い怪我なのに大丈夫なんて…」

「本当に、痛くないんだから」

「そんなことあるわけないでしょう!？」

「痛くないんだよ、全然。痛いつて感覚が、ないんだから」

「ど、どういう…こと?」

千晴は言い淀んで、けれど諦めたのかすぐに口を開く。

「……私、痛覚が抜け落ちてるから。何をされても痛みを感じない」
「まさ、か」

言われて思い至る。

そうだ、私は千晴が痛がったところを見たことがない。

ふざけて叩いた時も、転んだ時も、怪我をした時も、昔私が本気で蹴った時も、そして今も、何もなかったようにいつも通りだった。

我慢強い子なのだ…ずっと思ってた。でも、そうじゃなくて。

ただ“痛くなかった”だけなんて。

「馬鹿ッ!！」

「え、えっ?」

「痛みがなくても、貴女はしっかり傷ついてるじゃないっ!!!」
「!」

痛みを感じないから平気だとしても、彼女の身体は平気じゃない。

確実に傷ついているのだ。

もし、知らぬ間に命に関わるような傷を受けたとしても、彼女はそのことに気付かない。

そう考えると背筋が凍るほど恐ろしい。大須賀ちゃんが過敏に千晴の身体を心配していたのは、ただ身体が弱いだけじゃなかったんだ。

「どうして、言ってくれなかったの!？」

「だって痛みを感じない身体なんて不気味でしょ？知られたら、気味悪いって思われそうで」

「そんなことっ！……！」

ない、と言うと、千晴は苦笑いを浮かべる。

「うん、美空はそんなこと気にしないって今は思う。でも、ずっと恐かったんだよ…美空が私から離れていくのが」

「なんで……」

「美空はいつも私の傍にいてくれた大事な友達。えっと……あ、あれだよ、あれ。親友だから…かな」

「………親友」

「こんな私じゃ、迷惑？いや？」

不安そうに問いかける彼女に返す答えは、ひとつしかない。それ以外、いらぬ。

「そんなわけないでしょう？迷惑どころか大歓迎よ」

一方的に友達だって思った。

だから、彼女が私のことをそう思ってくれていたなんて思わなくて。

嬉しかった。

嬉しくて堪らなくて、熱いものが頬を伝い零れていく。

涙が、止め処なく溢れてくる。

私が泣き始めたので、彼女は急に顔色を変えてわたわたと慌て始めた。

「え！？あ、なんで泣くのっ！？私のせい！？なんか言い方悪かった！？ごめんね！まじごめん！よくわかんないけどごめんなさい！」

「ふふ、違うわよ。これは千晴のせいだけど、謝る必要はないから」「え、でも」

「千晴に親友って言って貰えて嬉しかっただけなのよ」「う」

照れ臭くなったのか、彼女は苦い顔をしてそっぽを向いた。よく見ると耳の辺りが赤くなっている。

さつきみたいに格好いい千晴もいいけど、やっぱり馴染みのある素直じゃなくて可愛い千晴もいいわね。

どんな千晴でも大好きなことには変わらないのだけど。

「と、とにかく！これで涙を拭いてよ。もともと美空にあげるつもりだったんだし、丁度いいし」

千晴は鞆から綺麗に包装された紙袋を取り出し、私に渡した。

あげると言われたので開けてもいいのだろうけど、これってプレゼントよね？私に？千晴が？

不思議に思いながらもドキドキして中身を取り出すと、中から出てきたのは綺麗な刺繍を施してあるハンカチだった。

「これ……」

「柚葉と2人で選びました」

「だと思った。センスいいもの」

「うるさいよ」

「でもどうして私に？急にプレゼントだなんて、熱でもあるの？」

「それ誕生日プレゼントのつもりで買ったんだけど。もうすぐでしよ、美空の誕生日」

「……………ああ、そういえばそうね」

まさか千晴から誕生日プレゼントを貰える日が来るなんて思わなかった。

今までは自分から催促してたけれど、それでもくれなかったのに。

今日は驚きの連続で、なんだか夢心地だ。

胸の奥が熱くなってまた泣きたくなっただけど、泣いたら千晴が困ってしまうのでぐっと堪える。

「…ありがとう、千晴」

「どういたしまして」

千晴は満足そうに笑って、目を細めた。

いつか見た、優しい瞳。私があの日あの時惹かれ焦がれた、綺麗で澄んだ暖かい眼差し。

これがきつと本来の彼女なんだ。

「あーどうしよ、この怪我見たら柚葉がうるさそう」

「そういえば大須賀ちゃんは？ていうかどうしてここに千晴がいるの？」

「2人で買い物に来てたんだけど、美空の姿が見えたから柚葉置いて追ってきた。多分、柚葉は買い物中」

「……………大須賀ちゃん、千晴のこと探してるわよ、今頃」

「はは、そうみたい。着信履歴が凄いことになってる」

片手で器用に携帯をいじりながら、困ったように嘆息した。

「美空、早く帰らないといけないんじゃない？」

「そうだけど、でもその怪我……………」

いくら痛みがないとはいえ、止血したり冷やしたりしないと後々大変なことになる。

今は母に頼まれた用事よりも千晴の方が優先だ。

「近くに柚葉がいるから大丈夫だよ。それより、美空のほう心配だつて。家まで送ろうか？」

「もうすぐそこだから平気よ。私は貴女のほうが心配だわ」

そう言ってお互いに嘖き出す。そして、大きな声で笑った。

やっぱり楽しい。

彼女と一緒に居ると、面白い。

「……じゃあね、千晴。また明日」

「うん、また明日ね」

「ありがとう」

彼女の背中に向けて今日守ってくれた感謝と、あの日言えなかった感謝の言葉を伝える。

すると千晴はこちらを振り返らず、手を振って応えてくれた。それが彼女らしくて、くすぐりたい。

表通りへ戻っていく千晴をその場で見送って、私は早足で家に帰る。その途中で、大須賀ちゃんに電話をかけた。

千晴はどうせ怪我のことを上手く誤魔化して本当のことを言わないだろうから、事の全てを伝えておかないと。

電話で話している時の彼女は落ち着いていたけど、きっと内心では慌てていたに違いない。

これから彼女に怒られて小さくなる千晴の姿が浮かんで、にやけてしまう。

(……………)

どうして千晴は痛みを感じないのか。

先天的なものなのか、後天的なものなのか。

その全てを、きっと大須賀ちゃんは知っているだろう。

本音を言えば知りたいけど、まだ、千晴の深い部分に踏み込む勇氣がない。もしかしたら、大須賀ちゃんもそうかもしれない。

悔しいけれど私に出来る事といえば、親友として彼女の日常を守ることだけだ。

さて。

(明日は、どんな風にからかってあげようかしら)

私は想いを馳せる。

明日からの日々に。

いつか、晴れた空に。

この先に、彼女の屈託の無い笑顔があることを信じて。

過去の足音

まだ太陽が昇りきっていない早朝。

休日なのに平日よりも早く目が覚めてしまった私は、二度寝する気になれなかったので庭に出てひたすら雑草を抜く作業を繰り返していた。

長い間ずっと庭の手入れをしていなかったせいか雑草は生え放題で、抜いても抜いても減ってくれない。

気まぐれで始めた事とはいえ、成果が出ないと段々と気が滅入ってくる。

草に触れたり土をいじったりするのは嫌いじゃないからいい暇潰しではあるんだけど。

殺風景なこの庭に花を植えたり家庭菜園を作ってみたい気持ちもあるが、基本めんどくさがりなので自分には向いていないと思う。

現に、まめに手入れをしないからこんな風に荒れているのだ。

ばあちゃんはどんなに雑草が伸びようが気にしないし、柚葉は家事のほとんどをやってくれてるので任せるわけにもいかないから、手入れする人間は自分しかない。

「ふっ」

冷えた空気に真っ白な息を吐いて、その場に立ち上がった。

ずっと腰を低くして作業をしていたせいか、背中から腰の辺りに違和感を感じる。少々、頑張りすぎたらしい。

痛みを感じないので楽ではあるけど、疲れは当然溜まるから気をつけないと身体の限界がきていきなり倒れてしまうなんてことになりかねないのだ。

便利なんだか不便なんだかわからないが、こんな身体になってしまったのだから諦めて受け入れるしかなかった。

(うーん)

休憩しようと思っただけで縁側に座って、さっきまで作業をしていた庭を眺める。少なくとも1時間は草取りをしていたはずなのに、始めた時とあまり状況が変わってないような気がした。

道具を使わず地道に手で抜いていたので時間がかかったわりには進まなかったのだらう。

うちに草刈機なんて便利な道具はないし、今更だけど手で抜くよりも除草剤を使ったほうが効率良さそうだ。

どうせ今日は休みでやることもないから後で買いに行こうかな。

「ふああ…眠い…」

大きく欠伸をする。

気がつけば太陽は随分と高く昇っていて、空はすっかり明るくなっていた。

(うん?)

ポケットに入れていた携帯が震えたので手に取ると、画面に表示されていたのは意外にも着信の文字。

相手は美空みただけど、こんな朝早くに電話をかけてくるなんて珍しいこともあるもんだ。

「もしもし?美空?」

『おはよう千晴。ごめんね、こんな朝早くに電話かけて。……起き
てた?』

「うん、起きてたから平気。ちょっと嫌な夢見て落ち着かないから、気晴らしに庭の草取りしてたこと」

『嫌な夢?』

「んー…嫌な夢って言うか、昔の夢かな。あんまり覚えてないけど」

最近、毎日のように昔の夢を見る。

嬉しかったことやどうでもいい些細なこと、恥ずかしかったことや悲しかったことなど、様々な過去の夢を。

そして……共通しているのはどれも“今の町に引っ越してきてからの思い出”ということ。

だから昔のことを夢に見たといっても、私が忘れてしまっている過去は未だに思い出せていない。

ちなみに今日見た夢は、まだこの町に着たばかりで馴染めていなかった頃のこと。

嫌な過去という程ではないけど、昔の自分を……昔のことを思い出すのは正直しんどくて、心が疲れてしまうのだ。

『……大丈夫なの?』

美空の怪訝な声が耳に届いた。

……余計な心配をかけるつもりで言った訳じゃなかったんだけど、失敗したかな。

いつもならどんな夢を見たのか面白がって聞いてくるはずなのに何も聞いてこない。それに、声も険しい。

彼女とは付き合いが長いからだろうか、気持ちに沈んでいたことに気付かれてしまったようだ。

そういえば最近付き合いの短い柚葉も、朝、顔を合わせるたびにやたら心配そうな視線を向けられるので、もしかしたら彼女も気付いてるのかもしれない。

うーん、私ってそんなにわかりやすいのだろうか。それとも2人の勘が鋭いだけとか。

「まあ、大丈夫だよ。どうせ昔のことで、夢なんだから。気分転換に草取りしてスッキリしたしね。」

それよりも何か用があるんじゃないの？こんな早くから電話なんてお節介な友人を安心させる為に努めて声を明るくして話題を切り替える。

すると美空は『ああそうだった！』と、さっきまでの真面目な声が一変して、楽しそうな弾んだものになった。

いつもの明るい彼女の声に、内心ホッとする。

『ところで千晴、今日は暇？』

「ん？まあ、特にやることないから暇だけど」

除草剤を買いに行ったり庭の手入れをしようと思ってたけど、別に今日じゃなくてもいい。

『それじゃあ今日遊びにいかない？』

「いいけど、どこ行くの？」

『最近できたばかりの植物園よ。お母さんが招待券を人数分くれたんだけど、どう？』

「もちろん行く！」

『よかった。花とか草とか好きなものね、千晴って』

「で、その植物園ってどこにあるの？この町に植物園なんてあったかなあ」

なんせこの町はわざわざ植物園にいかなくても、嫌というほど自然に囲まれているのだ。

そんな田舎に植物園を作ってもあまり需要はないように思う。植物に興味のある人にとっては、嬉しいことかもしれないけど。

『実は電車で40分かかるところにあるの』

「やっぱり行かない」

『そう言うと思ったわ』

電話越しに彼女の溜め息が聞こえてきた。

確かに植物園は魅力的で行きたいと思うけど、わざわざ危険を冒してまで行く程じゃない。

『心配しなくても大丈夫よ。休日は平日よりも乗客は少ないし、私がちやんとフオローしてあげるから』

「うっ…でもなあ…嫌な予感しかしない…」

電車は怖いから、嫌いだ。

電車という乗り物自体が怖い訳ではなく、あの狭い空間で起こってしまうであろう“出来事”が怖いのだ。必ず起きるというわけではないけど、その確率はおよそ50パーセントを超えていると思う。

『少し時間がかかっちゃうけど、鈍行に乗れば確実に座れると思うわ。そうすれば平気でしょ？』

「……………」

『決まりね！みんなには私から電話しておくから、千晴は大須賀ちゃんを誘っておいて。それじゃあ、10時に駅前に集合ってことで宜しく』

「え？……………み、みんなって？ちよ、美空！？」

私の間抜けな声に期待した反応は返ってこず、一方的に通話が切れる。

てっきり美空と2人で行くものだと思っていたんだけど、どうやら違ったらしい。

私と美空とそして柚葉と……残りのメンバーは……うん、大体予想できてしまうな。

彼女たちが誘いに乗るのかはまだわからないけど、そうになると色々騒がしくなりそう。

「千晴さん？」

後ろから名前を呼ばれたので振り返ると、エプロンを身につけた柚葉がそこにいた。

彼女はパタパタとスリッパを鳴らして私の傍にやってくる。

「話し声が聞こえたんですけど……あの、もしかして草と……お話を？」

「しないから。美空と電話で話してただけだから」

「そうでしたか」

もしかして草と会話するような不思議ちゃんだと思われてるんだろうか。

柚葉の頭の中で私の人物像はいったいどんな風になってるのか、今度はずきりと聞いておきたい。きつと無駄に美化されて別人みたいになってるんだろうな。

「朝ごはんができましたけど、すぐに食べます？」

「うん、片付けたらすぐ行く」

「わかりました。準備しておきますね」

「…あ、ちよつと待って」

「はい？」

台所に戻ろうと背を向けた柚葉に声を掛けると、彼女は振り返って可愛らしく首を傾げた。

「柚葉は今日、暇？」

「そうですね。洗濯したりお掃除したりすることはありますけど、用事はこれと行ってないです」

「んじゃ、植物園に行かない？」

「わ。それってもしかしてデートのお誘いですか？」

「当然違います。言っておくけど最初に提案したのは美空で、他にも一緒に行く人いるっばいから2人きりじゃないよ。で、柚葉は来るの？来ないの？」

「もちろん、ぜひ一緒させてください」

「おっけー。美空にメールしとく」

簡潔に用件を書いて美空に送る。

するとすぐに返事が返ってきて、計5人で行くことになったからヨロシクねと書いてあった。

「ふふっ、楽しみですですね」

「……そだね」

みんなで出かけるのが嬉しいのか、柚葉は上機嫌に表情を綻ばせた。不安な気持ちもあるけど植物園は結構楽しみなので、今回は概ね彼女に同意する。

そういえば美空と柚葉以外のクラスメイトと出かけるのは初めてかもしれない。…ま、そんなことはどうでもいいか。

柚葉は朝食の準備をする為に台所へ戻っていったので、私は引っこ抜いた草や散らばった葉を集めて庭を片付ける。雑草以外に枯葉もたくさん落ちていたから、燃やすついでに焼き芋をするのもいいかもしれない。

以前はあちゃんと2人でやってみたことがあるのだが、あの時は火加減が上手くいかず、焼きすぎて真っ黒こげになったので食べられなかった。

おまけに火の勢いが強すぎて熱かったり煙を吸い込んだせいか気持ち悪くて吐きそうになったりと散々だったっけ。

今日は用事が出来たので無理そうだけど、今度またやってみるのもいいかもしれない。

(さてと)

あらかた片付け終わったので家にかかる。

約束の時間までまだまだ時間があることだし、まずは彼女が作ってくれた美味しい朝食を食べるとしよう。

「今日の朝御飯は何かな？」

「ふふ、今日はフレンチトーストですよー」

「おおっ」

「テーブルに置いてますから、先に食べててください」

台所から聞こえる彼女の声と食欲をそそる匂いに誘われて、食卓へ続く廊下を早足で進んだ。

待ち合わせ時間の、ちょうど10分前。

私と柚葉は待ち合わせ場所に早く着くよう家を出てきたつもりけど、駅前にはもうすでに3人の姿が揃っていた。

美空はこちらに気付いて元気よく手を振り、その隣にいた菜月もこつちを見た途端に花のような笑顔を浮かべ、平は暇そうに腕を組んで壁にもたれかかっている。

うむ、やっぱり思っていたとおりのメンバーだ。

「やつほー千晴、大須賀ちゃん！」

「こんにちは。みなさん早いですね」

「ううん、私たちも今来たところだから、そんなに変わらないかな」
「菜月は約束の時間の30分前にここに着いたって言ってたじゃない。私と美空はさっき来たばかりだけど」

「ゆ、裕子ちゃんっ」

平に本当のことをばらされて、菜月はわたわたと慌てていた。それにしても30分も前に来ていたなんて……待ってる間は暇だったろうに。

確か菜月は学校から帰る方向が駅方面だった気がするから、もしかしたら駅から近いところに彼女の家があるのかもしれない。

全員揃ったので、改札を抜けて電車の到着を待つ。

電車の時間に合わせて約束の時間を決めていたらしいので、あと数分もしないうちに来るみたい。

「ちょっと天吹。なんでもう疲れたような顔してるのよ」

ぼんやりしていると、隣にいた平が肘で小突いてきた。これからのことを考えていたので、それがおもいつきり表情に出ていたようだ。

「んー…これから電車に乗らなきゃいけないのかと思うと胃が痛くて」

取り繕う余裕もないので、正直に話す。

「え、なに、アンタって電車嫌いななの？」

「乗れないわけじゃないんだけど…色々と事情があつてね…」

「千晴は何度か痴漢に間違われて大変な目に合ってるから、それがトラウマになつてるのよね」

「……………」

あっさりと美空がバラしたおかげで平は呆れた目で見てくるし、菜月は困ったように苦笑いを浮かべている。

くっ、私だつて好きで間違われたんじゃないつての。

普通に電車に乗っていただけなのに、揺れてちよつと尻に手が当たっただけで手を掴まれて「この人痴漢です！」と言われたりすし詰め状態で押された拍子に転んで女の人に抱きついてしまつて手が胸に以下略なことがあったり、その他にもまあ色々あるんだけど。

それに痴漢に間違われるだけじゃなくて、昔は髪が短かったから同時によく男と間違われたこともあった。

確か、それから髪を伸ばしはじめたような気がする。同性だとわかると、騒動になる確率が減るから。

それでも痴女が出たとか騒がれることもやっぱりあるんだよね。…

…もつやだこの体質。

で、そんなことが何度もあった結果、当然のように私は電車に乗るのが嫌いになったのだ。

「今日は乗客も少ないと思いますから、きっと大丈夫ですよ」

「だといいいけど」

そう祈らざるを得ない。

人が少なくて席に座れると、人と接触することがないので問題は起こらない。

注意しなければいけないのは、人が多くて座れない場合だ。その場合、人との密着は避けられないのでかなりの確立で接触し問題が起こる。

「あ、電車来た」

「げっ」

到着のアナウンスが流れ電車がホームに勢いよく入ってくる。

次第に速度を落として、その電車はゆっくりと目の前に止まった。ドアが開いて、ぼつぼつと電車から人が降りてくる。

「……………う」

電車の中を見て、短い呻きが口から漏れた。

なぜなら、私たちの乗る電車の中は隙間がないほど人で埋め尽くされている状態だったから。

当然のように席は全て埋まっていて、立って乗る場所を確保するのも難しいかもしれない。

今日は人が少ない、なんて言ったのは誰だったっけ。むしろ平日の通勤時間帯より多い気がするんだけど。

「ど、どうしてこんなに混んでるのかしら…休日はこの時間はいつも人が少ないはずなのに」

「多分、あれが原因じゃない？」

そうやって平が指差した先には、一枚のポスターがあった。

「あつ！ 今日と明日は“農業祭”があるんだ」

農業祭とは隣町で行われる作物の収穫を祝う秋祭りのことだ。

小さな町だけと二日かけてやる大掛かりな祭り、毎年賑やかなので近隣の町はもちろん遠方からの観光客も多い。

「あちゃー、すっかり忘れてたわ。祭の日は普段利用者の少ない電車もバスも混雑しちゃうのよね」

「……帰っていい？」

「何言ってるのよここまできて。いいから覚悟を決めてさっさと乗りなさいよ。後ろがつかえるでしょうが」

「うっう」

「頑張つて、千晴ちゃん！」

覚悟を決める暇もなく平に押されて強制的に電車に乗せられてしまふ。

逃げ出そうにもしつかりと手首を掴まれており、逃走する隙さえもない。

そして無常にも発車を告げるベルが鳴ってドアが閉まり、ゆっくりと電車は動き出した。

もはや退路は断たれ、流れていく景色を見ながら溜め息を吐くしかない。

最悪な展開になってしまったけど、ドア付近の場所を確保できたのは不幸中の幸いだった。

こうして人ごみに背中を向けてドアに張り付いていれば、人を触る心配はないのだ。

よし、目的地に着くまでの40分間、ずっとこうしていよう。何が起きようが意地でも張り付いていよう。

「大丈夫ですか？千晴さん」

「なんとか。人がいっぱいいて落ち着かないけど」

袖葉とは背中合わせになっていて、電車が揺れるたびに彼女の温かな背中が自分の背に当たるのでくすぐりたい。

後ろが気になったので頭だけ振り返ってみると、袖葉の隣には平がいてその隣には美空がいた。

そして菜月は私の隣でふらふらと不安定に揺れている。バランスをとるのが苦手なのか、見ていて危なっかしい。

（あれ？）

一息ついて、ふと気付く。

（みんな、私を囲うような位置に居る…）

一番先に電車に乗ったはずの自分が、いつの間にか入り口のドアの近くにいた。

それに私の周りは友人たちばかりで“他人”がいない。

（……あ…そっか）

すぐに解る。

きっとそれは、偶然なんかじゃない。

彼女たちの、お節介なのだ。

私は何をしでかしてもフォローできるように。
不安を少しでも取り除く為に。

(駄目だなあ、私)

また守られている。そう感じて嬉しいと思うと共に、やはり少しだけ胸の奥が痛んだ。

みんなの優しさの上に胡坐をかいてる自分が情けなく思えて、俯いて自分の弱さを嘔み締める。

これじゃあ、今までと何も変わってないじゃないか。

「千晴ちゃん？大丈夫？」

「え？」

菜月が心配そうに顔を覗き込んでくる。

彼女はきつと、私が苦手な電車に乗って不安になっているのだと心配してくれているのだ。

気持ちはありがたいと思う。でも、今はその優しさがちょっとだけ辛いかもしれない。

「平気だけど……ってそれより菜月のほうが大変そうに見えるよ」「

小柄な彼女は電車の揺れに翻弄され、ドアにおでこをぶつけたり近くに居る体格のいいおじさんに時折押しつぶされそうになったりとかかなり大変そう。

菜月はバランスをとる事に集中しているのか、真剣な表情だった。

「わわっ、わわわ」

大きく電車が揺れて菜月がバランスを崩す。

なんとかその場は踏み止まったものの、このままじゃそのうち誰かを押し倒しかねない。

「菜月、こっち」

「えっ!？」

見ていられなかったので、困惑している菜月を自分の元に引き寄せながら私の場所と彼女のいた場所を入れ替えた。

私が今まで居た位置には手すりがあるから安心だし、後ろには柚葉がいるからいざというときに守ってくれるはずだ。

「ほら、危ないからその手すりに掴まって」

「千晴ちゃん、でも、」

「大丈夫だよ。私、菜月よりバランスとるの上手いから」

「うう……そういう問題じゃないよ」

それでも彼女は渋ってなかなか納得してくれない。

……まったく、私なんかよりよっぽど大変そうなのに。

自分のことより他人のことを気にかける彼女の方が心配になって、私の不安なんてどうでもよくなってきた。

ちいさなことをうじうじ考えて怯えていることが馬鹿らしく思える。

「いいから大人しくそこにいなさい」
「あう……」

さりげなく元の場所に戻ろうとする菜月の肩を掴んで引き止める。
困ったような、怒ってるような顔を向けられても、譲らない。

「む……平気なのに、もう」
「どこが。フラフラしてるじゃん」

口を窄めてちよっぴり拗ねた顔。コロコロと変わる菜月の表情が面白くて、見ていて飽きない。

彼女はようやく元の場所に戻ることを諦めたのか、抵抗をやめて大人しくなった。

けれどすぐ横にある手すりを掴もうとはせず、何故か私の腕にしがみついてくる。

不安定な私に掴るより、固定された手すりに掴ったほうが安定するの。

「……駄目？」
「いいけど、危ないよ？いろんな意味で」
「ううん」

彼女は首を小さく横に振ってから、子供みたいに純粹で曇りのない笑顔を向けてくる。

「千晴ちゃんの傍が、一番安心できるから」
「……………えー」

なんか凄い頼られてる気がするけど、買いかぶりすぎじゃないかな。普段のどうしようもない駄目人間っぷりを知っているはずなのに、どうしてそこまで信頼してくれるんだろう。私は、厄介事の塊みたいな人間なのに。

驚きを通り越して呆れたというか、だんだん申し訳なくなってきた。

電車が揺れて、私の腕を掴んでいる彼女の手の力が強くなる。

いつもなら落ち着かなくなるほど身体を押し付けられて密着しているとこののに、不思議と私の心は穏やかだった。

(…………え?)

ふと、自分の胸の内に湧き上がる、感じたことのない奇妙な違和感。

なんだろう?この感覚。

嫌ではないけど、何かがひっかかってなかなか取れなくて、もどかしい感じ。

あれ、でもこれ……………確か前にも

「千晴ちゃん?」

彼女の姿が“誰か”と重なって、次第に鼓動が早くなる。

『……………ちゃん?』

彼女の声が“誰か”の声と重なる。

それが誰なのか解らないけれど、私はその“誰か”を知っている気

がする。

その姿と声は、ずっと求めていたようで、でもずっと遠ざけていたかった。忘れていたかった。

それは、どうしてだろう？

だって、もう

「……………ッ」

わからない。

全然わからないけれど、息が苦しい。

頭の中がぐちゃぐちゃで、滅茶苦茶だ。

色々な感情が混ざって、溢れそうで、吐き気がする。気持ち悪い。

まるで、これ以上余計なことを思い出すなと警告するかのように、身体が震えだす。

「千晴ちゃん、どうしたの？」

「!?!」

袖葉の不安げな声が耳に届いて、混乱していた思考が冷静さを取り戻す。

途端、今感じていたものが嘘だったように消えてしまい、身体の震えも治まった。

「千晴さん？無理そうなら途中の駅で降り」

「だ、大丈夫！ちょっと電車の揺れに酔っただけだから平気」

「強がらなくてもいいわよ天吹。電車が怖いのなら怖いとはっきり言いなさい」

「こ、怖くないってのー!」

心配そうに気を使ってくれる袖葉たちと、いつも通り突っかかってくる平のおかげで気分が随分と軽くなった。けど……頭の隅にはさっきの感覚が残って消えない。

(なにか、思い出しかけてた)

少しだけ見えた、昔の残像。

何を思い出しかけていたのか解らないけれど、多分今のは私が忘れていた過去のひとつだろう。

結局まだ何も思い出していないというのに、ほんのちょっと昔の片鱗に触れただけでこのザマだなんて。

思い出す覚悟はしていたはずなのにこんなことで弱音を吐いて、私は昔のことをちゃんと思い出せるのだろうか。

これからきつと今みたいに些細なことで過去のことを思い出しにくくかもしれない。

もしかしたら、ここのあるところ昔の夢ばかりを見ているのは、忘れていた記憶を思い出し始めてるってことなのかな。

(自分で望んだことだけ)

忘れていた全てを思い出せたその時、私は……“重み”に耐えることが出来るのだろうか。

「千晴」

「な、なに？」

美空に肩を叩かれたので考えていたことを中断させる。

慌てて後ろを振り向くと、いつものように楽しそうな表情をした彼女の顔があった。

「植物園に行く前に喫茶店にでも寄って休憩しない？私、あの町にある人気の洋菓子店に一度行ってみたかったのよね」

「いいですね。私も甘いものが食べたかったのので是非行ってみたいです」

「甘いものと聞いて小腹が空いてきたわね。焼きプリンが食べたい気分だわ」

「私はオムレットが食べたいな。ね、千晴ちゃんは食べたいものある？」

「んっ、と……そだね、エクレア食べたい。あとマカロンとシュークリームと」

「ちょ……アンタ欲張りすぎよ」

「ふふ、甘いものは別腹つていいですからね」

さすがは女の子の集まり、あっという間に甘い食べ物の話で盛り上がる。

もちろん私も甘いものは好きだし、話をしていて楽しい。

「楽しみだね、千晴ちゃん」

「あ……うん」

いつも通りの菜月の柔らかな笑顔を見て、不意にドキリとしてしまう。

何度も見たことのある表情なのに何故か今は新鮮な感じがしたのだ。気のせいか……それかまださっきの余韻が残っていて、頭が混乱してるのかもしれない。

(ひとまず、ちゃんと落ち着こう)

気付かれないように深呼吸をひとつ。

過去のことを思い出すのも大切だけど、今のこの時間も、これからのことも、大事だから。

現実から逃避するわけじゃなくて、現在を大切にする為に。

今は、今を楽しまないと意味がないのだから。

「前から不思議に思ってたんだけど、千晴って上原ちゃんには特に優しいのよね」

「は？」

いきなり何を言い出すんだろう、美空は。いつものことだけど。

「それは多分、菜月が優しいからだよ。優しい人にはそれなりに優しくしてるよ」

「へえ…それじゃあ天吹が私に優しくくないのは、私が優しくくないからってこと？」

「え？これでも優しくしてるつもりですけど？」

「どこがよっ！！」

普段意識してるわけじゃないから、そんなこと言われても困る。

それに菜月のことだって特別扱いしてるわけじゃない。自分では普通に接しているつもりだったんだけど。

「上原ちゃんは上原ちゃんで、毎回あんなことされてるのにどうして千晴に話しかけるのか、ずっと疑問だったのよね」

「そ、それは…あはは、はは」

答えに窮したのか、困ったように苦笑いをする菜月。

それは私もずっと気になっていたことだけど、彼女は理由を話す気はないみたいだった。

「1年の時からずっとめげずに話しかけていたから、千晴にセクハラされるのが嬉しいのかと思ってたわ」

「違うよっ!?!い、嫌じゃないけど、嬉しいわけでも…ない…よ?」

「あ。私はむしろ嬉しいですからね、千晴さん」

「張り合わなくていいからね、柚葉さん」

素敵な笑顔でとんでもないことを言われた気がする。
なんだか、無性に泣きたくなった。呆れて。

「でも菜月って1年の時は天吹と違うクラスじゃなかった?」

「うん。でも、千晴ちゃんとは同じ委員会だったから」

ああそうだ。菜月と初めて会ったのは委員会の集まりの時で、確かに隣の席にちょうど彼女が座っていたんだった。

出会った時の事なんてよく覚えていないけど、私にしてはごくごく普通の出会い方で、彼女に気に入られる特別な出来事なんかも特になかった気がする。

委員会で顔を合わせるたびに菜月が一方的に話しかけてきて、それなりに会話をする仲になったんだっけ。

「まあ、上原ちゃんは分け隔てなく誰にでも優しいものね。懐が深いというか、胸が大きいというか」

「最後のは関係ないでしょ」

さりげない美空のセクハラ発言に、私と平の目が冷たくなった。

「……………私は、ただ」

菜月が何かを言いかけて、口を嚙む。
再び口を開いたその時、ちょうど到着のアナウンスが流れたので、
結局続きを聞き取ることができなかった。

電車の速度が次第に落ちていき、ゆっくりと駅のホームに止まる。

「美空さん、降りるのはこの駅ですよね？」

「あ、そうそう。みんな、ここで降りるわよー」

「……ふう、やっと開放される」

「行つとくけど帰りも乗るわよ？」

「あーあー聞こえない聞こえない」

しばらく待つとドアが開いたので、誰よりも早く電車から降りる。
降りた駅のホームも人が多かったけれど、人が沢山詰まった密室の
電車より断然マシだ。

「千晴、改札はこつちよ」

「はい」

この駅に降りたのは初めてだったのでキョロキョロしていたら、い
つの間にか先に行つて美空に呼ばれた。
慌てて駆け寄って、改札を抜ける。

「さてと、それじゃあ行きましょうか」

まずは小腹を満たすため、電車の中で美空が話していた洋菓子の
店に向うことにした。

これから味わうスイーツと、その後行く植物園のことを考えると柄

にもなく胸が弾む。

みんなと出掛けるなんて最初はどうなるかと不安だったけど、今はこういうのも悪くないって思う。

……そう思えることが、嬉しい。

「うう、寒い寒い。もうすっかり冬よねー」

「そうだね。もうちょっと厚着してくれば良かったかな」

冷たい風から身を守るように背を丸め、みんなと雑談しながら見慣れぬ道を歩いていく。

気になることもあるけれど、急いても解決するとは限らないから。

今は何も考えず、ただ、前だけを見ていることにした。

* * *

(良かった)

私の瞳に映っているのは、穏やかで楽しそうな表情を浮かべた彼女の顔。

さっきまで辛そうな表情をしていたから、元気になって本当に良かったと思う。

やっぱり彼女の楽しそうな顔や嬉しそうな顔を見ていたいから。

……本当はこうして彼女の隣に並ぶことは許されないこと。

でも、我慢できないで、こうして傍に居る。

私の身勝手な欲望のせいで、この先いつかきつと彼女を苦しめてしまっ日が来ると知りつつも。

彼女のことを想うのならば、近寄らなければ良かったのだ。

友人になりたいなど、願ってははいけなかった。

(それでも)

我慢できなかった。

罪悪感が心を締めつけていても、衝動を押さえることはできず。

1年の時、委員会の集まりで彼女を見つけたときにはもう、勝手に口が動いていた。

彼女と話すたびに欲は増し、友達になりたいと告げていた。

初めて会った、あの日。

ううん、“初めて会ったと彼女が思っている”、あの日。

あの時、私がどんな想いを抱えて話しかけたのか、彼女は知らない。

あの時、様々な想いが溢れて私の身体が震えていたことを、彼女は知らない。

知られてはいけない。

知って欲しいなんて、思ってはいけない。

(私…結局、自分のことばかり)

ごめんね、と声に出さずに呟く。

心の内での謝罪なんて、意味を成さない。

だからといって、声にして伝えることも出来ない。

泣き虫で守られてばかりだった昔と変わらず、弱いままだから。自分が傷つくことばかり恐れてる。

もう後悔なんてしたくなくて、強くなろうと決めたはずなのに。

今度は守られるのではなく、守ることのできる自分で在ろうと、そう、思っていたのに

「どうしたの菜月、さつきから黙って」

「っ!?! あっ、な、なんでもないよ千晴ちゃん」

「ほんとどうしたのよ神妙な顔して。まさか天吹、菜月が大人しくて何も言わないことをいい事に電車の中でいかかわしい行為をしたんじゃ…!」

「しないっての!大体そんなこと考え付く平のほうがかわしいわ」

「はあああああ!?!」

些細なことで2人はまた言い争いを始めてしまい、見かねた美空ちゃんも柚葉ちゃんが苦笑して仲裁に入っていく。

なんだかねで、千晴ちゃんと裕子ちゃんは仲がいい。自然体で言い合える関係が羨ましくて、妬けてしまう。

けれどそれは、私が望んではいけないこと。

彼女の傍に居ると決めたのなら、せめて最低限のラインだけは超えてはいけない。

時折胸が痛むけれど、そんなのどうでもよくなるくらい、今が楽しかった。

単に目を逸らしてるだけかもしれないけど、せめてもうちょっとだけ、今のままでいたい。

…いつか『その時』が来て、彼女が私を許してくれなくてもいいから。

「ほら千晴、いい加減にきなさい。平ちゃんも落ち着いて」

「ううーっ!」

「ふんっ!」

顔をしかめて睨みあっていた2人は、美空ちゃんに窘められてお互

いに顔を背けた。

うん……なんだか親に怒られた子供のように見えて微笑ましい。でもこんな表情、ちよつと前の千晴ちゃんはしなかったのにな。

「……っ」

遠くからみんなのやり取りを見ていただけの私は、拗ねた顔をした千晴ちゃんの傍に寄る。

すると彼女は照れ臭そうに頬をかいて、困ったように小さく笑ってくれた。

次第に増していく胸の痛みと欲を心の奥へ押し込んで、私も笑みを返す。

あまりにも懐かしくて、泣いてしまいそうになるのを誤魔化すように。

矛盾した気持ちを抱えたまま、笑うことしかできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2519r/>

Heroine Life

2011年11月25日23時59分発行